
デビルガンダムの野望

庵瑠璃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デビルガンダムの野望

【Nコード】

N0888H

【作者名】

庵瑠璃

【あらすじ】

ある世界に迷い込んでしまった非ガノタの高校一年生高嶺薫、ガノタの同じく高校一年生網走麗あはしりれい。そこは、デビルガンダムのある野望によって生み出された世界であった。

STAGE 1：月に吠える

：いてて。なんだここは…？俺は変なところに行き着いちまったらしい。

学校の帰り道、いつも通るトンネルに入ったら、急に底が無くなつて、…という次第である。

周りを見ると、いくつか建物が建っているが、奥には、石造りのでかい建物の上に人の顔っぽい変なでかい石像がある。空も、なんだか不思議な感じがする。蝶の羽のような…？

真後ろを見てみると、なんと、『ザク』とかいてあるでかい緑色のなんかでっかい人みたいなのがいた。

「なんじゃこりゃ…？」

思わず言葉が漏れる。

すると、遠くからなんか短足寸胴よちよち歩きな変な奴が3つ猛ダッシュでやってきた！…かわいいんだか怖いんだか…。そのうちの一つが、

「あなたの相手は私です！」

という女の声が聞こえた。

「あの機体…ボルジャーノン…？…ギヤバンはもう…」

わけわかんねえよ。この機体、『ザク』じゃねえの？

「…ギヤバンと同じ機体で…！」

だからギャバンって誰だよ！しかもなんか来たし！…ええい！やってやる！向かってくるなら、この『ザク』を動かしてやる！

俺は、ザク に攀じ登り、コクピットっぽいところに入った。

「…スイッチはここか…？…おおっ！」

キューーン…という音をたてながらザク が動き出す。

「ボルジャーノンが動き出した…！？」

ソシエは動揺している。

「やい！その短足寸胴よちよち歩き！あんたに恨みはないが、このザク で駆逐してやる！」

「何よ！カプルを甘く見ないでよね！」

「…何だよカプルって。その短足寸胴よちよち歩きのことか？」

「は？何言ってるの？」

・露骨に冷たくされた。まあ敵だからいいけど。

「…格好悪いってことだよ…！」

「格好だけで戦争ができるもんですか！」

確かに。

「…ええい、らちがあかねえ！」

俺はザク で腰にある斧を取り出した。なんか先端に熱を帯びている。

「うおお！」

だが、操縦経験ゼロ。当然、

「いでえ！」

ずっこけた。

「あんたの方が格好悪いじゃない！」

嘲笑している。くそう…どうにかならんのか…？
その時だった！

ビギューンビギューンビギューン！

ピンク色の3本の火線が流れる。

「そのザクのパイロット！戦闘の意思はない！下がっている！」

ガンダムに乗ったアムロがやってきた。フィン・ファンネルが
ガンダムのバックパックに戻ってくる。

「…まだ操縦に慣れてないな…」

「えっ…？」

「そんな旧型で慣れない操縦をしたら、すぐに落とされてしまう。ここは俺に任せろ」

：なんか頼もしそうな人だったので、とりあえず頼ってみることにする。

「あんな機械人形もあつたのか…？」

ソシエは驚いたように呟く。

「フィン・ファンネル！」

背中のフィン・ファンネルを3機射出し、3機のカプルを攻撃。

「きゃ、撃たれてる！」

ソシエは騒ぐ。

「ていや！」

ガンダムは抜刀し、一気に3機のカプルを斬った。

「きゃあああ！」

「…敵機撃破。大丈夫か？ジオン兵」

…じおん？

「…じおん？」

「…いや、アクシズか？」

…あくしず？

「…あくしず？」

「…んじゃあ、ネオ・ジオンか？」

ねおじおん？ねおじさん？

「…どうやら何も知らないみたいだな…」

「いや…俺…フツ…たかみながある高嶺薫^だけど…？ごくフツの高校一年だ
けだ」

「ん、何だ？」

いや、無視？

「新手だ！気をつける！」

白い人は危機迫る口調で俺を制止する。いや、俺なにもしてないけど…？

「ディアナ様…やっぱり…戦争はいけませんよ…」

ガンダムこと、罗兰がやってきた。両手にハンマーを持っている。

「どこの機体だ？…ネオ・ジオンでもなさそうだが…」

「環境を考慮ろ！」

は、サーベルに持ち替え、それをグルグル回しながら突進してきた。

「ちい！」

アムロはなんとかよけた。

「あなたたち！」

今度はハンマーをぶつけようとした。

「ぐあ！」

ガンダムは、ズザザッとダウンしてしまった。

「こんなことぐらいで！」

ガンダムはすぐに立ち上がった。

「ええい！」

は、ビームライフルを三連射した。

「当たれ！」

ガンダムは、宙返りしながらバズーカを撃つ。華麗にライフルを避けていた。

「痛い！」

ロランは目をつぶった。

「ええい！」

は胸からミサイルを6発射出する。

「ちい！」

ガンダムは必死に回避行動をとるが、

「ぐああ！」

またしてもダウンしてしまった。

「はああ！」

がサーベルでとどめをさそうとする。

（やばい…このままじゃ白い人がやられる…！）

「うああ！」

：俺はザクの斧を回転をかけて投げる。

「うああ！」

見事Hit!あの髭が怯んだ。

「でかしたぞカオル!」

片仮名?

「逃がすかよ!!」

ガンダムはサーベルを振りかざす!

「すみません…お嬢さん…」

を見事撃破。

「いい援護だったよ」

「いやあ、そんな…」

「…そうか…そんなこともあるのか…」

…この人は、アムロ・レイというらしい。俺とは違う世界で活躍しているらしい。

「…残念だが、もうお別れの時間だ。またどこかだな」

「あ…あの…アムロさん!」

「なんだ?」

「…ここは一体…なんなんですか？」

「…俺もわからん。自分のいる戦艦、ラー・カイルムに帰ろうとしたらこの様だ」

「そうですか…」

「…なにかあったら連絡してくれ」

「はい、わかりました。では…」

「達者でな！」

アムロさんは笑顔で見送ってくれた。…って、俺、どこへ行くんだ？…てかもアムロさんいねえし！
…スネ夫じゃないが、

「ママー………！」

完全にネタである。

STAGE 2：新たな宇宙へ（前書き）

引き続きの第二話です！楽しんで読んでいただけたら幸いです！

STAGE 2：新たなる宇宙へ

：ザク のコクピット内でネタ発言をしたあと、勝手にザク が動き出して、いずこにか飛んでいる。

なんか時空トンネルっぽいところに入り、変な空間を飛行している。

「…なんなんだよここ…アムロさんもわかんないって言ってたし」
とりあえずこの世界がなんなのか知らない何も始まらなそうだ。

ザク が時空トンネルっぽいところから出た。背景は宇宙っぽい
が、フツーに建物あるし、ホントにわけわかんねえ。

「そののリーオー…いや、そのの機体、」

急に男の声がした。アムロさんではないな。

「こちらはウイングゼロのヒロ・ユイだ。援護する」

「ああ…はあ…」

ちよい美形の男だった。でも、モニターを見る限りだが、タンクト
ップってなんだよ…寒そうだし。

「…バズーカを持っているのか」

バズーカ？ザク そんなもん持ってたっけ？…あっ、いつの間に腰
にある。ん？じゃあ斧は？…探してみる…あ、あるわ。武装が増え

たのか？

「んあ、ああ。あるよ」

「…その機体では最前線に出づらিদろつ。お前は援護を頼む」

「んああ、わかった」

「…もうすぐ敵が来る」

遠くからは、ビギナ・ギナとイージスガンダムがやってくる。

「…赤いほう…強そうだな」

「ああ、ガンダムだからな」

「ガンダム？」

「…ガンダムを知らないのか？」

「俺…まだこの世界に来てから一時間ぐらいしか経ってないんだよ」

「俺は今さっき来た」

「…えっ、マジで？」

「ああ、…来るぞ！」

…ヒロがウイングゼロを動かそうとするのがわかった。…って、なんか変形したし！なにこれ？なんか鳥さんみたいな感じになっち

やったよ??これ戻れんの?戻れんの?

「…何をしている。早く来い」

「ああ、スマン」

ちよつとはザクの操縦に慣れたのか、ずっこけるなんてことはなくなつた。

すると、敵の赤い機体もなんか変形したし!なんなんだよこいつら!?

「終わりだ」

そういつたヒイロは、ウイングゼロを元の姿に戻し、なんか強そうなビームを出し、赤くない方をダウンさせた。…なんか強え…。

「ええい、俺だつて!」

バズーカを取り出し、赤い奴に撃つた。キモ!気持ち悪いほど弾が曲がるんですけど!?

赤い奴はひょいと避けた。

「くそ!」

俺は舌打ちをする。

「そこか」

ウイングゼロはまたしても強そうなビームを撃ち、赤い奴をダウンさせた。

「スマン…不甲斐なくて…」

「十時砲火のきっかけになった。謝ることはない」

あ、意外と優しいわ。

「あ、ありがとう…」

「…来るぞ」

ヒイロは用心深いのか？

「はあ！」

ウイングゼロは抜刀し、起き上ったばかりの赤くない方をぶった切り、撃破。

「てえあ！」

俺も、赤い奴にバズーカを撃った。また避けられた。

「おのれ…」

イージスは、ザク を無視し、ウイングゼロに対し、バスターガンダムを召喚、照射。今にも、

「グウレイト！」

と聞こえそうである。ウイングゼロはこれをひらりと避ける。

「ウゝアイエイト！」

…ヒイロは何やら青い機体を召喚し、同じような照射攻撃を仕掛けた。直撃、撃破。

「…すげえ」

言葉が漏れる。

「…お前も仲間を呼べばいい」

ヒイロは、変わらぬ口調でいう。

「へえ…呼べるんだ…」

すると、次も全く同じ奴らがやってきた。

「俺に続け」

…はい、すっかりヒイロ君がリーダーですね。

ウイングゼロはあいもかわらず強そうなビームをドカインドカイン撃っている。

…あり、あつという間に2機撃破？すげえ。

「…訓練が足りない」

「んあ…だって、好きでこんなところ来たわけじゃないし、つい一時間前に初めてこういうようなの乗ったし」

…あ、ネガティブ発言…。

「……」

ヒイロは何も言わなかった。

しばらくそんな感じで、俺達の上に気まずい雰囲気が出る。
…重い…。

すると、今度は、赤くない奴は同じだが、白い機体が来た。

「…あの白い奴は俺が倒す」

ヒイロはさっきまでの空気を引きずってる感じはなかった。

「…援護する」

とりあえずこれを言うておく。

「セシリー、行くよ」

「シーブック、こっちは任せて」

今さっき言った二人組が仲睦まじく戦闘エリアに入ってきた。ムカつくわ。俺なんか、彼女いない歴〃自分の年齢なのにイ！

「…てめえらいちゃついてんじゃねえよ！」

手首にあったクラッカー弾を投げまくる。すると…

「ぐあ」

…やべえ。ヒイロにも当たっちゃった…。

「邪魔をするならお前も殺す」

「す…すいませんでしたー！」

ちよつと調子乗りすぎたわ…。気をつけよ…。

それからというものの、戦況は良くなって、相手がラフレシアっていう奴を二つ召喚してからは、ヒイロ、俺共到大ダメージを喰らい、劣勢になってしまった。

その時、ヒイロが、

「いくぞ！」

といった。

「…はい？」

「通信ボタンをすばやく二回押せ！」

「んああ、わかった」

カチャカチャ、と二回押した。すると、コントロールパネルに、

『Gクロスオーバー発動！ ピースミリオン ビグザム』

と出た。ステージには、マーカーが出現した。横に長い棒が一直線に流れているものと、放射状に三本の細い筒みたいなのが出た。

「なんだこりゃ…」

驚き呆れ果てるしかなかった。古語でいうとまさに

「あさまし」

である。

んなことはどーでもいい。

ピースミリオンとやらが突っ込んできた。白い奴、いや、肩に『F91』と書いてある、が轢かれた。きりもみ回転してる。

今度はビグザムとやらが来た。

ビグザムは、ズシンズシン歩きながらマーカーに沿って（元祖）ゲロビを撃った。見事、セシリーの乗るビギナに直撃。2機ともダウン。大逆転である。

「これで終わりだ」

：ヒイロは、分かれていた大型ライフル2挺を1挺にまとめ、発射体勢に入った。F91を起き攻めしようというのだ。テラ鬼ス！

「シーブックはやらせない！」

セシリーとやらが既に起きていて、ヒイロに攻撃を仕掛けている！やらせるか！

「うおおー！」

お決まりの、必殺！斧投擲！

「ああ！」

見事セシリーに命中。バズーカが当たらなくてなんでこっちが当たるんだろうか？不思議でしょうがない。

「シーブツク！」

そのままセシリー機は沈んだ。…やった…！初めて敵を落とした…！

「…すまない、助かった」

ヒロが俺に言ってきた。

「っ！セシリー！これなら…！」

F91は、急になんだか黄色いオーラを纏い始めた。動く度に残像が発生している。なんなんだよこれ。バズーカを撃つてみる。当たったか！？…いや、外した…。残像に当たったのか？

「くそう！」

どうやら弾の誘導は、残像にかかるらしい。

「くう…！」

ヒロはなにやらキーを打っている。

『ZERO』

ヒロはEnterを押した。すると、

『ERROR』
と出た。

「くっ、何故だ！」

もう一回、

『ZERO』

と打った。だがやはり、

『ERROR』

と出た。

「何故なんだ！？……！！？ディスクが入っていない…！！？」

ゼロシステム用のディスクがオミットされているらしい。

「…状況は最悪だ…」

ヒロは初めて弱音を吐く。

「下がれ！」

F91はウイングゼロに 斬りかかる。

（まずい！ヒロがやられる！どうすれば…）

・俺は迷っている。どうするかを。

（どうすんだよ…これしかないのか…？）

俺は決断した。

(ヒロ…スマン！)

「うおお！」

クラッカー弾を投げる。範囲攻撃なら残像もクソもないと思ったからだ。

「なんとお！」

シーブックだけが叫ぶ。どうやらヒロには当たらなかったみたいだ。そのままF91はダウン。オーラも消えた。

「ヒロ！！今だ！！」

俺はヒロに起き攻めを促す。

「…！」

ヒロはやつと気付いた。

「俺は一体何をしている…！！……………任務、了解！」

ウイングゼロは、またしても2挺のライフルを1挺にまとめ、照射攻撃の準備をする。

「…破壊する…！」

ヒロはトリガーに指を掛けた。

ブアアアアアー！！

「死ぬのか…僕は…」

F91が墜ちた。

「…任務、完了」

ヒロは呟いた。

「…お前にはいろいろ気を遣わせたな」

「なあに、いいってことよ！」

「…何かあったら連絡してくれ。こちらもこの世界のこと全くわからん」

「ああ、わかった。そっちも、なんかわかったら連絡くれよな」

「…わかった」

「…じゃあな！ヒロ！またどこかでな！」

ヒロは相変わらぬ無表情で俺を見送る。

このザク、回数を重ねる毎に強くなってる気がするのはいけのせいだろうか？

STAGE 2：新たな宇宙へ（後書き）

ヒロ君が意外（？）な面を見せてくれました！何かご要望があれば、是非下さい！

STAGE 3：最前線（前書き）

主人公が一旦変わります（汗）ご了承ください…。

STAGE 3：最前線

…痛った。なんなのよこ…。

友達と遊んだ帰りに自転車乗ってたらなんか電信柱に正面衝突して、目の前が真っ白になって…ていう次第なの…。

…えっ？あたし？あはしりれい網走麗よ。よろしく。…って、誰に言っただ？周りの景色をみると、いくつか建物がある他は、高低差が激しい土地（？）だった。奥には、丸形にくり抜かれた黒い山があった。

「…ん？」

小高い丘みたいなところに、何かが埋め込まれてる感じだった。…あれ、アップサラスじゃない！？ガノタの私はすぐわかる

すぐ後ろをみると、あら、ジムじゃない！本物のジム初めて見た！やっぱり大きいなあ。乗りたいなあ。

あたしは好奇心100%でジムに乗ってみる。いちごじゃないよ。

「わあ、コクピットだあすごい！」

我ながらはしゃぎすぎだ…。

「スイッチこれかな？…わっ、」

各所のパネルが光りだす。

「…ホントに動くのかな…？」

操縦桿に手を掛ける。

ガシャン！

ジムが歩いた！

「わぁ！」

コクピット内が振動でめっちゃ揺れた。…アムロとか、キラとか、ホントにすごいんだなあ。

「ふう…」

もう疲れちゃった。

「はぁ…」

私は、コクピットのシートに踏ん反り返った。
すると、ジェット・コア・ブースターが上空を飛んでいるを見た。

「ジェット・コア・ブースターといえば…！」

ノリス・パッカード！

ノリス機が降りてきた。照り輝く太陽の下で、ズン、と着地。

…待てよ。今私が乗っているのは…ジム…連邦の機体…。…ノリスは…ジオン…まずくね？？

「貴様連邦か？」

意外とソフトに聞いてきた。ホッ。

「機体は…そうみたいですけど…私は…」

「…軍服も着てなければ、パイロットスーツも着ていない…民間人だな？」

さすがノリスさん！話分かるう！

「あ…はい！えー、私、網走麗といいます！よろしくお願いします！」

…私は今、二次元キャラと話をしている。…よく考えると異様だ…。
…なんか、全国のノリスファンに申し訳ない…。

「アバシリ、敵が来るぞ！」

やっぱり片仮名なのね。

「はい！」

（うむ…やはり敵意はないみたいだな…）

ノリスは呟く。

…陸戦型ガンダムが二機こちらにやってきた。陸ガンは、ジムとは友軍機だけど、今はノリスさんについての方が良さそうだ。

「アバシリ！援護を頼むぞ！」

ジェット・コア・ブスターにワイヤーを引っ掛けながら、放物線状に、ノリス機、グフ・カスタムは移動している。

「いいや！」

陸ガンをズバツズバツと斬った。陸ガンはダウン。

「…ええい！私も！」

ジムは、右手に持っているビームライフルを撃った。

ビャン！

「当たった！」

ジムの放った火線は見事陸ガンに命中し、よろけた。
：その隙に、私は間合いを詰める。

「たああ！」

ライフルを捨てて、抜刀した。
袈裟斬り！二段蹴り！ジムドリル！

「民間人にしてはいい腕だ」

ノリスさんが褒めてくれた！

「あ、ありがとうございます…！」

私ってお調子者だな…。

「…来るぞ！アバシリ！」

「はい！」

やっぱりテンション上がるなあ。

「いいや！」

グフカスは陸ガンを斬る。

「当たれ！」

私は、ビームライフルを撃つ。

「甘いわ！」

グフカスは、陸ガンにワイヤーを射出し、Hit。そのまま多段居合斬り。陸ガンを撃破！さすがノリスさん！

「いけえ！」

袈裟斬り！逆袈裟斬り！はたまたジムドリル！
陸ガン倒したあ！

「いい動きだが、無茶はするなよ」

「あ、はい！」

私は従順に返事をした。なぜかノリスさんの言うことには逆らえない。恐るべし、年の功パワー！
突然、ノリスさんが声をあげた。

「ん！？来たか！！」

ノリスさんは、今までの沈着ぶりを崩し、若いお兄さんばりの熱さを彷彿とさせた。

「…シローといったな…貴様がアイナ様の…」

シロー・アマダが来たのかな？

「たとえジオンでも、俺はアイナが好きだーーーーー！！」

相変わらず熱いですねえ、シロー君。

「こいつは私に任せろ！アバシリはもう一機を！」

「あ、はい！」

「…ん！？あの機体、連邦のじゃないのか！？」

てへ ゴメンネ！

「裏切るな！」

「裏切りではない。この者は民間人だ」

ノリスさんは、補足してくれた。さすが！

「…ええい、埒があかない！」

シローは100mmマシンガンをばらまく。これが意外にも厄介。

ちゃんと回避しなくちゃ。

「よっ！…っとな！」

シローは、避けた隙にミサイルランチャーを何発も撃ってきた。

「おっとなっとなっとなっ！」

ひゃゝ大変！

と、そこにノリスさんが。

「甘いわ！」

グフカスの四段斬り！

「ぐあああああ！」

ムルタ・アズラエル？

「あ…ありがとうございます！」

「お前はもう片方を！」

「わかりました！」

私はすぐにもう一機の陸ガンの方にジムのバーニアを吹かす。

「当たたれい！」

ビャン！

ビャン！

ビャン！

ズンダでダウン！向こうの体力もあと僅かね…。
くるん！とバク宙しながら陸ガンはダウン復帰した。

「さあて起き上がったところでお決まりのオ！」

袈裟斬り！逆袈裟斬り！ジムドリル！

ドカァン！

「やった！倒した！ノリスさんは？」

ジムを歩ませると、

「ひと思いにやれーーーー！！！」

…あり、もうおしまい？今はシローの声だが、どうやらもう終わ
ったらしい…。…早。

「貴様やるなあ」

「ありがとうございます！」

「事が落ち着いたら、ぜひ我らジオン公国軍に入ってくれ」

「私…アースノイドですけど、いいですか？…てゆーか、こー、どこですか？」

「…私も分かん。…だから、何か分かったことがあったら必ず連絡してくれ」

「あ、はい！わかりましたあ」

すると突然、ジムがバーニアを吹かし始めた！

「きゃ！なんなのこれ！？」

あ…ノリスさんが遠くなつてゆく…。

「…あ、あの娘、私の質問にこたえなかったな…」

ノリスはちよっぴり落胆した。

STAGE 4：ゼータの鼓動（前書き）

引き続き、麗視点です。PVが1000を超えました！みなさん、ありがとうございます！

STAGE 4：ゼータの鼓動

：はあゝ。このジム、どこへ行くんだろう…。なんか時空トンネルみたいなのに入っちゃったし、もうわけわかんない！

あ、出口だ！光が見える。次は？

周りを見てみると、（またこのパターン？）なんか凸凹してて、背景は私の大好きな宇宙！ひゃっほい！

「ん…連合のダガー？」

「…わあっ！！びっくりさせないでよ！心臓止まるかと思った…」

当たり前だよ。急に機内のスピーカーから大音量でvoiceが入ってきたんだから…。

「ああ、ごめんね。僕はフリーダムのキラ。よろしく」

「……………ああ！キラなの！？」

「……………？…？？」

キラは激しく困惑していた。やってしもた。なんかやってしもた。でも、今の困惑したキラ、なかなか可愛い…。

「…ああ、ごめん、人違いみたい…」

とりあえずそうごまかしておく。

「…ん、そう？…それよりも…その機体…？」

「ん？ああ、RGM-79、ジムよ！」

「RGM？…きいたことないな…」

キラ君はますます困惑しなさっています。可愛い。

…ん？待てよ？ノリスさんもいて、キラもいる…？…ここって、クロスオーバーされた空間？ひゃっほい

「…あ…君、そういえば、名前は？」

「ん、ああ…網走麗よ」

「よろしくね、レイ」

やっぱり片仮名なのね。しかも、なんかレイ・ザ・バレルとカブるし。

「…ん、来た…」

キラはボソツと呟くように言った。

「…覚悟はある…僕は戦う…」

敵が来たらしい。

「キラ、援護するわ！」

「……あ、ああ、よろしく」

キラ可愛い。

向こうからは、ガンダムMk と、ビギナ・ギナがやってきた。
…ホントにシリーズがメチャクチャだな…。さっきは08小隊に統一してたのに。

「レイ、援護をお願い」

「うん」

私はジムを前へ進ませる。
すると、

「わぁ！」

ビギナがぐるぐる回転しながらいろいろ乱射してきた！怖い！バーニアを吹かして逃げるが、

「きゃあ！」

数発被弾してしまった。ジムがダウンした。

「動け！動け！動け！動け！動け！動け！動け！動け！動け！動け！
！エウ、ア…ジム！！」

ガコガコ操縦桿を動かす。アノヒトみたいに。

数秒後、やっとジムが起きてくれた。

「…ええい…ナメてくれるじゃないの…」

そう言いながらコントロールパネルを見してみる。

「…え？…殆どダメージ受けてないじゃない！」

見ると、損傷率がたったの2・5%だった。

確かに、外見、ジムが少しこつつくなっているように見える。

どうやら、一回目の戦いでは、プレイヤー（ここでは、薫と麗）に標準装備で戦わせて、二回目では、そのプレイヤーに合った武装に換装（オプシオンを追加）してくれるらしい。

薫のザク の場合は、バズーカとクラッカーが追加されていた（バズーカはハズレだったみたいだが）。麗のジムの場合は、今のところ、装甲強化以外の追加は見受けられない。

「さあ…どんどんいくわよ！」

「…無理は…しないでね…」

キラやっぱり可愛い。

キラは、原作さながらの暴れっぷりを披露。

「引くんだ！」

（ルプス）ビームライフルを撃つ。

「どうして君は！」

お馴染みハイマツトフルバーストでガンダムMk- を撃破。派手だねえ。

「私だって！」

袈裟斬り！二段蹴り上げ！ジムドリル！

ビギナを撃破！

そういえば、抜刀してから気付いたが、ジムのサーベルの長さが長くなってる気がするのはきのせいだろうか。

「上手だね。この調子で頑張ってね」

「うん、ありがとう」

あゝ… ホントに全国のキラファンに申し訳ないわ。

しばらくして、今度は、ガンダムMk- とZガンダムが来た。

「敵に入られた？迎撃します」

パイロットはエマだった。さっきのはパイロットがいなかったけど、なんだっただろうか？

「貴様のようなのがいるから、戦いは終わらないんだ！消えろ！」

…はい、カミーユ君ですね、わかります。

「…レイ、いくよ」

「うん」

フリーダムとジムは散開し、迎撃体制に入った。

…ガンダムMk-の方がスペックが低そうなので、そちらを狙った。

「いけえ！」

ビームライフルを撃つ。

「っ！」

エマは、Mk が被弾し、声になっていない声(?)をあげた。
うーん、女の私からしてみたら…萌えない。

キラも私と同じ考えなのか、Mk にフルバースト！Mk ダ
ウン！

「エマさん！」

カミーユが声をかける。

「心配しないで」

エマはカミーユに優しく諭すように言った。

「しかし…」

M k はダウン復帰。

「そこ！」

M k は、ビームライフルを撃つ。

「おっと！」

私の乗るジムはこれをひらりと避ける。

「そこだ！」

私はビームライフルを撃ち返す。しかし、避けられた。

「狙いが甘いようね」

くっっ！ムカつく！
と、そこに！

「当てる！」

フリーダムがバラーエーナ・プラスマ収束ビーム砲を撃った。

「っ！」

エマは恒例のアノ声を出した。そこに、

「落ちろ！」

Ζガンダム（カミーユ）がハイパー・メガ・ランチャーをフリーダムに向けて撃った。危ない！キラ！

「仕方ない！」

すると、ものすごいスピードで瞬間移動した。バラエーナ発射の隙を見事に消したのだ。…すごい。

「下がれと言ってるだろ！」

キラはまたしてもMk にフルバースト。…今日で何回目？そして、エネルギー大丈夫？…あ、フリーダムはニュートロン・ジャマ！・キャンセラーだから平気か。

その時だった。時が一瞬止まった。…どうしたの？

「こんな…これは…！？」

キラも困惑している。

「エマさん！」

「カミーユ！私の命を吸って！」

…臭。てかマジム力つく。あたし、彼氏いない歴〓自分の年齢なんだよ！ム力つくんだよ！

…気を取り直して、ジムのコントロールパネルを見ると、
『Gクロスオーバー発動！ コロニーレーザー コロニーレーザー』
コロニーレーザーって…グリップス2…？ヤバイじゃん！

フィールドには、端から端まで伸びている大きい筒状のマークが出現した。

「ああああああ！」

あれ、エマさんが。

エマは、耐久値がゼロになる寸前に、カミーユにGクロスオーバーの発動要請をしたらしい。

しかし、多段ヒットのハイマツフルバーストの照射中であつた。

発動エフェクト終了後に、更にダメージが入り、ガンダムMkは撃破されたのだ。

それに対し、カミーユは、

「貴様：貴様：貴様アアアアア！」

：Zの装甲が赤く光り出した。覚醒したのか…？
…って！

「きゃあ！」

Zのハイメガを喰らってダウンしてしまった！しかもグリプスの射線上に！

「レイ！」

キラは心配してくれたが、

「ここからいなくなれ！」

Zはウェイブライダー特攻をフリーダムに仕掛けた。

「だあっ!?!」

フリーダムは完全にZに捕縛された。

「なにっ…!?!」

耐久値がみるみる減ってゆく。

「あっ!」

フリーダムはその場に倒れた。

「キラ!?! きゃあああ!」

ジムもグリップス2の照射に巻き込まれた。
一気に形勢が不利になった。

…すると、キラが言った。

「…レイ、行くよ!」

「えっ?」

「通信ボタンを素早く二回押して!」

「わかったわ、キラ」

キラに言われた通り、通信ボタンを素早く二回押した。すると、コントロールパネルにはこう表記された。

『Gクロスオーバー発動！ デストロイガンダム コロニー落とし』

…えっ、規模でかくな？デストロイはともかく、コロニー落しって…。

フィールドには、台形の形をしたマーカーがフィールドを横切るように流れていて、もう一つは、筒状のマーカーが、そこから斜めに落ちてくるように流れている。それぞれ、デストロイガンダムとコロニー落としである。

「くっ！」

カミーユは、ウェイブライダーで逃げようとする。キラは逃がさまいと、なんかの合図をした。

「頼む！」

「任せろ！キラ！」

おお！！カガリのストライクルージュ！呼べるんだ！

カガリは三回ビームライフルを撃った。Zは、被弾により、強制的に変形解除され、よろけた。

「当てる！」

フリーダムはまた、バラエーナを撃つ。命中！Zは円形のマーカー内にダウン。

カガリのルージュはいつの間にかいなくなっていた。

Zが起きた。と同時に、デストロイがやってきた。ビームをいっぱい出しながらフィールドを横切っている。また、しばらくしないうちに、コロニー落しが…。コロニーは、見事、Zに命中！

「ああっ！」

コロニーの衝突でZが空中でぐりんぐりん回転している。

「ぐお…」

Zは地面にたたき付けられた。

「…私も…キラがカガリを呼んだみたいに、誰か呼べるのかな…？」

『呼び出しボタン』というのがあったので、押してみた。

「…ポチッとな！」

ポチッ！

すると、

「アバシリ！援護するぞ！」

ノリスさんだ！！グフカスだ！！

「あ、お願いします！」

すると、グフカスは、今起きたばかりのZに、ワイヤーを飛ばした。命中！

「ううっ！」

Zはスタンした。

「今だ！アバシリ！」

「はいいいいいい！」

袈裟斬り！二段蹴り上げ！ジムドリル！

「ううあああああー！」

やった！Zを落とした！

「MSの操縦、上手だね」

「あ…ありがとう…」

「お前、どこの軍だ？」

さつきはどこかへ行ってしまったカガリがきいてきた。

「私、民間人だけ…」

「嘘だろ！？お前！？」

「…でも、僕も、初めてストライクに乗ったときも、民間人だったよ」

「キラ…」

「…んまあ、なんにせよ、全員無事でなにより、って感じ？」
私になぜか宿める。

「うん。またどこかで会るといいね」

「うん…」

「…レイ？」

「…この世界って、何なんだろう…？…キラはいるし、カミーユもいるし、…」

「…僕もわからない…だから、何かわかったことがあったら、連絡してね」

「うん、わかった！キラもね」

「うん。…そういえば、そちらの方は…？」

「…あ、ノリス・パッカード大佐よ」

「ノリスだ」

「そのグフ…ザフトのものですか…？」

「ザフト？私はジオン公国軍だ」

「ジオン…？…聞いたことないですね…」

「……様々な世界が混交している……。…今わかるのは、それだけだ」

ノリスが断定！

「…あ、もうすぐ時間だわ…」

ジムのコントロールパネルは、私を急かしていた。

「じゃあね！キラ！カガリ！」

「またどこかで！」

「元気だな！」

「…ノリスさん、」

「私は別の所へ行かなければならん。すまん」

「…はい、わかりました！」

ジムとグフカスはバイバイし、ジムは時空トンネルっぽい所へ、グフカスはいずこに消えてしまった。

「さて…次はどんなキャラが味方なのかしら…？」

…私はとても楽しみだった。

STAGE 4：ゼータの鼓動（後書き）

…えーっと、前々回のGクロスオーバーのビッグザムが好評ではなかったので、当初の予定通りにコロニー落としに変更しました…。もし、ビッグザムがよかった、という人がいらっしやったら、ごめんなさいorz！今回、初めてモビルアシストが出てきましたが、薰や麗が使えるモビルアシストは、今まで一緒に戦ったことのある人を呼べる、というものです。それはさておき。これからも応援よろしくお願いします！

STAGE 5：その名は東方不敗！マスターアジア見参！

：俺は、ヒロとお別れして、またしてもザク で時空トンネル
みたいなやつに入った。

「あゝヒロみたいに強くなりてえゝ」

ぼやいた。マジ強かったもん。（特に起き攻め）
あくびをした。

「んあゝ」

すると突然。

「ああ！ザクじゃん！」

何だ？女の声？

「ガナーザクウォーリアじゃない！…もしかして、今度はディアッ
カ！？」

どこにいった？てか、でいあっかって誰だ？

「後ろよ、後ろ！」

「あ、後ろか」

後ろには、このザクとは少し違う人型の機械がいた。…なんだコイ

ツ。味方なのか？

「なんだ、ディアッカじゃないのか…」

なんか残念がつてる。悪かったな。

俺は、おもむろにザクのコントロールパネルをみる。おろ、また武装が変わってる。

『オルトロス』

というでかいランチャーを持っているらしい。しかも、機体名が、ザクではなく、

『ガナーザクウォーリア』

というらしい。なんかややこしいわ。誰か、ザクとの違いを教えてください。

「あれ、なんでルナマリア機じゃないのに、斧持ってるのよ？」

「るなまりあき？月鞠アキ？」

「ちやう！ルナマリア専用機ってこと！」

「…これが？」

「じゃないのにつていつてんじゃん！」

「しらねーよ！この変な世界に来るまでガンダムなんて全然知らなかったし！」

「じゃあなんで乗ってるのよ？」

「こっちが知りてえよ。成り行きとノリでこーなったんだよ」

…てことは、私と同じ立場ってことか…。 ははーん…。

「…ねえ、誰かと会った？」

「んあ？アムロさんとヒロ」

「ええっ！！！？？ヒロと会ったの！！！？？」

「五月蠅いよ！少しボリューム下げろよ」

「えゝ羨ましゝ」

「まあ、アイツ強いしね」

「カッコイイしねゝ」

「…服装が？」

「えゝ萌えるじゃん！」

…あ、コイツ腐女子か。

「腐女子ですが何か？」

「いえ、なんでもありません」

自覚してんならいいや。

トンネルから出た。着いた瞬間、女が、向こうを見ながらいった。

「…ん、なんか来るわよ！」

「来るのか？」

「ええ、Vガンが2機…非ガンダムタイプ同士でどこまでやれるかしら…？」

「…お前のそれは…ガンダムじゃないのか？なんかガンダムに似てるけど？」

ライフルとシールドもあるし、最も、二本の角っぱいやつもあるし。

「確かにジムはガンダムの戦闘デー…あれ！？ジムじゃない！！M1アストレイになってる！」

「なんだそりゃ」

「…とにかく今は応戦よ！」

シカッティング？

とりあえず応戦することになった。

なんかビルがいつぱいあって戦い難いなあ…。これじゃあオルトロス当たらないだろ…。

「はああ！」

あの女は元気にサーベル振ってんなあ。ちったあライフル使えばいいのに。せつかく持ってたんだからさ。

一方のこちらは、全然攻撃が当たらずに難儀していた。

「くそう、くそー!」

なんで当たらん!

待った。落ち着け。ヒイロはどう当ててた?

「終わりだ」

「そこか」

「……………あっ!」

わかった。ヒイロは、敵の着地の硬直を狙っていた。どつりで俺の

バズーカとかオルトロスとかが当たらないわけだ。

あの女が言ってたVガンとやらが空を飛んでいる。いつになったら着地するのだろうか。

そう思いながら悠長に歩いてると、なんか脚が飛んで来たんですけど！？怖！！

「おつとつと！！」

こんなお菓子があつた気がする。

そんなことはぶっちゃけどうでもいい。

Vガンは尚も航行中。

「くそ、いつになったら…」

そう思った次の瞬間、Vガンがブーストを切らした。

「よし！」

俺はオルトロスを構える。

「そこだ！」

オルトロスを撃った。同時にVガンはビームライフルを撃ってきた。シールドも張ってきただ！？

ビーン…

という鈍い音がVガンから鳴る。Vガンがビームライフルを撃ってきたので、当然、

「うぁ！」

被弾した。ちくしょう…一方的にやられてんじゃねえかよ…。

「こうなったら…」

俺はクラッカー弾を投げた。Vガンは避ける。

「かかった！」

俺はオルトロスを撃つ。

やった！当たった！ダウンした！

クラッカー弾を投げたのは、Vガンを動かすorシールドを張らせて隙を作らせることが狙いだったのだ。

「さて、あの女は…？」

ちょっと気になる。さっきから声が聞こえない。

俺は、ガナーザクウォーリアとやらのブーストを吹かす。

「あぁっ、あ、ああ！」

エロいな。…言ってる場合ではない！

俺はすかさず、頭と足だけになってるVガンの格闘を止めようとす
る。

「そこだ！」

ドシュウ！

とオルトロスを撃つ。

ブァン！

当たった！見事ダウン！

「はぁ…ありがとう…」

「んああ…大丈夫か？」

「なんとか…」

「あんま無理すんなよ」

俺は、はじめにダウンさせた方のVガンを見ながら言った。

「…起きたのか…？」

オルトロスを構える。すると、

『CHARGE』

という文字がコントロールパネルの中でピカピカ光っている。

「なんだこれ…？」

興味半分で使ってみた。

ブァァァアアアア！！！！

ごつつい火線が戦場を横切る。Vガンダムは回避できずに蒸発。
…びっくりした。こんなの興味半分でやるんじゃないかな…。

「すごいじゃない！」

女は褒めてくれた。

けど、あまりにも呆氣に取られていたので、何も答えられなかった。

「…もう片っぱがくるわ!」

あの女の乗るM1アストレイとやはら、ライフルをしまい、ポーズをとった。

「たああ!」

M1アストレイはサーベルを両手にクロスにして持ち、Vガンに突撃。ズバツとX字斬り!撃破!

「やったあ!」

結構無邪気だな。歳は俺とそう変わらんみたいだが。

今度は、少しあせた感じの白色をしたガンダムっぽい奴が来た。

コウ・ウラキだ。

「ここから出すわけにはいかない!」

「ベジータが来たわ!」

はあ!?!ベジータ?!あのドラゴンールの?

「行くわよ!」

M1とやはらは、ベジータ(?)に呐喊。Vガンももう1機来たので、そいつを叩くことにした。

「てえや！」

「くっそおー！ー！」

コウは、M1の猛攻に耐えられなかった。
立ち上がり、反撃を仕掛けた。

「そこ！」

バズーカを二発時間差で撃った。

「ふっ、そんなもの！」

しかし、

「きゃ！誘導が！」

誘導の強いフォールディングバズーカの弾は、一発のみだが命中、
ダウン。

「おのれ……！」

一方のガナーザクは。

「喰らえ！オルトロス！」

ドシュウ、とオルトロスを撃つ。命中、ダウン。

「…さて、ヒロのやってた起き攻めをしてみるか」

：俺は、オルトロスを、寝ているVガンに向け、照射攻撃の準備をした。

……起きた！

「いけえ！」

ブアアアアア…

…外した。Vガンに避けられてしまった。そして、Vガンは、脚を飛ばしてきた！

「ぐうわ！」

ザクがダウン。

「くそう…調子に乗るんじゃないかった…」

反省。

「地道にいきますか！」

ザクを起こし、クラッカーを投げた。よし、よろけた。

「たまには格闘でもしてみるか」

斧を持ち、四回斬った。ダウン…いや、また起きた。

「なら…！」

必殺！斧投擲！

ザク！（ザクなだけに）

Vガンに撃破！M1とやらは？

両者とも攻撃がまともに当たっていない、と思ったら、やられてんじゃない！

「あの距離じゃあ、クラッカーもオルトロスも、斧も届かない…」

さっき投げた斧を回収しながら言った。

「照射攻撃しかないのか…？」

M1が格闘を喰らっている。

「迷ってらんねえ！」

俺は再びオルトロスを構え、照射攻撃体制に入った。

「…今度こそ…！」

ブアアアアアーーー！

「なっ、何イ！！？？」

ガンダムが散った。

やった…当たった…！

「はあ…、ガナーザクの人、」

「なんだい」

「…名前は？」

「高嶺薫」

「……………ぷくく…男なのにカオルう？かわいい」

「消えろ」

「！…冗談よお…」

あら、ちよつと言い過ぎたかな？

「…うん、なんか、ごめん…m（——）m」

「う、ううん、別に！あたしも悪いし！あたしは網走麗！よろしく！」

こいつ、性にひねりがないな。

それなりに好感が持てるわ。ホントにそれなりだけど。

「ん、なんか来る！」

網走が何かを感知したかのように言った。

「ふっふっふっ、来おったか…なぶり殺しにしてくれるわ！」

「マスターアジア!？」

：なんと、マスターアジアこと、東方不敗がマスターガンダムに乗って、奥の一番デカイビルの上に着地。

もう1機いた。あれもマスターガンダム!？

ピピピッ!ピピピッ!

M1アストレイのコントロールパネルが騒ぐ。見ると、

『Gクロスオーバー発動! 超級霸王電影彈 超級霸王電影彈』

来た瞬間にこれ?なんかドモンの顔があるし。

トンネルみたいなマークがフィールド上を横切っている。今度こそ当たらないようにしなくちゃ。

：なんだこりゃ。なんか人の生首があるんですけど???怖!早く逃げなきゃ(汗)。網走は大丈夫なのか…?

「今度こそ…」

M1をマークー内から出そうとした時、

「秘技!十二王方牌大車併!!」

チビマスターが6体飛んできた。ええい、そんなもの!

「こっちよ」

回避行動をとった。が、

「きゃ、えっ!?!なにこれ??」

避け切れなかったみたい。6体とも付着してしまった。

「はーっはっはっは！笑止千万！」

うぬぬ…。

「帰山笑紅陣！」

「いやあ！」

なにこれ！？動けないじゃない！
M1はスタンした。

「ああーたたたたたたあ！」

「ああ、あ、あああ！」

：網走がやられてるのか？

「網走！！…どおお！？」

もう一方のマスターガンダムとやらに三回飛び蹴りされた。ガナーザクが吹っ飛んだ。

「くそう…これしきで…！」

と、その時。ヒイロが、青い機体呼んでいたのを思い出した。

「…俺も呼んでやる！」

呼び出しボタン

というのが機内にあったので、なんかそれっぽいので押してみた。

「カオル！援護するぞ！」

アムロさん！頼もしいぜ！

「あ、お願いします！」

厚くお願い申し上げた。

「フィン・ファンネル！」

2機のファンネルがマスターガンダムに接近、発射。一発目は外したが、二発目は命中！

「今だ！カオル！」

「はいよあ！」

待ってました！いけえ！オルトロス照射！

ブ
ア
ア
ア
ア
ア
ー
ー
！

マスターガンダムの耐久値が3分の1くらいに減った。

「立ち回りが良くなってるぞ、カオル」

「あ、ありがとうございます。あ、あいつの方の援護も……」

「…どうやら心配はいらないみたいだな」

「…えっ？」

網走の方を見ると、なんか青い羽の機体が、東方不敗とやらが乗っているマスターガンダムを滅多斬りにしている。

「でえい！」

…強ええ…。

「キラ、ありがとう」

「どういたしまして…今度は、M1に乗ってるんだね」

「そうなのよ…コロコロ変わって困っちゃう」

俺とアムロさんが知り合いであるように、網走とキラって人も知り合いなのだろう。

キラは、ガナーザクとガンダムを見ながら言った。

「…あの人は…？」

「うん？ああ、あのザクは薰…ああっ！！ガンダムじゃない！」

「……あのパイロットは……？」

アムロさんが困惑するのも無理はない。網走「腐女子だから。

「ああ、気にしないでいいよ。ちなみにあいつはさっき知り合った
ばっかりの網走麗」

「レイ…俺の苗字と…」

「うーん、多分関係ないかと」

「そうか……来るぞ！…俺ができるのはここまでだ。必要になった
ら、また呼んでくれ」

「あ、アムロさん！」

ガンダムもろともどこかへ行ってしまった。
向こうではキラとやらもどこかへ行ってしまったようだっ

「キラ…」

網走は落ち込んだ。

敵が来る。クラッカーでも喰らえ！

「うおりゃ！」

マスターガンダムはひらりと避ける。着地。

「そこだ！」

オルトロスを撃つ。やった！当たった！

「ええい、私だって!」

M1は、ブーストを吹かしながらバルカンで牽制している。

「ふっ、未熟千万! 甘いぞ小娘!」

マスターガンダムは、M1に向かってマスタークロスをぶんぶん振り払っている。M1はクロスに躍らされる。

「いやあ! ああ!」

叫びまぎれに、通信ボタンを連打。

「んお、何だ?」

：俺は、網走からの通信を受け取った。

「Gクロスオーバーか。よしきた!」

俺も通信ボタンを連打した。

すると、ガナーザクのコントロールパネルには、

『Gクロスオーバー発動! ジェネシス デストロイガンダム』と出た。わかんねえ。

すると、前回の如く、フィールド上にマーカーが出現した。

「ぬっ? 何をする気だ?」

：東方不敗もうろたえている。

「…何をする気が知らぬが、ここで決着をつけてくれるわあ！」

マスターガンダムは私への猛攻をやめない。

「…ふっ、かかったわね…ザラ議長…！」

「なに？……！？くおおあー……！！！」

真上から超極太のビームが地表を照射。

一方のガンナーザクは、格闘を仕掛けたり、御家芸の斧投擲をしながら、マスターガンダムの格闘を誘発してマーカーから逃がさないようにしている。

「オラオラオラオラア！」

いつの間に強気になっている薫。

そして、デストロイガンダムがマスターガンダムを轢い（ry…。

「やった！」

そう言った薫が乗っているガンナーザクも、デストロイガンダムに轢かれて錐揉み回転している。自軍のGクロスオーバーは、当たってもノーダメージらしい。

決戦兵器と怪物が通り過ぎた後は、形勢逆転し、有利になった。

…筈だが。

「おい、網走、何だよありゃ」

「…明鏡止水よ」

「メイキヨウシスイ？」

「漢字ね。…まずいわね…きっと能力が上がるんだわ…」

：マスターガンダムが2機とも金ぴかに光っている。やっぱり強そうだ。

「…こーゆーとき、先走った方が負けるんだよな」

「…その通りよ…落ち着いていこう？」

「その言葉、そのままバットで打ち返してエよ」

「ちよつと！？…どつという意味よ！？」

「あ、先走った」

「…！後で覚えてなさい！」

あゝこりや後でメンドーなことになりそうだ。ヤダヤダ…。

とりあえず俺はクラッカーを投げている。隙を作らせるためだ。マスターガンダムは、空中でびよいんと避ける。着地！

「隙あり！」

斧を取り出し、四段斬り！撃破！

「よし！落とした！網走は？」

網走の方を見ていると、あいつにしては珍しく、しきりに距離をとっているように見える。

「……………。…………！じれったい！」

俺は不意に呼び出しボタンを押す。

「…………援護する」

ヒロ！来てくれたんだ！

「…終わりだ」

ウィングゼロは、二丁の大型ライフルをガシャン、とくつつけて、マスターガンダム（東方不敗だったか）に向けて照射！闇討ち鬼ス！

「ぐおああああ！」

オッサンの声が響く。

「…ワシの計画を……………！」

計画？

見事、マスターガンダムを撃破。

「…どうした？カオル」

ヒロが俺に尋ねる。

「いや、あのオッサン、なんか計画とか言ってたけど、何だったんだろう…？」

「…おそらく奴が鍵を握っている」

「そんな感じだよな…」

そう言いながら網走の方を見てみると、……なんか顔が蕩けてる。
『とろけるチーズ』みたいに。

「ヒロお……」

…キモい。

「…あの女は…？」

「…網走麗。腐女子だよ」

「…ふじよし？」

あ、平仮名かわいい。

「腐ってるの」

「……??」

ヒイロは、表情はあんまり変わっていないが、怪訝そうな目つきだけはみてとれた。

「…ま、気にしたら負けよ」

「…そうか…。…今回はいい手がかかりが見つかった。呼んでくれたことに感謝する」

「えっ、いやあ、そんな!」

やっぱりヒイロに褒められると嬉しい。

「…また何かあったら連絡してくれ」

「んああ、んじゃ、元気だな!」

「ああ」

「ヒイロお!」

腐女子が一匹出現。

「あ、あのう…あ、握手…」

網走が大赤面しながら右手を差し延べる。ヒイロは無表情で右手を差し出す。ちよつと嫌そうに見えたのはきのせいだろうか…？

「…あ…ありがとう…」

網走の秋は終わらない…。

「……………」

ヒイロは無言でウイングゼロに乗った。ウイングゼロのツインアイが緑色に光り、鳥さんモード（正式名称わかんねえや）に変形してどこかへ行ってしまった。

「東方不敗…マスターガンダム…今回のキーマンだな…な、網走、」

俺がそういつて網走の方に振り向くと、まだ秋が終わっていないかった…。顔が真っ赤で蕩けたまま。

「……………いい加減にしろよ！」

空手チョップ！

「あいたっ！」

はあ、ようやく現実に戻ってきてくれたか…。

「何すんのよ！」

「オメーこそいつまでやってるつもりだったんだよ」

「いいじゃない！別に」

「はいはい分かりましたよ…」

「……ちょっと、突き放さないでよ、」

コイツ実は淋しがりなのか？

「とにかく、東方不敗っていうおっちゃんが怪しいってことだよ」

「マスターアジア…。…うーん…」

網走の目が神妙になる。

「今まで気付かなかったけど、ここで敵機を撃破したら、なんか…
コクピットの中が…」

「コクピットの中が…何だよ」

「……………ごめん、あたしの見間違いかも！」

表情を明るく作ってる。まあ、追及しても不毛そうだし、問い詰めるのはやめようか。

「んあ、そう？…俺アそろそろだ。パネルが俺をせかしてる。じゃあな。またどつかでな」

「うん！じゃあね！」

：あ、あたしのM1もせかしてる。ガナーザクももう行っちゃったし。あたしも行くか。

「さあ、次はどこかしらね…」

ガナーザクが入っていったトンネルとは逆の方向にあったトンネルに、M1はズズズ…と入って行く。

「また武装変わるのかなア…」

だとしたら、次はモビルファイターがいいわね…（ニヤリ）。

STAGE 5：その名は東方不敗！マスターアジア見参！（後書き）

東方不敗。作中にもあった通り、この話のキーマンです。キーマン
なんで、二人を合流させたかったのです！

ち
よつとこれから原作（ガンダムvsガンダム）とは違う設定になっ
てしまうことがあります。ご容赦下さい。

…そ
もそも、ファンフィクションなんで、問題ないかとは思いますが…
（汗）。

長くなって

すみません！以上、庵瑠璃でした！

STAGE 6：嵐の中で輝いて

：ガナーザクとやらが時空トンネルに入り、次の目的地らしきところに出発。

「はてさて、次は（敵も味方も）どんな機体かな」

自分の機体すらもコロコロ変わる。楽しくて仕方ない。

さて、薫が着いたところは。

なんと、麗が初めてジムに乗った時と同じステージである（STAGE 3 参照）。

…無論、薫はそんなことは知らない。

：今度はどんな機体だ？コントロールパネルには、
『ブラストインパルス』

と表示してあった。武装というカテゴリーを見ると、
『武装：

ケルベロス高エネルギー長射程ビーム砲

デリュージー超高初速レール砲

四連装ミサイルランチャー

デファイアントビームジャベリン

』

…とあった。

…なんだかよくわからん。

…あ、なんでブラストインパルス斧持ってた？コントロールパ

ネルにはないのに…？

それは、薫がこよなく斧投擲アタックをしているからだろう。

：そーなの？ソーナノ？

そんなポケ ンがいた気がするようないような。

敵が2機来た。見た感じはガンダムだが、どこか地味だ。

そう俺が文句を言っていると…。

「あたし、エルピー・プル！お兄ちゃん、行こうよ！」

甲高い少女らしき声がスピーカーを通して聞こえた。

「お…お兄ちゃん…？」

俺には妹はいない筈だが…??

「あたしより年下なの？」

「…君、何歳？」

「10歳！」

「10歳！？そんな歳で？」

驚きだ。物事の善悪が分かるか分からないかくらいの歳の子が…。

「お兄ちゃん何歳？」

「んあ、16だけど…?」

「ふうん…ジュードーより年上!」

誰だ? ジュードーって?

「…! 来るよ!」

「おお」

ブルの機体と俺のブラストインパルスがブーストを吹かす。

「どんな敵でも倒せるものさ! 信頼があるなら!」

なんか熱い言葉を発している青年発見。多分あのガンダムタイプのパイロットだろうな。

どうやら俺のブラストインパルスは、見たところ、ミサイルで牽制し、ケルベロスとやらで撃ち抜くつつう戦法らしい。

バババツとミサイルを撃つ。敵のガンダムタイプがステップを踏む。硬直が見えた！

「そこだ！」

ドシュー！

ケルベロスを撃つ。あ、二本同時に発射するのね。ケルベロスが見事命中！そして、強制ダウン！

「お兄ちゃんすごい！」

無邪気な声で俺を褒めた。

「あたしだつて！」

プルの、なんかひょっとこみたいな口をした機体…

「キュベレイっていうんだよ」

…何？この子読心術持つてんの？？

そんなことはどうでもよくて。

キュベレイとやらが、熱い青年の乗っている方へ、小さい粒みたいなのを背中から無数に射出し、それを取り囲んだ。

「いつけえ！」

「ううああ！」

なんと、四方八方からビームを飛ばし、ガンダムタイプをダウンさせた。

…テラ鬼畜。

俺がダウンさせたガンダムタイプが復帰、したところに、起き攻め！

今度こそ！

「いけえ！」

ブラストインパルスが照射攻撃を仕掛けた。ガンダムタイプは避けてしまった。

「くそお！」

テキトーにレバーを右に倒すと、なんと、射線がぐにゃっと曲がった。

「…おれおれい！」

ぐにゃぐにゃと射線を曲げた。見事、ガンダムタイプを射線上に巻き込み、撃破した。

「いよおし！」

ブラストインパルスがガッツポーズをした。

「あたしだつて！」

：プルは、さっきのTHE・鬼畜を繰り返した。

「いつけえ！」

「ぐあああああ！」

流石はTHE・鬼畜。

「やったな！プル！……プル……？」

プルが、神妙な顔をしているのをモニターで確認した。

「今の……何……！？」

「ど……どうしたんだよ、プル」

「なんか……怖い……！！」

頭をかかえ始めた。どうしたんだろう？

「オイ、大丈夫かよ、……あ、また敵が！おのれ……こんな時に……！」

ブラストインパルスを新たにきた二機のガンダムタイプに向ける。

「もういつちよいくぜ……！」

ケルベロス照射！

一機撃破！

曲げ撃ち！二機目にも命中！撃破！

「……はあ……肩慣らしにもならないってね」

余裕な表情で言ってみた。

「大丈夫か！？プル！」

「うん…もう、おさまってきた…。…ありがとう…お兄ちゃん…」

「仲間だろ？当然のことさ」

「うん…。…！来る！」

「おいでなすったか」

上空を見ると、

「アムロ、」

「下がっている、シャア」

なんと、二機のうち一機は、俺でも見覚えのある機体だった。アムロさん！？

「アムロさん！どうして！？」

「…貴様なんぞ知らんな…」

どうしちゃったんだよ…アムロさん…。

「…騙されないで！そいつは偽者よ！」

プルが叫んだ。…偽者？

「そいつらは…ゾンビよー！」

「んああ！？ゾンビ！？」

今の俺ときたら相当マヌケな面してんだろうな。

「…だから、気にしないで…戦って！」

「わ…わかった」

ホントかな…？

…そうだ！こうすりゃ早い。

「モビルアシスト！アムロさん！」

「カオル！」

「アムロさん！よかったあ」

「どうしたんだ、いきなり…！？あれも…ガンダム…！？」

「そうです。…あれはどういうことなんですか…？」

「わからない…」

そう言った ガンダム（本物）こう言わせてもらつ（の向こうには、

しゃがんでいるキュベレイがいた。

「お兄ちゃん…怖い…」

「…アムロさん、どうします…?」

「…今回俺は長く居なければならなそうだな…」

「プルがこんな状況なんで、お願いします!」

「よし!…あの ガンダムは俺がやる。あのサザビーにはおそらく本物のシャアは乗っていないな…。カオル、あのサザビーは頼む!」

「わかりました!」

俺は、キュベレイをおんぶしながらブラストインパルスを進ませる。
…キツイ。てか機体の動きが輪をかけて重くなってるし。

「オラオラあ!」

ミサイルを撃つ。サザビーが避ける。

「そこだ!」

ケルベロスを撃つ。また避けられた。
今度は四方からアラートが!

「どおあ…!」

「ああん!」

俺とプルが叫ぶ。ブラストインパルスがダウン。

「くそう…どうすれば…！」

「あたしに任せて！」

「大丈夫なのか？プル」

「うん！降りるね」

うんしょ、とキュベレイがブラストインパルスの背中から降りる。

「お兄ちゃん、溜めて！」

多分チャージショットのことだな。

「わかった」

「そおれ！」

キュベレイは、THE・鬼畜をまたやろうとしているのか？

サザビーに粒が集まった。…えっ？ファンネルっていうの？ふうん。

「ふん、どこを狙っている」

ああ、避けられた。あのTHE・鬼畜なのに…。

「今よ！お兄ちゃん！」

「んあ！？ああー！！」

もう溜まってるし、いきますか！

「くらえ！」

ケルベロス照射！

「あああつ…！」

サザビーのAPが半分以上減った。

そうか！あのTHE・鬼畜はただの罔。本命はこのケルベロスだったんだ。

まさに連携技。…でも、なんか6歳年下の女の子に頭脳で負けてなんか悔しい。

「やったね！お兄ちゃん！」

モニター越しに見える無邪気なプルの顔。

……負けた！あの顔は反則だ！

一方のアムロの方は。

「貴様、どこでそのガンダムをこさえたんだ！」

「そんなことは知らない」

「何!？」

「今ここに在る。それ以上でも以下でもない」

「何をわけのわからないことを…!」

「…邪魔だ。消えてもらおう」

「ぐおお!」

アムロはバズーカをくらった。(本物) ガンダムがダウン。

「くっ…こんなところで…!」

アムロは苦戦を強いられていた。

好調の薰&プルコンビは。

「邪魔しないでよ!」

「だあっ…!」

キュベレイがサーベルで接近戦。

「…これしきで…！」

サザビーが再び立ち上がるが、

「おりやりやりやりやあ…！」

ブラストインパルスが、ビームジャベリンで乱れ突き（連ザシリーズの本機の前格）。

「ぬう…」

・サザビーが立ち上がった。

「せめて小娘だけでも！」

「えっ！？…い…いや！来ないで！」

慌ててビーム砲を撃つが、全く当たらない。やばい！

「させるか…！」

伝家の宝刀『斧投擲』！

「ぐあ…おのれ…！」

「まだ息があつたか！」

新技！『槍投擲』！

…ツツコミ無用で夜露死苦！

「ぐあああああ！」

サザビーを撃破！

「プル！」

「…助けてくれてありがとう！」

プルの嬉しそうな表情を見てホッとした。

「アムロさんは…？」

「ぐああ…っ！だいぶ装甲がやられた…！」

相変わらずの苦戦。薫がいろいろやっている間にもだいぶやられたようだ。

「…こうなったら…！」

アムロは、フィン・ファンネルを4個射出し、機体を覆う程の大き

さの正四面体のバリアを作った。…要するに、エフィールドである。

「…？バリアを作ったのか？」

（偽物）アムロがごく冷静に言った。

「剥がすまでだ！」

「させるかよ！」

威勢のいい声が入った。薫である。

「合わせ技…『セカンドインパクト』！…ツッコミ無用！」

今度は、斧と槍が時間差で飛んできた。

「くっ…なんだこのふざけた技は…！」

最初の斧は避けたが、槍で串刺しになってしまった。

「ぐおあ…！」

「よくやった！カオル！」

…（本物）アムロさんに褒められた。

「さあて、ラストスパートといこうか！」

俺は槍を回収し、そいつで構えた。

「アムロさん、そのバリアの強度はどのくらいですか？」

「ビームライフル二発程度だ」

「…ちいと脆いな…しゃあないか…」

ブラストインパルスが踏み込む準備をする。
その時！

「…離れろ！」

「ぐああ！」

(偽物) アムロに不意を突かれ、バズーカで吹っ飛んでしまった。

「大丈夫か！？カオル！」

「…なんとか…」

いってえ。頭打った。こりや軽い脳震盪だな。クラクラする。

「やべえな…このままじゃ…！」

「このくお兄ちゃんをよくも…！」

ブルのキュベレイが錐揉み回転をしながら(偽) ガンダムに特攻、
命中！

「ぐああああああああ！」

ぐりぐりえぐられている。

「まだまだまだ！」

「ぐあああああ！…こんなところで…！」

ドォーン！

偽りなる ガンダムを撃破。

「カオル、カオル！大丈夫か！？」

「お兄ちゃん…お兄ちゃん！」

…気がつくと、心配そうに顔を寄せているアムロさんと、今にも泣きそうな顔（この顔レッドカード）で見ているプルがいた。

「…アムロさん…プル…」

「あ…！気がついた！」

「お兄ちゃん！死んじやうかと思ったよ〜！」

プルが泣き付いてきた。

脳震盪じゃ死なないって（笑）。

気になることがあったので、プルに訊いてみた。

「なあプル、」

「うん？」

「…奴らがゾンビだって、本当か？」

「……………うん」

長い沈黙のあと、YESの答えを出していた。

「…あそこにさっき撃破した残骸がある。…カオル、見てみよう」

「いゝ！？ぞ…ゾンビ見に行くの！？」

「…漏れちゃうよお…」。

渋々アムロさんについていった俺。ついに、偽 ガンダムの残骸の目の前に着いた。

「…開けるぞ？」

「…多分、今の俺に拒否権はないんだろうなあ…」。

ゴゴゴツとハッチを開けた。
すると！

「っ！…やっぱりか…」

俺にもしっかり見えていた。

煙の中からは、白骨人骨（全身）に無数の破けた包帯がついており、黒真珠のような目は虚空を眺めていた。

「…こりゃ怖いわ…」

思わず言葉を漏らした。ちなみに、おもらしはしてません。

二人にさよならをしたあと、網走に通信。

『どしたの？』

「この世界で出てくる敵はゾンビらしい」

『…やっぱりね…』

「…気付いてたのか？」

『うん、ついこないだの戦闘でね』

「…あ、あの時お前…」

「今まで気付かなかったけど、ここで敵機を撃破したら、なんか…
」クピットの中が…」

「とか言ってたじゃん」

『そうそう、それよ』

「…一体どうなってやがんだ…ここはお化け屋敷か…？」

『うん…あと、その機体、どうだった？』

「どうだったって、何が？」

『うーん、そうだなあ…その残骸の損傷部分を見てみて』

また見なくちゃいけないのかよ！

…まあいいや…。

ブラストインパルスを、残骸へと歩ませた。

「…損傷部分？」

『そう！…なんか六角形みたいになってない？』

「…ああ！なってる！？なんで！？」

『やっぱりね…それはD G細胞よ』

「D G細胞？」

『有機物と結合できる特殊な金属でできた細胞よ。あ、絶対触らないでね！』

「触るかよ。こんな気味の悪いもん」

『…それならいんだけど…。それに人間が感染すると、猛獣同然、破壊を繰り返す殺戮マシンと化すわ』

「ええ！？そんなに恐ろしいもんなの！？」

『うん、…他にも違う性質があるけど、話が長くなりそう(?)だから、また今度ね』

「何だよ(?)って」

『ツッコミ無用!』

「マネすんな」

ブツッ!

「くそう…切りやがった…」

そう言いながら、残骸の方を見る。

「…早く行こ」

網走の話を聞いて更に怖くなってしまったので、そそくさと時空トネルへと向かったのだった。

STAGE 6：嵐の中で輝いて（後書き）

…気付いた方もいらっしやるかと思いますが、ガンダムのエフィールドに使うフィン・ファンネルの数。ゲームでは5個ですが、逆シャア本編では4個だったよな、と思つて、作者の勝手な独断（その1）で4個にしちゃいました！5個にこだわりがあつた方、すみません！

さて、『機動武闘伝Gガンダム』本編にも出てきたゾンビ兵とDG細胞。ゲームにはない設定ですが、デビルガンダムが出ているから、このくらいの要素もあっていいんじゃないかね？ファンフィクションだし、という作者の勝手な独断（その2）で挟込みました！Gガン本編を知らない方、すみません！

最後に。doubter先生の、連載中の作品、『お暇書き！』を紹介させていただきます！作品全体がほのぼのしていて、それでいて笑いあり、と見ていてホツとするような作品です！どうぞご覧になつて下さい！

…大変長くなつてすみませんでした！では、また次回！

STAGE 7：逆襲のシャア

：あのあと、俺は、ヒイロにもゾンビのことや、D G細胞のことを通信して伝えた。

「…ていうことなんだ」

『…わかった。連絡を感謝する』

プツッ！

…早！流石はヒイロ！

そういえば、今頃、網走何してんのかな…？

「…ふっふっふ…こやつら…やるではないか…カオル、レイ…これならば、最終決戦、面白い戦いになりそうだ」

大型モニターの前で、東方不敗マスターアジアが腕組みをしながら仁王立ちしていた。

「我が弟子のドモンはどうした…？」

東方不敗は、モニターの端の方を見ている。

「…ほう…やはりこの世界に来ていたか…ますます面白くなりそうだ…なあ、デビルガンダムよ」

東方不敗は、後ろにいる、向こうを向いた、巨大な化け物、デビルガンダムに振り返った。

「ふっ…！？…こいつは…シュバルツ！？…あやつが、なぜここに！？」

東方不敗が驚いた。

「…ほう…これは面白い…この世界に呼び出した（カオルとレイを除いた）３人以外にも人がおったとは…。デビルガンダムのためにもっとたくさんのエネルギーが必要なのだ…これは好都合…もっと接触させんと、パワーが集まらん…まずは…こいつを…」

東方不敗は、隣にあるパネルを操作し始めた。

麗は、薫と通信した後、時空トンネルでうようよしていた。

「はあ、次はどんな機体かしら？」

：自分の機体がコロコロ変わっちゃうから困っちゃう。…これ、前にも言ってたっけ？

次のステージに着いた。見ると、真ん中に三つのクレーターの他

は、すぐに壊せそうな建物がいくつかあるだけ。
何て言うか、なんか不思議。

気になる自分の機体。

私は見て驚いた。

『ソードインパルス』

とコントロールパネルにあった。

嬉し〜！ガンダムタイプだ〜！

はしゃいでる私のところに、ガンダムタイプがやってきた。

「よお！あんた仲間？」

少しオッサン臭い声がした。

「オッサンじゃない！」

「…ムウ・ラ・フラガ？」

「違うつちゅーの！俺は、炎のモビルスーツ乗り、ガロード・ラン
！よろしく！」

「…あゝXはあんまり見てないからな〜」

「なんか言った？」

「いやいや、何も？」

「…あんたのそのガンダム、カッコイイねえ」

「ソードインパルスっていうのよ」

「…ああ、そういえば、あんたの名前は？」

「網走麗よ」

「変わった名前だねえ」

「失礼ね」

「あはっ、ごめんごめん！」

軽いな…この男…。

「…来ます！」

「ん？ティファ？」

「ん？その娘は？」

「ああ、ティファっていうんだ。ちょっと人見知りだから、気を付けてな」

「ああ、わかった…」

ダメだ…X見ときゃよかった…。
この機体、確か、ガンダムXだっけ？

「お、どうやら敵さんが来たらしいぜ」

「今君のようなパイロットは危険過ぎる！」

「シャアザクじゃない!」

見ると、シャアザクとザク 改がいた。

「シャアザク?」

ガロードが聞き返す。

「あの赤い機体よ」

「ふーん…ま、ちゃっちゃと済ませちゃうから、どいたどいた!」

ガンダムXはシャアザクに突撃。…この子、楽しいな。

「ガロード、」

「ん? テイファ?」

「あの人…変…」

「んあ、どうしたんだよ?」

ガンダムXは突撃を中止。

…ダメじゃね?

「何止まってるの!」

私のソードインパルスが、イーゲルシュテルンを撃ちながら、ガンダムXに近付こうとしているシャアザクに突撃。

「ちい！」

シャアザクは回避。ふん、イーゲルシュテルンごときで回避など！

「てえあ！」

エクスカリバーを振りかざした。
斬撃×3！

「ぐあ！」

シャアザクがダウン。

「どうしたのよ、ガロード、」

「んあ、ああ、スマン、その…ティファが…」

「ん？」

「あのシャアザクとやらに乗っている人が変だって言うんだ」

「確かにねえ。あれ、ゾンビが乗っているのよ」

「げええ！？そんなもんが乗ってんのかよ！」

ガロードがフルスイングでビビっていた。この子、面白いな。

「ええい…私を見くびってもらっては困るな…」

シャアザクからそんな声が聞こえた。

「…起き上がったわね…一気に畳み掛けるわよ、ガロード！」

「おおし！」

私の掛け声に勢いよく乗っかるガロード。

ホントに面白いな、こいつ。

「当たれ当たれー！」

ガンダムXはビームライフルを撃つ。…えっ？シールドバスターライフルって言うの？ふうん。

「おりゃー！！！」

シャアザクにソードインパルスのエクスカリバーを振るう。

「ぐああああああ！」

シャアザクが墜ちた。

「どおりゃー！」

ガンダムXが左から右にサーベルで素早く斬り払った。

ドォーン！

ザク 改が墜ちた。

「いっちょアガリい！」

ホントに元気だな、ガロード。気が合いそうでよかったわ。

しばらくして、ザク 改が二機やってきた。

「来たわね」

「逃がさねえよ！」

私とガロードはそれぞれロックオンした。

「そこね！」

ソードインパルスでビームライフル三連射！敵は強制ダウン！

「ガロードは？」

「てえあああ！」

突進しながら蹴りをくらわせていた。単発技多いな。
ザク改がダウン復帰。

「そおれっ！」

シールドバスターライフルを撃つ。命中。
そして、

「Gビット!」

ガンダムXの両脇にガンダムXによく似たMS二機を召喚し、ライフルを二連射。

そしてガロードは、

「こいつでとどめだ!」

袈裟斬り、切り払い、という二段技をくらし、撃破。

「私も頑張らなくちゃ」

ザク改の起き上がり様に、背部のフラッシュエッジを投げる。避ける。

「かかった!」

そのまま三段斬撃!撃破!

「ちよろいわね!」

そう言ってエクスカリバーを構え直す。

「あんたもやるねえ」

ガロードが気さくに言ってきた。

またしばらくして、今度はサザビー二機がやってきた。

「地球に残った人類などは、地上の蚤だということがなぜ分からん！」

という声が、右側のサザビーから聞こえた。
ガロードが叫ぶ。

「何だか知らねえが、ナメンじゃねえぞ！」

私も調子に乗って、

「何だか知らねえが、テメエも瞬殺！」

3バカのブエル君、サーセン！

しかし、その勢い虚しく、劣勢だった。二機のサザビーが使うファ
ンネルに苦戦を強いられていた。
特にガンダムXの損傷度は酷かった。

「もう持たねえよ！」

「ガロード…諦めないで」

「そつは言ってもなあ…」

「あなたに……力を……！」

すると、上空からきたレーザーがガンダムXの胸部を照射し始めた。

「もう撃てるのか？ティファ、」

ティファはガロードの左手に両手を添えた。

「……よし、……左に3度修正！」

ガンダムXは羽をX字に展開して、斜めに背負っていた砲身が前に向く。

大技の予感。

それに気付いたのか、サザビー両機共にビームトマホークを振りかざす！危ない！

私はソードインパルスで懸命に追いかける。

片方はズツタズツタ斬ったが……！？

「いつけえー！！！」

ブ
ア
ア
ア
ア
ア
ー
ー
！
！

真っ白いごん太のビームが発射された。

仕留め損ねたシャアの乗るサザビーの方にダイレクト。APが1/3以下になった。

「ぐああああああ！」

サザビーは強制ダウン。まさに大逆転だった。

「…やったね!!」

私はガロードに寄ったが、

「…ティファ、レイ、」

「…ガロード…」

「ん？」

ティファ、私の順に答えた。

「…もうGX、ダメみたいだ…損傷率が97%だ…これ以上は動けねえ…」

「…ガロード、」

「…なんだ？ティファ」

「…一旦退く…」

「…どこへ？」

「…フリーデン」

「…わかった、ティファの言う通りにする」

「ね、ねえ、ちょっと！どこ行くの!？」

「一旦退却ってね」

「いや、音譜付けられても…あたしどうすればいいのよ!」

「どうにかしてくれ!!」

ガンダムXは、ステージ外に離脱した。

「…もう…」

ソードインパルスも65%なのに…私もフォースシルエットが欲しいわ。

…そうだわ!!

「モビルアシスト!キラ!」

フリーダムがどっからかやってきた。

「レイ!…!!? その機体…!!」

「ん? ああ、インパルス? 大丈夫よ、私は敵じゃないわ」

「…うん…」

キラはいまひとつ納得のいかない顔をしていたが、ここは、キラの順応性に依存するしかないなあ。

「…敵が来るよ!」

「…レイ、それよりも、味方は?」

「なんかどっか行っちゃった」

私は、フラッシュエッジを投げながら答えた。

「ええ？」

キラは少し呆れた風に言った。無理も無いよね。

「だから、キラには前回よりも長く居てほしいの」

「…わかった、僕も戦う！」

今度は納得した風に答えていた。

「うおお！」

ザクザク斬り始めるキラ。まるで鬼！
ここで！

『Gクロスオーバー発動！アクシズ アクシズ』

アクシズが二つも！？

「レイ、逃げて！」

「わかってますってえ！」

幸い、ソードインパルスは、中々のスピードなので、すぐに逃げられた。

アクシズが通り過ぎたものの、何事もなくアクシズ二つを見送ることになったのだった。
そこに、

「終わりだ!」

サザビーがトマホークをソードインパルスに振りかざす!

「えっ!?!いやあ!」

私は思わず叫んだ。

「そおれえ!!ハモ二力砲!!」

ん?この声…?

その声と同時に、ピンクの火線がサザビーに通る。サザビーが撃破された。

「やられた!」

ドォーン!!

「お待たせ、レイ」

ガロードが帰って来た。見ると、武装が大きく変わっていた。ビームマシンガンに、開閉式のシールドを持っていた。

「生まれ変わったGX、デバイダーだぜ!!」

「へえ」

「…あり、反応薄いなあ…」

ガロードが少ししょんぼりしていた。そんなことも気にせずに、残りのサザビーがやってくる。同時に、向こうには、黒キュベレイが降り立っていた。

「行くわよ！ガロード！キラ！」

「よし!! いっちゃやるぜ!!」

「…みんな、元気だね…」

キラは少し冷汗をかいていた。

それからというものの、私を含めるガンダムタイプ三機に、虫の息のサザビーとAPが貧弱な黒キュベレイが敵うはずもなく、成す術もなく散っていった。

「やっ！俺達の勝ちだね！」

ガロードは勝ち誇っていた。

「…あれには、ゾンビが乗ってるのよ」

「…え？ゾンビ？？…あの、よく映画とかに出てる…؟؟？」

キラは、私の言った言葉に困惑した。

「見てみよう」

キラの言葉で、サザビーの残骸が僅かに残っていたので、3機はそこに向かった。

すると、既にコクピットは開いていて、白い煙りがフシューウウ…と出ている。その中には…。

「…貴様ら…デビルガンダム様に逆らうとは……なんとも片腹痛い…ふっ…つかの間の勝利を楽しむがいい……」

中にいたゾンビは、肉がぶちぶちと裂け、血が飛び出し、裂けた肉は腐り、やがて白骨化した。黒真珠のような目玉だけがいやに鮮明に黒光りしていた。

「…気持ち悪」

はつきり言って、あんなの見たら普通じゃいられない。

「何だよありや…まるでバケモンじゃねえか」

「まるでなんかじゃない…本物の化け物だ…」

歴戦のエース、キラも恐れ戦いていた。

「あ……ああ……あ……ああああああああああああ！！！」

ティファが突如絶叫した。

「お、おい！ティファ！？……またか……」

「どうしたの！？急に！？」

キラと私がハモった。今はそんなことはどうでもいい。

「ティファ、俺がいる！大丈夫だ、ティファ！！」

ガロードは、私たちの言葉を無視して、必死にティファを正気に戻そうとしている。

ガロードが根気よく励ましてくれたことにより、ティファはやつと落ち着き、寝てしまった。

「ティファ、ニュータイプなんだ…ティファは、死んだ奴の魂の聲が聞こえちゃうんだ…ゾンビのなんて怖いに決まってる…それに恐れをなしたんだと思う」

「そっか……そんなことが……」

私が神妙な顔をする。

「少し、休ませてあげないとね」

キラが気遣うように言った。流石はキラ、優しい…。

「…そうだな」

ガロードは少し明るさを取り戻した。

「…そういえば、あんたの名前は？」

「キラ…キラ・ヤマト。君は？」

「炎のモビルスーツ乗り、ガロード・ラン！」

ガロードは肩幅くらいに足を広げ、グッドサインをした。

キラは、小さな子供がはしゃいでいるのを見守るように微笑んでいた。

「な、何だよその目!？」

ガロードは些か恥ずかしそうに言った。キラがそれに笑う。

ガロードとキラ、意外と気が合うかも。

ソードインパルスのコントロールパネルが次のステージへと急がす。

「あ、私はこの辺で、ばいばい！」

ガロードとキラが私の声に気づき、笑顔を向けながら手を振ってくれた。

キラはごく普通に、ガロードはほぼ180度二の腕を振っていた。私も腕を振り返す。

時空トンネルに突入。

「次は何かなあ…X09Aにも乗ってみたいなあ」

正義という名のMSに乗れることを期待して…。

STAGE 7：逆襲のシャア（後書き）

疑問に思った方へ、ぼくの言い訳を聞いて下さいっ！

本来、このステージは、ガンダムが僚機ですが、なぜGXにしたのか？

その1：単に私が個人的に機動新世紀ガンダムXが好きなので。

その2：以前、NEXTの機体も出してほしいというご要望を頂いたので。

以上の二つの理由で、作者の独断（前回から引き続きでその3）でGXにしちゃいました！すみません！

そして、大丈夫です。ガンダムは以後登場する予定です！

話は変わりますが、今、私は、ドモンとシュバルツをいつ出そうか迷ってます…（出しといて何だよ、ですよね…）。

そんなこんなで、これからよろしく願いします！

STAGE 8：悪夢（前書き）

更新遅れました、すみません。

PVが10000を越えました！
皆さん、ありがとうございます！

STAGE 8：悪夢

「…プル…可愛かったな…」

：はいそこ、ロリコンとか言わない！うちの両親は七つも離れてんだぞ？

…え？結婚前提で考えんなって？

…しっつれいしました〜！

はいそこ、めんどくさいとか言わない！

そんなことはどうでもよくて。

網走からDG細胞の話を聞いておもつくそ沈んでる薰です。

俺、怖い話ダメなんですね。遊園地とかで、俺をお化け屋敷に連れて行くと、確実に俺の弱みを握れます。握らないで下さいね。

さて、ここ時空トンネル。今までこの空間がどのような空間なのか説明してなかったので説明してみると、ホラ、アレ、ドラ もんのタイム シンの空間とよく似てる。あれの背景に時計がないバージヨンのな？

説明しているうちに、出口が見えた。飛び込め！

着地。まず、コントロールパネルを見てみた。

どうやらこいつは、

『カラミティ』

というらしい。

次に、お外を見ると、正面に、大スクリーンにピンク色の髪の毛を

した女の子の映像がフラッシュバック式に流れてる。

「…誰？ あの子」

「あれはラクス・クラインだよ」

へえへえへえへえ。

…って！ 誰！？ 今言つたの誰？？

「…ああ、俺、シン。よろしく！」

振り返ると、モニターには、青と白と赤のトリコロールカラーのガンダムっぽい奴がいた。

…頭、俺の乗ってたブラストインパルスに似てないか？

「ああ…俺、薫。よろしく」

とりあえず挨拶。

「…！ その機体…！！」

シンは、オーブが地球連合の襲撃を受けて避難している時を思い出した。あの時、確かにカラミティがいた。

「……あんたたちがいたから、父さん、母さん、マユはアアア！！」

シンの乗るフォースインパルスは抜刀し、カラミティに斬りかかった。

「ええっ！？　ちょちょちょ…ちょっと待って！！」

薫がそう言いながら、カラミティは手に持っているバズーカとシールドを地面に落とし、両手を挙げた。

「何かの勘違いだ！　俺はこの機体に乗るのは初めてだ！」

「惚けるなア！！」

インパルスは猛攻をやめない。

「…いい加減にしろ！！」

カラミティはついにインパルスにキック。

「ううあ！」

インパルスは派手にズザザアッと後ろに倒れ込んだ。

「俺は何でかしらねえが、この世界に来てから他人の機体にたくさん乗ってきてんだ。そもそも、この機体、今まで見たこともなかった」

「ッ…！」

インパルスはよろよろと立ち上がった。

「…あんたの過去に何があったかは知らんが、少なくともその過去に俺は関わっていないと思うぜ」

「…オーブ、連合…」

「…うん？」

「…許せないんだよ！」

インパルスは再びブーストを吹かしてきた。

「…聞き分けの悪い奴だな！ てかオーブとか連合って何だよ」

「ッ…？」

インパルスの猛攻が止まる。

「…お前…オーブも連合も知らないのか…？」

シンが訝し気に訊く。

「…俺、多分君とは違う暦から来てるから」

「…どこから…？」

「西暦ってどこ。西暦2009年」

「…セイレキ？」

「イエス・キリストが生まれてから2009年経ったという由来なんだぜ。実際は4年くらいズレてるらしいけど」

「キリストって…」

その時！

「何なんですか、あなたたちは！！」

ストライクがどこからか、ミィア（偽ラクス）の映っているスクリーンの中のステージ辺りに着地。

「…ごちゃごちゃ言ってる暇はなさそうだぜ…シン君、」

「シンでいいよ」

些か切り捨てるように言ったシン。

「お前は下がってろ！ 俺が！」

「はいはい、後方援護すりゃいいんだろ？」

：インパルスでストライクとやらの特攻。

「…あいつ…」

ストライクに向かうシンが呟く。
更に続ける。

「…キラなのか？」

そういいながらインパルスとストライクはサーベル同士をガキィ！と軋ませた。

「…なんであんたは！」

シンはインパルスのサーベルを力任せに振る。ストライクはうまく切り返す。

ストライクはそのあと、

「ソードストライカーを！」

何！？ 武装が変わったと！？

なんか水色っぽいでつかい剣を持ったガンダムになった。

「ッ！ くそう…今はフォースシルエットしかないのに…！」

またもインパルスは特攻。

シンが近接戦闘ばかりするので、援護のしようがなく、手持ち無沙汰であった…。

「もうやめろ！」

ソードストライカーとやらをつけたストライクは、インパルスをズツタズツタ斬っていた。

…マズくね？？

「…まったく、世話の焼ける奴だ」

カラムティで、さつき捨てたバズーカとシールドを拾い、バズーカをストライク目掛けて撃った。

「あああっ！」

やった！ ストライクに命中！
ストライクはダウンした。

「あ、ありがとう、助かったよ……」

シンは少しぎこちなく礼を言った。

「いいってことよ」

こういうことに分け隔てなんて必要ない。

…あれ？今俺いいこと言った？？

「来るぞ」

俺はカラミティでケーファー・ツヴァイというシールドに付いているビームマシンガンを構えた。

「このおー！」

ストライクは、イーゲルシュテルンを撃ちながらこちらに接近。

「そらあ」

ケーファー・ツヴァイを連射。ストライクはステップを踏む。

「そこだ！」

スキュラとシュラークを斉射。ストライクがダウンした。

「ぐああ！」

ストライクは大型ソードを右手に持ちながら仰向けになった。

「…へえ、なかなかやるじゃん」

シンが言った。

そんな感じで、あっという間にストライクを撃破してしまったのである。

どんな感じかと言うと…。

「パック換装！」

ストライクは、赤い羽根を持った形態に換装した。

えっ？ エールストライカーっていうの？ ふうん。

「ううああ！」

抜刀してこちらに接近してきたストライク。

俺のカラミティはなんとか避け、ストライクは、袈裟斬りを空振りしていた。

そこに！

「オラア！」

俺のカラミティは、ケーファー・ツヴァイの先端部で打突攻撃をし、

「ううあああ——!!」

ストライクを撃破した。

「スゲエ…あんなに重そうな機体で…」

シンは感心していた。

…そんなにすごかった？

しばらくすると、大きな丘の上に二機のガンダムタイプが降り立った。

「撃ちたくない…撃たせないで…」

…あれ、あの機体どこで見たことあるような…？

「くっそう、フリーダム！」

シンが憎らしそうに言ったので、

「知ってんのか？」

「…いつもあいつは邪魔ばかり…！ 今日こそは！」

…あのー、僕の話聞いてます？

「…あの機体…ZGMF-X56Sインパルス…？」

フリーダムとやらから無機質な声が聞こえる。

「フリーダム！　なんでいつもあんたは！」

シンは半ギレしながらビームライフルを撃つ。フリーダムは避ける。

「当てる！」

「！　なんだと！？」

…うん？　今ちゃんと避けられたよね？

一体何に『なんだと！？』なんだろう？

…って言うてるうちに、もう片方の同型機が間合いを詰めてきた。

「来やがったな…！」

カラムティのバズーカ『トードスブロック』を撃つ。持ち味の強誘導でフリーダムにHit&Down！

「シンは…？」

「…あのフリーダム、コクピットを狙ってきた！？」

シンは驚きを隠せなかった。

「…ええい…このオ！」

向かってきたフリーダムに対し、シールドを投げ、Hit。そして、そのシールド目掛けてビームライフルを撃ち、反射させた。

「ぐあ」

フリーダムはよろけた。

「アスラン、遅いですよ！」

シンは、モビルアシストを発動。MA形態に変形したZGMF-X23Sセイバーが登場。プラズマ収束ビーム砲を二連射、フリーダム強制ダウン。

「…シン、」

「アスラン？」

MS形態に戻ったセイバーのパイロット、アスランがシンに問うた。

「…あの機体…フリーダムじゃないのか…？」

「見た目はそうですけど…」

「…あれはキラじゃない！キラの気配がしない！」

「…アスラン？」

熱く語るアスランに今度は少々訝しげに言ったシン。冷汗も軽くかいていた

そこに、薫の乗るカラミティが帰ってきた。

「シン、そっち大丈夫か？」

「まあ、大丈夫」

「何？ その謎の間は？ ……まーいや」

：俺はいつの間にか登場していた赤いガンダムタイプの存在も気にかけずに、敵に視線を戻した。
えっ？ あの赤いガンダムタイプ、セイバーっていうの？ ふうん…。

「…フリーダムが来たぜ」

「くっそう…！」

歯軋りをさせながら言うシン。

「…く、X56S…中々鬱陶しい…！」

フリーダムからそんな声が聞こえる。見ると、APは僅かだった。

「逃がさないと言っただろ！」

シンはフラッシュエッジというビームブーメランを投擲後、エクスカリバーという対艦刀を持ちながらフリーダムに突進。フラッシュエッジこそ外れたものの、エクスカリバーは命中。

「てええや！」

エクスカリバーを抜き、フリーダムから爆発がおこる。

「ぐうあああああ！」

フリーダムを見事撃破。

「大した腕もないくせに！」

シンはそう言葉を吐き捨てた。

一方こちらでは、フリーダムの運動性に頭を抱えていた。

「くっ、早い…！」

ケーファー・ツヴァイを撃ちながら牽制しても、お目当てのトードス・ブロックが当たらない。

「…こうなったら…！」

ケーファー・ツヴァイを撃つ。フリーダムがキャンセルダッシュをする。

ダッシュが終わるその時！

「そこだ！」

シユラーク×2とスキュラを斉射。

三本のビームが広がるように飛んでいった。

フリーダムは、スキュラとシュラーク一本に当たり、ダウン。

「やったぜ」

その時、

「くっ、なんなんだよこいつは！」

シンのインパルスは、どうやら増援でフリーダムの代わりに入ってきたストライクに苦戦しているようだ。

インパルスがストライクのビームライフルによって被弾。もうAPがやばいみたいだ。

「…くっ、脱出する！」

すると、トルソー部と脚部がパージし、ちっちゃい戦闘機みたいになった。

「一旦ミネルバに着艦する！」

「お、オイ！ シン！ どこ行くんだ！？」

「機体を交換する！」

「俺どーすりゃいいんだよ！？」

「なんとかしてくれ！」

また無責任ならずや（なんと無責任であろうか）。

「…しゃあねえ…モビルアシスト！ プル！」

「お兄ちゃん！」

「こら！ キュベレイで抱き着くな！」

この子の抱き着き癖、どうにかならないのかなあ…。
まあ、悪い気はしないからいいけど。

「敵はどこ？」

「ん？ あの赤い羽根の機体と青い羽根の機体だよ」

「あたしがやつつける！」

「無理はすんなよ」

「うん！」

プルのキュベレイは真っ先にフリーダムの方に行った。
フリーダムの方が強そうだけどなあ。

「まあ、いつか」

妥協してストライクをマークすることにした。

「いつけえ！」

プルはTHE・鬼畜（STAGE6参照）をフリーダムにかまし、

ダウンさせた。…やっぱり強。
俺も負けてる場合ではないな。

「オラオラオラア！」

シュラークを連射。

ストライクは中々引っ掛かってくれない。

「…おのれ！」

トードス・ブロックを撃つが、外した。

「くそっ！」

ストライクはサーベルを抜き、こっちに斬りかかった。

「来るか！？」

こちらもケーファー・ツヴァイを構える。
が、その必要は無くなった。

「…カオル、お待たせ！」

シンの機体がストライクの格闘をゴン太の赤いビームでカットしてくれたのだ。

「…あれは…？」

俺の機体のコントロールパネルで調べる。
時間がかかったがちゃんと出た。

「『ZGMF-X42S デスティニー』」

読み上げてみた。

「カオル、あの黒い機体は？」

「キュベレイ。こっちの味方だよ。俺の仲間さ」

「そっか」

そうシンが答えた時、MSがダウンするのが見えた。
フリーダムがダウンした。

「やったわ！」

プルが無邪気に喜んでいる。

「あんな小さな子まで戦ってんのか…？」

シンはその時、今は亡きマユ・アスカを連想してしまった。

「…俺が守らなきゃ」

「いやいや、俺が守るよ！」

おどけた風に言う薫。

「ああ！？ 何だよ！！」

「プルは俺が守るから君は戦いに集中し給え」

「ふざけんな！ 俺が守るんだ！」

カラミティとデステイニーが火器を一切手に持たずに殴り合いを始めた。

「ケンカはやめてよお」

その殴り合いの中に無邪気な声が入る。

「…っ！」

「どーもすんませーん」

デステイニーとカラミティはプルの言葉で静まり、火器を拾い上げた。

「さて…続きといきますか」

：てなわけで、戦闘再開！

シンのデステイニーは、見た感じ距離を選ばず戦えそうなので、まだまだビンビンなストライクを任せた。

プルと俺は虫の息のフリーダムをマーク。

「はあああああ！」

デステイニーは残像を残しながら敵に急接近。

∴ STAGE 2でもこんなやついなかったっけ？

「逃がすか！」

するとデステイニーは白く光る右手を翳し、敵の頭を掴んだ。

∴ シャイニングフィンガーじゃね？

あ、俺非ガノタですが、Gガンダムのシャイニングガンダムだけは知ってるんですよ。はい。

デステイニーもシャイニングフィンガー使えるんだ。

「はああ！」

掴んだまま敵を投げ飛ばした。

「あたしだつて！」

「∴ まさかシャイニングフィンガーじゃないよ」

「しゃいにんぐふいんがー！」

なんか可愛いわ。

∴ っって言ってる場合じゃねえ！

フリーダムバリバリ避けたし、なんか羽根から砲門が出てるし、腰からは折り畳まれてた砲門もなんか伸びてるし！
危ない！

「やらせるか！」

スキュラとシュラーク×2を、収束するよつに斉射。
間に合え、間に合え！

フリーダムの一斉射撃は止められなかった…が、俺が撃ったお陰で照射はほんの一瞬で終わり、プルのキュベレイの方は大事には至らなかった。

「助けてくれてありがとう！」

「…へへっ」

一方のデステイニー。俺達がフリーダムを倒したので、ストライク（以下、ストライクB）がまたもう一機増援にきた。

そのストライクBが厄介で、デステイニーが今までマークしていたストライク（以下、ストライクA）に攻撃を仕掛けると、ストライクBがデステイニーのカットをしている。俺達も援護しなければダメだな。

「プル！ シンを援護するぞ！」

「うん！」

俺がカラミティのブーストを吹かすと、キュベレイはちょこちょこついてきてくれた。

プルが前に出て、俺が後ろからサポートするという形でシンのデステイニーを援護することにした。

「シンお兄ちゃん！ 助けに来たよ！」

「えっ？ あ、ありがとう」

シンは少し照れてるように見えた。

「援護は任せろってね」

そう言いながらシュラークを撃つ。

ストライクAのAPが僅かになった。

「よし！ あと少しで勝てる！」

シンがそう言ったところに、ストライクBが対艦刀をデスティニーに振りかざしていた！

「お兄ちゃん危ない！」

プルがそう言い、キュベレイが錐揉み回転をしながらストライクBに突撃。

見事命中し、ストライクBのAPをがりがり削った。

「ありがとう、助かった！ そこだ！」

ストライクBにビームライフルで追撃。

「カオルお兄ちゃん！ やったよ！」

キュベレイが飛び付いて来た。しかし、背後から虫の息のストライ

クAが！

「プル！ 危ない！」

「えっ？ ああ！」

ストライクAはサーベルをキュベレイに振りかざそうとする。

が、それは叶わなかった。デステイニーの対艦刀アロンドイトによって。ストライクAはアロンドイトに串刺しにされていた。

ストライクAが爆散。

その後ろでデステイニーは、ツインアイを鋭く光らせながらアロンドイトを構えていた。

「…結局おあいこだったな、シン」

「…何が？」

「ん？ お互いプルを助けちまったってこと」

「…そうだな」

シンは何故か複雑な表情をしていた。

「…どうしたの？」

「…以前、妹が居たんだ…」

居た…過去形ってことは…。

「…そのプルって子が…マユに見えて仕方ないんだ…」

マユって誰って感じだが、話の流れ的に妹の名前なんだと把握した。

「マユは…その機体とフリーダムとかの戦闘に巻き込まれて…死んだんだ…！」

…そうか…。この機体の『CALAMITY』の名の通り、シンに厄災を齎^{もたら}してしまったのか…。
だったら初対面の時にあんなに怒ってたのも無理はないな…。

「…ごめん…今まで何も知らずに話してて…」

「…いいんだ…別に…」

それでも思い詰めた顔は直らなかった。

「んも…二人とも！ そんなに暗い話しないでよ…」

無邪気な声が響く。

「…なはは、ごめんね」

「プル…ごめん」

「…シンお兄ちゃん、」

「…何？」

「…私のこと、妹って思っていていいからね!」

「えっ!? そ…そんな…!」

「ヒュー! ラッキーボーイ!」

ちよつとからかってみた。

「ち…違つ!」

「…妹って思ってくれないの?」

「い…いや…お…思つよ!」

「ワイ!」

プルはシンに飛び付いた。

シンは少し困った顔をしていたが、心底嬉しそうにも見えた。

STAGE 9：ニュータイプの修羅場が見れるぞ！

：いや、ガロードは面白い奴だった。私ガンダムXは見たことなかったから最初はわかんなかったけど。

ここにちは。網走麗です。

今私はソードインパルスで時空トンネルつばいやつを駆け抜けてます。こう、なんか、マープリングされた背景をした時空トンネルつばいやつなんですが。

そんなことはどうでもよくて、出口が見えたんで、ソードインパルスをフルブーストにし、そこへ向かった。

到着。早速機体を見してみる。すると、

『G A T - X 3 0 7 レイダー』

ひゃっほい！ 私レイダー大好きなんだよね。玄人^{クロト}つばい感じだし。

周りを見ってみる。全体的に暗いが、向こうに銀河つばいのが見える。

そんな景色の中から、

「貴様、ガンダムファイターか？」

という渋い声が聞こえた。

この声は…！

「シュバルツ・ブルーダー！」

「ほう…私の名前を知っているとは…」

突如ガンダムシユピーゲルが出現した。ゲルマン忍法ですな。

「わ……私、網走麗と申します、よろしく願います!」

「む……? ネオ・ジャパンの者が……?」

……あ、そつか。

「ああ、実はここ、未来世紀の人だけじゃないみたい。私は西暦つていうところから来たの」

「何? せいれき?」

「一応未来世紀でいうとネオ・ジャパンだけどこつちだと日本って言ってるね」

「成程……ではなぜ私が未来世紀から来たとわかったのだ?」

げっ、痛いところ突いてきた!

「え、その……他の人から聞きました」

「名は?」

「うーん……忘れちゃったなあ……」

苦し紛れの誤魔かしをした私。

「そつか……麗、ドモン・カッシュを知らんか?」

「どういう人かは知ってますけど」

「何！？ 知っているのか？」

「でも……所在は……」

「そうか……」

と話し込んでいるうちに、ガンダムがやってきた。アムロか？

「これ以上好きにさせるものか！」

それに対し、シュバルツは、

「む？ あれもガンダムか……？」

シュピーゲルは忍者走りをしながらガンダムに接近。
すると別の方向から、

「一方的にやられる痛さと怖さを教えてやろうか！？」

Zガンダムか。まあなんと懲りない。STAGE 4の時もいなかったっけか？

私はZガンダムをマークすることにした。
そして、

「そらあああああ！！ 滅殺！！！」

と叫びながらツォーンを発射。Zガンダムの脚に掠り、ダウン。

「シュバルツは？」

シュピーゲルはクナイを投げたり、蹴り技を喰らわせたりで、割と一方通行な戦いを繰り広げていた。

「はーっはっはっはっ！ どうしたどうした！」

滅多滅多にガンダムを踏ん付けてるガンダムシュピーゲル。

……鬼だわあ……。

「……さて、こちらも……」

レイダーをMA形態に変形させ、ダウンさせたZガンダムの様子を伺いつつ旋回。

「墜ちろ！」

Zがハイメガ（ハイパーメガランチャー）を撃ってきた。

「当たってたまるか！」

レイダーを変形解除させ、回避運動をとった。

「うおおおおお！！！」

Zがウエイブライダー形態で突撃してきた。

「これならどうだ！！！」

レイダーの破砕球ミヨルニルをぶんぶん振り回してみた。Zを迎え撃つように。

すると、見事Zはミヨルニルに三回hitし、錐揉みダウン。

「ウヒョー！」

もう気分はクロト・ブエルである。

「次々とかかって来なさいってね！」

一方のシュバルツは。ガンダムが距離を置いているせいなのか、シュピーゲル側が近づけなくて苦戦しているように見える。

「くっ……ちょこまかと鼠のように逃げおって！」

そう言いながらクナイを投げているが、少々頭ごなしに投げてるようにも見える。私は思わず、

「熱くならないで！ 負けるわ！」

と叫んでしまった。

アイシャ……って、この発言死亡フラグ！？

「『……こーゆーとき、先走った方が負けるんだよね』……って薫が言ってたっけ」

薫の言葉を思い出す。そうやって先走るのがノーグッドだよな。

……って今、先走ったっけか？

「……レイダー、頑張ってたよね」

まるで人ごとのように自分の機体に話し掛ける私。

「抹殺！」

Zにミヨルニルを投げる。

「当たるか！」

華麗に避けられたが、

「そらあああああ！ 撃殺！！！」

今度はツォーンを発射。

「ううあ！」

Zがまたしても錐揉みダウン。

「シュバルツは？」

一方のシュバルツは、持ち前の冷静さを取り戻し、着実に攻めていた。

「レイン！」

シュバルツはライジングガンダムを呼び、逃げ腰気味なガンダムを撃ち抜こうというのだ。

「ライジング、アロー！」

光の矢は超弾速でガンダムに着弾し、案の定ガンダムはダウン。さすがはライジングアロー。

「……ッ！」

ガンダムが受け身を取った。

「引導を渡してくれるわ！」

シュピーゲルは飛び上がり、クナイで滅多斬り、連続キックをかし、遂には、

「あああああ！」

ガンダムを撃破。さすがはシュバルツね。

「Zは起きたかしらね」

ミヨルニルを担がせながらZの様子を見る。

「……！」

そう言いながらZがダウン復帰。

「何なんだよお前達は！」

クロト口調でZに問う。

「俺は……俺は……！」

何だろう？ ゾンビとは思えない生気と覇気が感じられる気がするのは気のせいだろうか？ そして、ピンク色のオーラが……！

「うつつあー！」

赤く染めた装甲を纏いながらウェイブライダーで特攻してきた。

「何なんのよアンタは！？」

苦し紛れにミヨルニルを投げるが、ダメージはあるものの、ダウンしなかった。

「きゃああー！」

レイダーの頸部にウェイブライダーが突き刺さった。不吉な振動が不安を増幅させる。

「麗！」

シュバルツがクナイを投げるが、焼け石に水。Zはさっきからレイダーに刺さったままだ。

「い、いやあ、何これ？ DG細胞！？ い、いやああー！」

DG細胞がレイダーのコクピット内部を侵食し始めた。

「いかん！ レイン！」

シュバルツはライジングガンダムを呼び、ライジングアローをぶち込ませようとした。

「ライジング、アロー！」

光の矢はZに真っ直ぐ飛んでいき、Zのコクピットにダイレクト。同時にD G細胞の活動も止まり、Zの装甲が元に戻り、静かにその場に倒れた。レイダーに侵食したD G細胞も無事に駆除。

「はぁ……怖かった……」

：私はコクピットで胸を撫で下ろした。D G細胞はきれいさっぱり消え、元通りのコクピットになった。

「麗、大丈夫か？」

シュバルツが心配げに声をかけてくれた。

「お陰で……」

「そうか。それはなによりだ」

一方のZから、

「……ここは……？」

パイロットスーツを着たカミーユがコクピットからのそのそと這

い出てきた。

「やっぱり……ゾンビじゃなかったのね」

レイダーの手をカミーユに差し延べる。

「……君は……？」

カミーユが疲弊した声で私に尋ねる。

「網走麗。レイって呼んでほしいな」

「……レイ、ここは一体何なんだ……？」

「私もわかんないわ……」

と話してるところにシュバルツが、

「麗、敵が来たぞ！」

「来たか！ カミーユ、早くこっちへ」

カミーユを手で誘導し、レイダーのコクピットに乗せた。

「ZZね……」

向こうから来たZZをロックしながら呟いた。
同時に、F91も来た。

「ゆっくり休んで、カミーユ」

「……ありがとう」

シートの後ろにいるカミーユが襲^{やっ}れた風に答えていた。そりゃそ
うだ。さっきまでD G細胞に侵されてたんだもの。

……てか、なんでD G細胞の侵食が治ったんだろ？
そんな私の疑問をよそに、

『Gクロスオーバー発動！ ラビアンローズ ラフレッシュ』

もう殆ど恒例と化しているGクロスオーバーが発動された。オペ
レーション・スピットブレイクがあつたらたまつたもんじゃない。
そんなことは置いとして。

「む、何だ？」

シュバルツが訝しげに呟いた。

「フィールドにマーカーが出るはずよ。マーカーの外に逃げて」

「ん、承知した」

シュピーゲルは、私が言った次の瞬間にマーカーが出てくるなり
軽やかな足取りでマーカーの外に出た。

「逃がすか！」

ZZが21連装ミサイルランチャーをボバババツと10発発射さ
せた。

「甘いわー!」

シュピーゲルは黒い影のようなものを残しながら回避をする。

「む、あれは……?」

上空から何本もの黒っぽい棒状のものが。ラビアンローズか。

「ううおおお!」

「む、後ろから!?」

F91がMEPE状態でシュピーゲルに格闘コンボを……って、危ないじゃん! 呼び出しボタンを押す。

「キラ!」

「レイ!」

フリーダムが加勢に来た。

「シュバルツが……」

「あの黒い機体が……くそっ、もうやめろおー!」

フリーダムは飛び上がり、F91目掛けて突撃……が、

「ッ……?……残像なのか?」

するーっとすれ違ってしまったフリーダム。F91の残す残像に

錯覚させられたのだ。

「く、こいつ！」

キラがムキになって、もはや伝家の宝刀となっているキラキックをするが……

「なにおう！」

「ぐわあ！」

フリーダムが反撃を喰らった。その時私の背後から、

「邪魔だ！」

サーベルを振りかぶっているZZが！

「うおっと！」

すぐにZZにサーチを切り替えてミヨルニルを振り回す。

「ぐ、ぐ、ぐあああ！」

見事3 Hitし、ダウン。

「F91イェよくも！」

ブーストを吹かし、F91に接近。

「うおおお！」

F91がサーベルを振りかぶってくるが、

「よっ、とね」

落ち着いてバックステップを踏み、そして、

「抹殺！」

ツォーンを発射！

「直撃！？」

MEPEが強制解除され、空中で錐揉み回転をしながらダウン。

「やりい！」

嬉しさのあまりミョルニルをブンブン振り回す。

「そっこだ！」

ZZが掴み掛かって来るが、

「ソラアアアアア！ 撃殺！」

ぶん回していたミョルニルをそのままZZに投げ付けた。

「ぐああ！」

ズザザーッと滑りながらダウン。

すると真後ろから突然、

「このオ！」

今度は通常モードで斬り掛かってきたF91。だが、距離的にバツクステップの必要もなくすぐに、

「ソラアアアアア！ 滅殺！」

ミヨルニルをおもつくそ投げ付けた。

「あ、あああああ！！」

F91を撃破。

「さあ、ラストね……」

そう言う私の台詞には疲れが混じっていた。確かに、今私は肩で息をしていた。

「麗、よくやった！ あとは私に任せろ！」

復活したシュバルツはシュピーゲルを忍者走りさせながらダウン復帰したてのZZに急接近。

「ええい、しつこい！」

ZZはまたしても掴み掛かろうとしたが、

「見切った！」

シュピーゲルは直ぐさま左にサッと回避し、

「オラオラオラオラオラオラオラオラ！」

クナイやらキックやらの無双開始。そして、

「うづうづう、はっ！」

とどめに飯綱落としをし、

「ぐあああああ！」

ZZを撃破した。

レイダー、シュピーゲル、フリーダム、Zが仲良く並んでいた。

「そついえばレイ、その機体……連合のX307？」

「どうしてわかったの？」

：今度は惚けてみた。

「だって、その機体、ヤキン・ドゥーエで僕たちと戦った機体だから」

「この機体が……」

「……それにしても叫びかたと台詞があのパイロットとすごく似てた気がするんだけど……？」

「……え？ あ、い、いや、ぐ、偶然じゃない？」

やべ、既にボロが出てたわ。
その脇で、

「レイ、助けてくれてありがとう」

だいぶ元気になったカミーユがお礼を言ってきた。

「いやいや、お礼ならレインに……って、なんでD G細胞が治ったの？」

「レインが自分の医学の能力をそのままライジングアローに転換したのだ」

シュバルツが腕を組みながら答えた。

「……へー、そうなんだ」

原作にそんなのあったっけか？ 作者の捏造かな？

「私はドモンを捜しに行く。麗も頑張れよ」

「うん、シュバルツもね！」

バイバイとシュピーゲルを見送り、シュピーゲルはいずこに消えていった。

「じゃあレイ、またね」

キラがフリーダムのコクピットハッチに体を向けながらいつもの笑顔で別れの言葉を言った。

「うん！　じゃあね！」

フリーダムは羽根を広げ、そらの彼方へと飛び立った。あのことはスルーしてくれてよかったわ。そういえば……

「カミュー、」

「うん？」

「なんでD G細胞に？」

「……最初、俺もこのわけの分からない世界に来た直後に、変な老師みたいな人が、『お前はもっと強くなりたいか？』と訊いてきたんだ。俺はあんなことになるなんて分からずに『はい』と答えたんだ」

「その変な老師みたいな人って、後ろを三つ編みにした灰色の髪の毛をしたおじさん？」

「……なんでわかったの？」

「私、その人知ってる。その名も、東方不敗、またの名をマスターアジア」

「東方不敗……奴は許せない……俺をあんな風にしやがって……！」

カミーユは握り拳をわなわなとさせていた。

「……だから、手分けして、頑張ろう？」

「ああ」

「……もうお別れね。じゃあね」

「またどこかで」

カミーユと私は分岐し、私はズズズッと時空トンネルの中へと入っていった。

その頃。フリーダムは。

「……あれ、レイに聞くの忘れちゃったなあ。あの台詞のこと」

頭をポリポリかきながら残念がるキラ。

「しかも今日殆ど活躍出来なかったなあ」

コクピットのシートでしょぼくれるキラであった。

STAGE 10：河を渡って木立を抜けて

：シン、シスコンなんだな……。妹のいない俺にはわからんが。
てか寧ろ姉妹がウチん家にいないし。

こんにちは、高嶺薫です。

こんなフリ前にもあつたって？ キニシナァイ。

てか俺最近なんかいつの間にかギャグキャラになりかけてる感じ？
そんなことは置いといて、中々にカラミティは面白い機体だった。
ある意味無双だったな。なんでかって？ カラミティで初めて斧投
擲アタックをしなかったから。てか、その必要性がなかったから。

そんな俺は今時空トンネルっぽいやつの出口付近にいる。カラミ
ティともお別れか……。複雑だな。俺にとってはかなりお世話にな
った機体だが、シンにとっては厄災を齎もたらした機体。
ううむ……。

気を取り直して。

ある市街地っぽいところに着地した。パネルを見ると……。『ストラ
イクノワール』

とあった。武装を見てみると、

『ビームライフルシヨーティー

トードスシュレッケン

アンカーランチャー

フラガラッハ3

2連装リニアガン』

結構多かった。使いこなせるかなあ……。？

すると、遠くから声が聞こえた。

「ん？ ガンダムの新型……？」

という声が聞こえた。声がした方向を向くと、俺もよく知っているような機体があった。ザクだ。

ザクか……懐かしいなあ……。

あの頃はアムロさんやヒロに頼りつきりだったな……。……って、

「誰？」

「あ、俺バーナード・ワイズマン。バーニイって呼んでくれ」

略称ですか。

つまりは、アレクサンドロスのアレックスって言うのと同じか。

「ああ……俺、高嶺薫。カオルって呼んでくれ」

「ああ、よろしく」

割と話しやすそうな青年だった。

「ガンダムって……黒いのもあったのか……？」

「『ストライクノワール』っていうらしい」

「らしい？」

「俺、なんでかよくわかんないけどこの世界に迷いこんじまって、

見ず知らずのいろんなMSに乗ってるわけよ」

「なるほど」

物分かりがいいな。順応性が高いのかな？

……って話してるうちに、上半身は人型だが下半身にキャタピラがついた、あまりにも無茶ぶりな格好をした奴が二機来た。

「タンクタイプか……？」

バーニイが言った。

「……っ、楽勝だな」

鼻で笑い、タンクタイプに突撃するザクもといバーニイ。

「……さて、こっちも行きますか」

ストライクノワールのビームライフルショーティーを構え、ブーストを吹かした。

「よし……いい子だ……」

ザクは時限式の爆弾を設置。タンクタイプは回避運動するが、爆弾が爆発し、爆風に巻き込まれた。

「っ」

口笛を吹くバーニイ。

「こつちも負けてらんないな」

ストライクノワールのレールガンを構え、発射。見事タンクタイ
プに命中し、ダウンした。

「
」

こつちも吹いてみた。

「ひえゝやっぱガンダムはすげえなゝ」

バーニイは若干たまげた風に言った。

「あんたも大したモンじゃね？」

的な会話を続ける。

「さて、もいっちょ行くか」

今度はノワールの背部にあったフラガラツハ3を抜刀した。フラ
ガラツハ3は二つあったが、二刀流は無理なので、右手一本だけに
した。

タンクが起きる。起き際に……

「ソラア！」

ノワールの指先からワイヤーのようなアンカーランチャーを射出。
タンクに引っ掛かってくれた。

「てえや！」

右手のフラガラッハを振り下ろす。タンクは真つ二つに斬れ、爆散した。

「……俺もやらなきゃ……」

バーニイが負けじといったような口調で呟いた。

するとそこに、

「コロニー内で戦うなんて……」

という声が、向こうから来る灰色のガンダムから聞こえた。女っぽい声だった。

「あれは……クリス……？」

バーニイは少し驚いた風に呟いた。

「……あれもD G細胞の産物なのか？」

「D G細胞？」

バーニイが尋ねた。

「詳しいことはわからんが、機体をまるまる一機作れちゃうらしいぜ」

「……細胞が？」

「あれがその本物のクリスとやらである確証はない。そいつの特徴は、被弾部が蜂の巣みたいな模様をしていれば確実にその類だ」

「蜂の巣つつたって……」

「ザクのその装備なら致命傷は与えづらいつしよ。牽制を頼むぜ」

「ああ……」

イマイチ気乗りしない風だったバーニイ。まあ無理もないか。もしお友達だったってなら。

「……んじゃ、行こうか」

そう言ってノワールのブーストを後からきたタンクタイプとやらに向かって吹かす。

「ほおお！」

ワイヤーを飛ばして牽制。タンクタイプは腰を捻って回避。

「意外と器用だな」

感心しながらもビームライフルシューティーを数発撃つ。またも腰を捻って回避。

「くそ、ちょこまかと」

レールガンを撃とうとすると、キャノンが飛んできた！

「ぐおあっ！」

ノワールは空中で錐揉み回転をしながらダウン。そして、不時着。

「どおあっ！」

コクピット内にも不時着の振動が伝わる。

「くそう、タンクの分際で……」

ノワールを起こし、反撃。またもキャノンを撃ってくるが、今度は軽く飛び上がり、空中で側転しながらビームライフルショーティを乱射した。

「オラオラオラオラア！」

ボババババツと撃ち出されたビームは確実にタンクをとらえていた。全弾hitし、タンクはダウン。

「バーニイは？」

一方のバーニイは、多少手加減しながら戦っている風だったが、敵のアレックスはお構いなし。

「くそう……クリス、俺だ！ バーニイだ！」

しかし、その声は聞こえてはいなかった。アレックスは構わずバルカンを撃ち続ける。

「くっ、何なんだよ！ クリスじゃないのかよ！？」

「バーニイ！」

「カオルか？」

「ダメージは与えてみたか？」

「うんともすんとも言わないんだよ。やっぱあいつはバケモンだよ……」

バーニイは万事休すみたいだった。
それをきき、機内のキーをいじる。

「……アレックス、耐久値250/250……おかしいな、ノーダメージだ」

「ええ！？ そんな馬鹿な！」

「……まあ一つあるとすれば、全身にシールドみたいなのを纏っていて、そいつが本体保護をしている……って考えれば頷けるけど」

「シールド……」

「とにかく、そいつを剥がさないうちはダメージも与えられない。遠慮なく攻撃しないとやばいぞ」

「やられる前にやらなきゃ、こっちがやられるってか」

バーニイが納得した風に言った。

「頑張れよ、ポンコツ」

バーニイはザクをアレックスに向けてブーストを吹かした。

「……タンク！ おねんねは終わったかい」

ノワールをタンクに向き直し、右手のビームライフルショータイ
ーを構えた。

「この虫の息があー！」

バババツとライフルを撃ち、ブーストを吹かし、タンクの左側に
回り込んだ。タンクは慌てたようにキャノンを撃つが、ノワールの
回り込みに銃口補正が追いつかず外してしまった。

「とおおおあああー！！」

フラガラツハでズバズバツとタンクの装甲を切り裂き、撃破。

「……ったく、手間かけさせるぜ」

フラガラツハを納刀し、ライフルに持ち替える。

バーニイは。

「クリスだったらごめんよ……」

ザクは、手榴弾をフィールドに仕掛け、アレックスの行動を伺っていた。アレックスが仕掛けた手榴弾の近くにステップしてきた。

「…………ごめんよ！」

カチッ！

爆風が手榴弾から放たれる。アレックスを纏っていた灰色の追加装甲が剥がれ、爆風をダイレクトで受けることに。

「…………剥がれたのか？」

怪訝そうに爆風を見守る。

爆風が止んだ。

「…………！剥がれたぞ！」

口をあけたまま喜んだ。バーニイが見たのは、爆風をダイレクトで受け、ダウンして仰向けになっている裸のアレックスだった。その周りには、焼け焦げた追加装甲の残骸が散らばっていた。

「でかしたぞバーニイ！」

タンクを倒した俺が駆け寄る。

「で、装甲の傷はどうなってんだ？」

ノワールのメインカメラで、小画面にてアレックスを拡大する。すると、

「あーや………… D G 細胞…………」

小画面には、損傷部に六角形の模様がしっかりと刻まれたアレックスが映っていた。

「……てか型式番号も無茶苦茶でわけわかんねえや。文字化けしてんのかこれ」

だって、型式番号の表示が、

『いよmxdwm3gtねうgvemjつやfkdaむっmwに
md@なう|hpつや`nxkのりしお25|sjm』
って見たら明らかバグってるようにしか見えないでしょ？ てか
『のりしお』って何だし。

「バーニイ、安心しな。あれは偽物だ」

「……本当なのか？」

「連中は声はそのままオリジナルの声を出せるんだ」

アムロさんの時もそうだったもんな。

「……もし心配だったら自分で確かめてみたら？」

「……アレックスは、俺がやる」

バーニイのその言葉には男らしさが滲み出ていた。

「頼んだぜ」

その言葉を聞いていたかのように、ステージ外からガンダムらし

きものが来た。

「守るものが無くて戦ってはいけないのか!？」

……アムロさんに似てるな。

「さて……」

ビームライフルショーティーを構える。

「そこ!」

ライフルでガンダムを牽制。ガンダムは回避行動をとる。その硬直を狙って、レールガンを構える。

「そこだ!」

ドシュウとレールガンを撃つ。

「ああっ」

ガンダムはダウンした。

「さあて、男同士? のガチンコバトルといきますか!」

ライフルをしまい、フラガラッハを右手にだけ持つ。例の如く二刀流は無理だから。

一方、バーニイは。

「そおら！」

投擲された手榴弾は弧を描きながらアレックスに着弾。アレックスは足元をすくわれていた。

「そこだ！」

もう吹っ切れたのだろうか、バーニィは遺憾無くアレックスにマシンガン撃っている。

「……本当に偽物なのかな」

若干杞憂している風もあるが、マシンガンを撃つのはやめなかった。

一方俺といえば。

「ダウン復帰したな、ガンダム」

モニターには、ゆっくりと立ち上がるガンダムが映っていた。

「じゃあ、一対一^{サシ}というござー！」

フラガラッハを右手にブーストを吹かせる。

「てええい！」

ガンダムも迎え撃つように抜刀し、突撃してきた。

「オラア！」

左手側のワイヤーアンカーを射出。

「そんなもの！」

サーベルでノワールのワイヤーを切り裂くガンダム。

「かかったな」

切り裂いている隙にフラガラッハをガンダム目掛けて投擲！
見事、左部シヨルダーアーマーを貫いた。シヨルダーアーマーからは火花が飛んでいる。

「あぁっ」

ガンダムはよろけている。

「そこだ！」

レールガンを撃つ。
ガンダムにhit。

「ううあっ！」

ボタンツと地面に叩きつけられたガンダム。フラガラッハは地面にうち刺さった。

「左手のワイヤーが使えなくなっただか……」

コンソールはレフトワイヤーの損傷を示していた。

「……ま、何とかいけるか」

この言葉が、後の死亡フラグになるなど知る由もな

「つてやめろよ！ 勝手にフラグ立てんな！」

：なんか不吉なフラグを立てられた俺であるが、フラグを立てられたなりに慎重にしようと思う。

「迂闊な奴め！」

ガンダムがダウン復帰し、大胆な低い音と共に大筒の砲門から実弾が飛んできた。

「迂闊な奴でサーセン」

変なことをホザきながらビームライフルショットティーでバズーカの弾を打ち消す。

ずずずぬね、ざらざり ざるざれざれ。

……今のは忘れて下さい。忘却の彼方にして下さい。二度と思いませんで下さい。今日の俺はなんか変です。

案の定弾は打ち消され、小さく爆発した。

「ガンダムとやらー！」

うち刺されたフラガラツハを回収し、再びガンダムに斬りかかる。
するとガンダムが、

「やあ！」

という声と同時に鎗を投げて来た。

「く、」

スウ、と左に避けようとするが、

ギャン……

右の方から不吉な音が……。

「ライトアーム切断!？」

コンソールは確かにライトアームの損失を示していた。

「おおあ!？」

姿勢制御が利きづらくなっているのか、機体が左に傾いた。

「ああっ！」

ノワールは左側を下敷きに無様に倒れた。

「とどめだ！」

直ぐさま槍を回収したのだろうか、そのままノワールを空中から串刺しにしようとしていた。

(……死ぬのか……？　こんなところで……)

が、

「ああああああ！」

ガンダムは空中で体勢を崩し、そのまま爆散した。

「危なかったじゃないか！　カオル！」

バーニイのザクが手榴弾をガンダムに投げてくれたのだ。

「バーニイ！」

死刑宣告から解放されたあまり、情けない声をあげてしまった。

「大分やられたなあ」

半死人になっているノワールを見ながら言った。

「助かったよ」

ザクに手を取られながらノワールを起こす。

立ち上がった瞬間！　後ろに第二の死刑宣告が……！

「ば、バーニイ！　後ろ！」

「え？ ああっ！？」

ザクの胸部が桃色のサーベルが貫いていた。

「そんな……」

バーニイは半ば諦めたように言葉を漏らしていた。

「死ぬ……のか？」

「死ぬんじゃない！」

俺の体は一気に熱くなり、レフトアームにはザクのコクピットハッチを、ライトレグでザクのトルソーを押さつけながらコクピットハッチをメリメリと外した。

「カオル！？」

バーニイは驚いた風だったがこの際シカト。

「おおらあ！」

バーニイの座っているシートごと無理矢理外し、機体の外に出した。

「何やってるんだ、カオル！！」

「つべこべ言っな！！」

シートを抱えるなり直ぐさまバックブーストした。蛻もぬけの殻となっ

たザクは爆散した。

「ううううあああああ！」

爆風で少しよろけ吹っ飛んだノワール。爆心地からは割と離れていた。被害は少なかったが、バーニイが露骨に騒いでいた。まあ、仕方ないだろう。

「なんだってあんな無茶したんだ!？」

「……一方的に助けられて、その助けてもらった奴がすぐに、目の前で死なれちゃ寝覚めが悪イんだよ」

「カオル……」

「バーニイ、アレックスをやっていいか？ 友達に乗っていないな？」

「ああ、いいとも。確信できる」

「なら……」

ライトアームを失ったノワールを構えさせる。

「ううオオオオオオオオオオオオオオ!!!!」

姿勢制御もままならないまま呐喊。

腕のガトリングで迎撃されるが、構わず呐喊した。

装甲のダメージレベルがどんどん上がってゆく。

機内は、エマージェンシーで赤く点滅していると同時に、胃をキリキリさせるようなサイレンも鳴り響いている。

「あああああああああ！！！」

ノワールはレフトアームにフラガラツハを持ち、ガトリングの雨の中を押し切り、アレックスの装甲を引き裂いた。アレックスは切り口から中心に爆散した。

直後、ノワールは力尽きたかのように乱暴に倒れた。コンソールが消える。

全システム及び全機能が完全に停止したことにより装甲がフェイジストダウンし、黒々としたボディから、灰色単一の無骨な姿になった。

「カオル！」

バーニイはノワールの元に駆け寄った。

「いつててて……」

頭を押さえながら少々猫背気味にのろのろとコクピットから出てきたカオル。

「カオル！ 無事だったか！？」

「なんとかね」

これが薫にとって精一杯の答えだった。

「しかしあんな無茶、よくやるよ」

バーニイは驚き呆れ果てたかのように言った。

「……へへっ、すまん」

「……まっ、俺、そんなお前から助けられた立場だけどさ」

「そーだよ。感謝しろよ」

いつものペースに戻した薫。それに苦笑いしているバーニイ。死闘が終わってホッとした二人は永遠と話し込んでしまうような勢いだった。

「……んじゃあな、バーニイ。また何かあったらよろしくな！」

「カオルこそ、もう無茶すんなよ」

ハハッ、と苦笑いしながら時空トンネルに入っていく薫。

（アル、ごめんな……。ザク、壊しちゃって……）

ザク改の残骸を見ながら感傷的な顔になりながら心中で呟いたバーニー。

「……さて、俺も行くか」

薫とは違う時空トンネルに向かったバーニー。

二人が去ったコロニーの空は何事もなかったかのように静かだった。

STAGE10：河を渡って木立を抜けて（後書き）

誤字脱字や、お気づきの点等ありましたらご報告お願いします。

STAGE 11：迫撃！トリプル・ドム

：どうもこんにちは。網走麗です。現在、GAT-X307ことレイダーで時空トンネルっぽいやつの中を飛行中です。

前回の戦い、正直疲れました。ひたすらミヨルニルを振り回してた気がするなあ。

出口が見えてきた。

「次はどういう機体かなあ」

半ば疲れた声で言う。

そんな感じで到着。辺りには、薄緑色のコンテナがある以外は何もない平野だった。自機を見てみると、

『キュリオス』

とあった。

「また可変機かい」

若干ツツコむような感じで言った。そこへ、

「あんた、俺の仲間か？」

その声のした方向へ振り返って見ると、

「……ガンキャノン？」

「カイだ。宜しく頼むぜ」

「宜しく！」

カイ・シデンか……。この前似てる人が銀魂に出てたなあ。

「しかしなんにもねえなアここア……。コンテナしかねえや」

カイは特徴ある喋り方で辺りを見回す。

「ホントね」

と暢気に話していると、2機のドムが降り立った。

「スカート付きか……。地上じゃ馬鹿にならねえぞ」

「うん、わかってるわ」

キュリオスのマシンガンを構え、発射。ドムは素早く回避。

「ええい、ちょこまかと！」

マシンガンをひたすら撃つが、一向に当たらない。

「落ち着け！ 狙いが甘いぞ！」

カイの的確な助言を受ける。

「わかってるって！」

再びトリガーを引こうとしたところ、ドムがヒートサーベルで斬りかかってきたので、

「たあっ！」

シールドの先端を前に構え、シールドを変形させ、ドムを捕縛。

「そこね！」

シールド内蔵のニードルを出し、ドムを貫通。ドムからは火花を散らしている。

「っ！」

引っこ抜き、ドムが爆破。

「一撃かよ！？」

カイがたまげる。

「お次は！？」

シールドを元に戻し、警戒する。すると更にもう1機ドムが来た。

「遠いわね」

キュリオスを変形させ、降りてきたドムに接近。ドムはバズーカを撃ってくるが、

「そんなもの！」

機銃である右翼部のマシンガンを連射。バズーカを打ち消した。

「てえあ！」

変形解除し、空中からドムを袈裟斬りした。

「……ていうか、俺の活躍は（書かれないの）？」

そんなことを言っているカイも、善戦しており、ドムをリードしていた。

「この野郎、当たれ！」

地面から素早く岩を掘り出し、そのままぶん投げた。ドムに直撃し、撃破。

「ッ、俺にだってこのくらいは」

カイは人差し指で鼻を拭った。

「ガンダムの女は？」

「ガンダムの女じゃなくて麗よ」

「レイ？ アムロの姉妹か？」

と言いながらキュリオスの援護にまわろうとするガンキャノン。

「はああ！」

ドムをメッタ斬りにしたあと斬りぬけ、ドムは打ち上げられながら爆散。

「派手だな」

カイは一言淡々と言った。

少し間があつて、

「お前、何者なんだ？ そんなガンダム見たことねえぞ」

「あたし、なんかよくわかんないけど、ここの変な世界にきてから
いろんなMSに乗ってるの」

「確かに、ここじゃあ何が起こつてもおかしくねえけどな」

「カイ？」

「さつき、ジオンのミハエル・カミンスキーつつ酒飲みのおツサ
ンが味方してくれたしよ」

「へえ」

ミーシャなら知ってるが、敢えて知らない風に答える。

「ホント、何が何だかよくわかんねえよ」

と世間話をしている所に、

「MSにジェットストリームアタックをかけるぞ！」

というガイアの声が。……って、

「3機!？」

「また厳しくなりそうだなあ……おお、ヤダヤダ」

「この軟弱者!」

「……セイラさん？ ガンダムで平手は勘弁な」

と私がネタ発言をしたのをサラッと流し、しゃがんでキャノンを連射していた。

「この数、冗談じゃないぜ」

ドンドンと次から次へと弾が出ている。

「……あたしもやらなきゃ」

と操縦桿を掴み、変形させようとしたところ、コンソールに、

「……換装？」

ミサイルコンテナがばーんと載っていた。

「今回は多勢だから、つけちゃお!」

ピッとボタンを押すと、キュリオスは勝手に変形され、後ろにコンテナが着いた。

「わお、爆撃モードじゃん」

テキトーにミサイルをばらまき、2機のドムを牽制。

「何だアイツ？ あんなミサイルあつたか？」

カイはそう呟きながらビームライフルを撃つ。

「残弾尽きた」

麗はキュリオスからコンテナを外す。コンテナは真下に落ちる。運悪く、ドムはコンテナの下敷きになった。

「ぺっしょんこ？」

狙ってやったわけではないのか、麗はきょとした顔で下を覗き込んだ。しかし、コンテナはびくびくと動いている。

「来るわね」

キュリオスを変形解除させ、マシンガンを右手に着地。

「行くわよ！」

ぺっしょんこにされていない方のドムにマシンガンを数発撃ち、一気に近づき、シールドで捕縛。

「……一撃必殺フラグね」

シールドニードルを出し、火花を散らせる。そこに、アラートが

鳴る。

「復帰したのね、ぺっしゃんこドム！」

キュリオスは直ぐさまバズーカの弾が飛んでくる方向に向き直り、マシンガンを乱射した。弾が割と間近だったので、キュリオスは爆風で少しよろけてしまった。捕縛も解けてしまった。

「ちい、一撃でしとめられなかった……」

：悔しく齒軋りする。そこに、バズーカの弾が！

「ああん！」

キュリオスはズザザッとダウンしてしまった。

「おのれ……」

キュリオスをすぐに起こし、マシンガンを構える。

「オラオラあ！」

マシンガンを超速で乱射し、ぺっしゃんこドムを撃破。

「はあ……はあ……」

肩で息をする。

「オイ大丈夫かよ？ そんな疲れてよお」

カイが私を心配する。

「はぁ……大丈夫、かな」

「……先が思いやられるぜえ」

とカイに溜息をつかれてしまった。

「……っ、来るか!？」

敵機がもう1機薄緑色のコンテナに着地。

「認めたくないものだな、自分自身の若さゆえの過ちと言つものは……」

シャアザクか。厄介な奴が来ちやったなあ。

「早めにドムを落とさねえと苦しいんじゃないのか？」

カイが少し焦る。

「そうね。……あたしはシャアザクをマークするわ。あなたはドムを！」

「任せなさいって」

カイは快く受け入れてくれた。

「わお！」

岩をぶん投げ、直ぐさまドムを撃破。残るはシャアザクとガイア乗りのドム。すると刹那、

『Gクロスオーバー！ コロニー落とし コロニー落とし』
とコンソールに出た。

「Gクロスオーバーよ！ マーカー内から逃げて！」

「マーカーの外から逃げりやいいんだな？」

ガンキャノンはブーストを吹かしてマーカー内から逃げる。

「キュリオスなら……」

変形させ、逃げようとするが、

「甘いぞ！」

とザクからバズーカが打ち出される。

「ダメだ、避けきれない！」

そのまま、

「あぁっ！」

変形が強制解除され、ダウン。

「当たるわけには！」

と受け身を取ったが、

「んああっ!!」

コロニー落としが直撃し、錐揉み回転する。アラートが更に鳴る。打ち上げられたキュリオスを撃ち落とそうというのである。キュリオスの耐久値は僅か56/540。

「ええい、脱出よ!」

シートの左側にあった脱出ポッド射出レバーを引き、キュリオスから脱出。

「ほう、脱出したか」

シャアザクからはそんな声が聞こえた。キュリオスを撃ち落とさんと撃ち出されたバズーカはキュリオスに直撃し、爆散した。

「はあ……とりあえず危機一髪ね……」

宙に浮く脱出ポッドの中、一人安堵する。

「……これで2対1だな」

シャアザクはガンキャノンの方に接近。

「いけない! カイが!」

でも、脱出ポッドじゃどうしようもない。

「どうすんのよ!?!」

全身が強張る。そこに、サイレンになる。

「何？ 新手？」

モニターで外を見ると、なんとアリオスガンダムがこちらに向かって来ていた。

「アリオス？ 薫が乗ってるのかしら？」

すると、メールが。

『これに乗れ。 キョウジ・カッシュ』

キョウジさんが！？ ということ？
なんて思っている暇はなく、アリオスが私の目の前で止まる。

「……乗るしかないのね」

脱出ポッドから出、アリオスに乗り込んだ。

「アリオス、行くわよ！」

麗の合図でアリオスはGN粒子を散らしながらシャアザクに突撃。

「む……！ まだ息の根があつたか」

シャアザクはガンキャノンへの攻撃をやめ、マシンガンのアリオスに向ける。

「気付いたわね」

アリオスを変形解除させ、腕に付いているビームマシンガンを撃ち、シャアザクのマシンガンを打ち消した。

「そこね！」

もう片方のアームでマシンガンを持ち、シャアザク目掛けて連射。

「ちい！」

シャアザクはやむなく回避運動をする。そして、

「当たらなければどうということはない！」

シャアザクはオーラを纏い、動きが素早くなった。

「こつちだつて……『TRANS・AM』！」

アリオスの装甲が赤く光り、再び変形する。

「これは……」

「オラオラあ！」

麗がそう言いながらアリオスの機銃を撃つ。

「ええい！」

シャアザクはクラッカー弾を投げるが、アリオスは変形したままバレルロールし、回避する。外れたクラッカー弾が意味もなく遠くで弾けた。

「うおおおおお!!」

アリオスはまたも変形したままシャアザクに呐喊し、シールドでシャアザクを挟んだ。

「そのまま……行けえええええ!!」

挟む力を強くし、遂にはシャアザクを真つ二つにした。

「ぐあああああ!!」

シャアザクが爆散した。

一方、ガンキャノンは、

「ッ、くそっ、なんで墜ちねえんだよ! コイツ!」

ドムの地上での機動性にカイが冷静さを失っていた。そこにアリオスがやってきた。

「まずい、カイが落ち着きをなくしてる!」

と麗は手元の呼び出しボタンを目にやる。そして、躊躇なく押した。

「ノリス大佐！」

「任せろ！ アバシリ！」

：ノリス大佐はジェットコアブースターにワイヤーを引っ掛け、
ピョンピョン飛んでいた。

「味方はどっちだ？」

ノリスは私に訊く。

「赤い方です！」

「……人型にもビーム兵器……」

ゲルググもビームだけだね。

「連邦が味方なのか……」

口ではそう言ったノリスだが、初めて麗と会った時も、彼女が
ジムに乗っていた事を思い出し、半ば納得した。

「……ガンダムもどき、今回は援護する！」

ノリスはカイに上空から声をかけた。

「何だあいつ、あんな奴いたか？」

カイは怪訝そうに言った。

「そこだ！」

ノリスはドムにワイヤーを飛ばし、動きを封じる。

「今だ！ ガンダムもどき！」

「ガンダムもどきじゃない、ガンキャノンだ！」

カイがそう言いながら岩を持ち上げ、ぶん投げた。ドムに直撃し、ドムが爆散した。

アリオスのトランザムも有効時間が切れ、装甲が元の色になった。

「まさか連邦の援護をするとはな」

「ジオンは何だ？ 最近は連邦に協力するってか？」

「ジオンとしてではない。人として援護したのだ」

「おーお。流石は大佐の言う事は違うね」

「何だと！？」

「まあまあ二人共、」

と宥める私だが、ノリスさんと呼ばなきゃよかったな、と後悔する私。

「そもそもアバシリ、何故私を呼んだ？ 何も私でなくてもよかったのでは？」

ぎくっ！

私はアリオスの操縦桿を握り、

「さよーならー！」

逃げるが勝ち！

「「ちよつと待ったあああああ！！！」」

ガンキャノンとグフ・カスタムは猛ダッシュでアリオスを追い掛けるが、アリオスには到底追いつけなかったとさ。

STAGE 12：光の翼の歌

：ストライクノワールがぶっ壊れ、生身で時空トンネルっぽいやつに入った俺。するともう自動的に違う機体に乗っていた。コンソールを見てみると、

『GT-9600-D ガンダムレオパルドデストロイ』
とあった。

武装を見てみると、

『ツインビームシリンダー
ヘッドビーム砲

11連ミサイルポッド

ショルダーランチャー

ビームキャノン

ホーネットミサイル

ブレストガトリング

ビームナイフ

セパレートミサイルポッド

ヒートアックス』

て多いわ！ 使い熟せんのかよ！？

としょうもないツツコミを余所に、時空トンネルの出口が目の前になり、トンネルを出た。

出てみると、レオパルドデストロイ（以下、レオパルドDと表記）はなんか高い位置に着地していた。建物がいくつか見えたが、よく見ると断頭台が……。なんて縁起でもない。
すると、脇から声が聞こえた。

「あなたは……？」

振り向くと、なんか見覚えがある機体があった。調べると、『GAT-X105 ストライク』とあった。ストライクノワールとなんか関係あるのかな？

「俺か？ 高嶺薫。よろしく」

「僕、キラといいます。キラ・ヤマト」

（宇宙）戦艦 マト？
と心中でボケてると、

「君のも、ガンダム？」

「みてーだな」

「ヘリオポリス以外でも造られていたのか……？」

「ヘリオポリス？」

「え……ヘリオポリス知らないの!？」

「どこそれ？ アメリカかどっか？」

「あの、資源衛星の……」

「シゲエーサー？」

「……」

と不毛な会話の最中、2機のガンダムタイプが降りてきた。

「……どうやら敵が来たみたいだぜ」

「あれも……ガンダム……？」

キラが怪訝そうに2機のガンダムタイプの方を見た。

「イージスでも、デュエルでもない」

キラは何やらキーを打ち始めた。

「パック換装、ソードストライカーを！」

と言った次の瞬間、ストライクはあっという間に武装を変えた。

「あ、この機体、シンと一緒に戦った時……」

敵だった機体だ。きっとこの機体をオリジナルとしてあの機体が複製されたんだろな。

「僕が囷になる。君は後方をお願い！」

「任せなさいって」

そう言ってレオパルドDを下に降ろし、着地した。歩行しようとしたところ、

「あ、こいつ滑るんだ」

両足を地面につけたまま滑るように進むレオパルドD。足の裏に車輪でもついてんだな。間違っても写 眼はついてないな。

「……まずは牽制だな。みたところ今のストライクは格闘機だからな、こつちにも注目を集めねえとキラが蜂の巣にされちまう」

と長つたらしく言い、左肩部の11連ミサイルポッドを発射させる。11つのミサイルが一斉に……なんだ？ V2ガンダム？ に飛んでいった。V2もこちらに気付き、こちらのコクピットの黄色いアラートが点灯する。

「そこだな！」

背部にあるツインビームシリンダーを、レフトアーム及びライトアームに装備し、腕が火器と化す。両手を前に突き出し、右手からは細かいガトリング砲が、左手からは収束率が右より高そうなビーム砲がバシユバシユ出ている。

「……こんなに弾幕は必要ないな」

レフトアーム側の射撃をやめ、ライトアーム側のガトリング砲のみでV2ガンダムを牽制する。

V2ガンダムの方も、射撃戦では勝てないと悟ったのか、こちらに接近しているような動きになった。

「接近してきたか」

更に左肩や左脚部のミサイルでV2ガンダムの動きを制限する。ミサイルはV2ガンダムの周りでチュドーンチュドーン爆薬を飛ばしていた。

「……擬似無双ゲーじゃね？」

レオパルドDのあまりの火力に自分でも啞然とする。

「カオルの機体、なんて火力だ……」

そう言いながら、左肩にあるビームブーメラン『マイダスメッサ』をぶん投げる。V2はひらりと避けるが、ブーメランの戻りでヒットし、よろける。

「はああ！」

対艦刀シユベルトゲベールを大きく振り上げ、V2に突撃。シユベルトゲベールのビームの刃はV2の装甲をズツタズツタ切り裂き、V2をダウンさせた。

「カオルは！？」

：一方俺は、V2ガンダム機の機動性の高さで弾幕の中じりじりと接近され、手詰まりになってきていた。

「ええい、これならどうだ！！」

ライトアームのガトリング砲を外し、後ろにマウントし、右肩のビームキャノンと右手のリストビーム砲、引き続いて左手のビームシリンダーを引っ切り無しに撃つ。V2はこの弾幕を避け切れずに何度もヒットし、ダウンした。

「こいつ火力すげえな。下手すりゃカラミティやブラストインパルスよりも上だなあ」

関心しながら、味方であるキラの状況を見るべく、ブーストで上昇しようとしたその時、

「え、何コイツ!? 全然上がらないじゃん!!」

レオパルドDの垂直上昇はかなり遅く、数秒かかってやっと自分の高さくらいの建物に乗れるくらいだった。

「……三元的動きは苦手みたいだな……」

よ、と建物から降り、ズシン、と着地した。

「……ま、ひたすら滑って弾幕張るだけさ」

と割り切ったところでV2がダウン復帰した。

「オラオラあ!」

再びミサイルで牽制し、V2の動きを制限。V2は上昇するが、ミサイルの誘導はあまり切れず、数発当たり、よろけた。

「……そこだ!」

ここで流派THE・薫の奥義『斧投擲』発動!

ヒートアックスはくるくる回転しながらV2に向かって高速で飛ぶ。V2は必死に逃げるが、奥義に屈することになった。そして、V2は爆散。

「やったぜ！」

思わず機内でガッツポーズをしていた。

「……すごい、あの機体……」

逃げるV2を追いかけてながら関心するキラ。V2はなおも逃げ撃ちする。

「く、ちょこまかと！」

ストライクも負けじとバルカンを撃つが、ビームライフルには分が悪い。

「……仕方がない、ムウさん！」

「任せろ、坊主！」

キラは、ムウの駆るメビウス・ゼロを呼び、V2を追いつけさせる。

「うおりゃ！」

メビウス・ゼロは有線式ガンバレルを射出し、V2の周りに停滞させる。

「そこだ！」

ムウがカチツとトリガーを引くなり、ガンバレルから砲弾が無数撃ち出され、V2をダウンさせた。

「大尉、ありがとうございます」

「ふ、このくらい」

「またお願いします」

「おうよ」

メビウス・ゼロはステージ外に撤退した。

「……さて、お次は……？」

と上空を見てみると、

「まだ強そうな人がいる……どういう人……？」

という声が新しく来たV2から聞こえた。どうやらストライクの方を見て言っているようだったが……

「悪かったな、自分弱そうで！」

とレオパルドDの右のビームシリンダーを再びセットさせ、ガトリングでV2を牽制する。

「ビームのガトリング!？」

ウツソは回避運動をし、物陰に隠れる。

「ち、隠れたか」

：右手のビームシリンダーをとりあえず下ろし、脚部ミサイルをボバババツと撃つ。

「アサルトバスターで！」

ウツソは爆風の散る物陰の裏でアサルトバスター（以下・A B）に換装し、メガビームライフルを持った他にいろんな装備がついた。

「当てる！」

V 2 A Bは物陰からぬう、と姿を現し、メガビームライフルをレオパルドDに撃つ。

「おっと、こいつは」

ひょいっとステップを踏み、回避する。

「そこだ！」

胸部のハッチを開け、実弾のガトリングを撃つ。

「く、やる！」

V 2 A Bは重そうなステップを踏む。

「地上戦ならレオパルドDの方が俄然有利な筈だ。空にさえ飛ばさ

「なきやこつちのもんだ」

ガトリング連射をやめずに左肩のミサイルポッドのハッチも開け、ミサイルをボバババツと発射。

「同時発射!？」

ウツソが露骨に驚く。

「……あの人……ゾンビじゃない。……普通の人……?」

ウツソはレオパルドDの方を見ながら呟く。

「……僕たちが戦うことなんてないんです!」

ウツソはレオパルドDに向かってV2ABのスピーカーで言う。

「……何だ?」

薫も砲撃の手を止める。

「赤いガンダムのパイロットさん、あなたは どうしてそれに?」

・完全に戦闘の意志はないようだ、栗色のおかつぱ頭の子供がコクピットから出てきている。

「なんかよくわからんが、この変な世界に来てからはいろんな見ず知らずの機体に乗ってんだよな」

そう言いながらシートベルトを外し、ハッチを開け、両手を上げ

ながら外に出た。

「……お兄さん、あの、名前は？」

「高嶺薫」

「カオルさん、両手を下ろして下さい」

断る理由もないので素直に下ろす。

「……あの、嘘だと思われてしまうかもしれないんですけど、この世界にゾンビがいるって知ってますか？」

嫌ほど知ってる。あれは気持ち悪い。

「ああ、知ってる」

「知ってるんですか!？」

「一度この目で見たさ」

ああ、思い出すだけでヤダ。

「……あっちにもV2が……」

ウツソはストライクにやられかけているV2の方を見る。

「おそらく君の機体を複製したやつだ」

「複製？」

「複製されたやつは、D G細胞つつう変な細胞によって形成されるんだ」

「ほう、D G細胞を知ってるのか？」

と、謎の声が聞こえた。

「あれは……シャイニングガンダムじゃないか」

俺がかじるくらいに知っているGガンダム。まさにそのシリーズの人物、ドモン・カッシュだった。シャイニングガンダムが高い建物から降りてきた。

「……おいお前、この男を知らないか？」

ドモンがコクピットから降りてきて、一枚の写真を見せてきた。そこには、オールバックの三つ編みのグレーの髪したオッサンが写っていた。

「……あの、この人かどうか知らないけど、東方不敗つつうオッサンだったら知ってるよ？」

「それだ！」

ドモンは俺に指を指しながら叫ぶ。

「何で知った!？」

「え、普通に戦ったけど……? んまあD G細胞の複製だったって

いう可能性もあるけど……」

「その通り！」

とまたも声がした。今度は聞いたことがあった。そいつはまさに

……

「東方不敗か！？」

「ふん、貴様のようななどこの馬の骨とも知らぬ奴に呼び捨てにされる筋合いなどないわ！」

「すいませーん」

「……」

いつの間にかいたキラは俺の謝罪に冷汗をかいていた。

「……ウオッホン、ほう、ドモンもいたのか」

「今日こそあんたを倒す！」

「ふん、やれるもんならやってみるがよい！ こやつらを倒してかなー！」

すると刹那、地面がぐらぐらと揺れだし、そこから変なガンダムの頭した蛇みたいなのがうじゃうじゃ出てきた。正直な感想、

「……なんだこれ、キモいわ」

である。と言いつつも、右肩のビーム砲をそいつらに向け発射させていた。

「……く、こいつら！」

ストライクはがむしゃらにソードを振る。

「ええい！」

V2は何やら背部から羽根みたいなのを出し、そいつで蛇みtainなのをズババツと斬っていた。

「……！ 邪魔だ！」

シャイニングガンダムは、サーベルを出し、バシユバシユ斬っていた。

……てか、さっきから擬音語ばっかだな。

「何なんだよ、倒しても倒しても次から次へと出てきやがる！」

引つ切り無しにミサイルやらビーム砲やら、下手すりゃ全砲門を開けて火器を放っているが、一向に減る様子がない。

「……く、この装備じゃ……！」

キラはまたもキーを打っている様子である。

「ランチャーストライカーを！」

瞬間、ストライクは長砲身のランチャーを左手に持った形態にな

った。

「これ以上は、やらせないぞ……！」

ストライクはその巨大なランチャーを構える。蛇がストライクに迫る。

「いけえ！」

ランチャーの銃口から溢れんばかりの極太のビームを放ち、数多の蛇を消し去った。

「く、再生が追い付かん！」

東方不敗はどこかに身を潜めた。同時に時空トンネルも開いた。

「お、開いた！ 早くしねえと！」

レオパルドDの身を翻し、時空トンネルへと急がせた。

「お兄さん、僕も行きます！」

ウツソのV2もついてきた。

「じゃあ僕も、おいとまさせていただきます」

キラのストライクも続いた。

時空トンネルの中。3機が仲良く飛行している中、ドモンの心配

をする俺がいた。

「ドモンのやつ、結局一緒に来なかったなあ」

「……彼、大丈夫かな……？」

「僕も、心配です」

キラやウツソも表情を曇らせる。

「……なんか、東方不敗のおっちゃんとは因縁がありそうだしな」

「そうなの？」

「今日こそつつてたからさ、あいつが」

「……あ、そういえば」

キラは合点がいったように言う。

「……とにかく、このわけのわからん世界を動かしてるキーマンが東方不敗であることは確かだ。何かまたわかったら連絡くれい」

「うん、わかった」

「わかりました」

キラとウツソが答える。

でもそうは言ったもののやっぱりほっとけない気がしてきた。
二人に問う。

「キラ、ウツソ、やっぱ……」

「……僕も行くよ」

「僕も行きます！」

あとの二人も心配だったようだ。

「よし、満場一致、戻るぞ！」

キラやウツソが同意し、俺のレオパルドDを翻し、ストライクやV2も続いた。

その頃、ドモンは。

「くそ、どこだ！」

「ここにおる！」

どうやら突然姿を消した東方不敗を探していたみたいだが、すぐに返事がきた。

「ふん、貴様まだおったのか」

「東方不敗マスターアジア、覚悟オ！」

シャイニングガンダムは怒りのスーパーモードを発動させて拳を構えながらマスターに突撃。

「ふん、スーパーモードを使いおったか」

東方不敗は不敵に笑い、マスタークロスを出す。

「たあああ！」

シャイニングは大きく拳を振るうが、空振りし、

「甘いわ！」

マスタークロスの鞭打ちで返り討ちにされた。

「どううあッ！」

シャイニングが不様に倒れる。

「さつさと逃げればよかったものを！ 愚かな奴だ！」

「愚かで悪かったな！」

とドモンと東方不敗両者が謎の声に驚いた顔をした。

「……名付けて、『愚か者戦隊オロカンジャー』だぜイ」

ドモンと東方不敗が振り向いた先には、中央にレオパルドD、右にはストライク、左にはV2がなんとかレンジャー的な立ち住まいで仁王立ちしていた。

キラが薫に問う。

「……ねえ、これわざわざやる必要あったの？」

「ツッコミ無用！」

「……」

キラは絶句するしかなかった。

「ふん、まだおったのか」

東方不敗は特に焦る風も見せなかった。

「お前ら……まだいたのか!？」

ドモンは明らかに驚きを隠せていなかった。

「さあて、今日はどんな悪者が平和を脅かしてるかなア？」

「ふん、つけあがるな！ 小僧ども！」

マスターガンダムがズシンズシン走ってきた。

「来たなア」

ツインビームシリンダーを構え、弾幕を張る。

「くう、小癪な！」

マスターガンダムはこの弾幕を華麗に避けていたが、中々前に進めずにいた。

「……エールストライカーを！」

ストライクは、ランチャーからエールに換装し、ビームライフルを牽制として数発撃った。

「ええい、流石に飛び道具にはかなわんか」

東方不敗は苦し紛れにガンダムヘッドを数多召喚した。

「またこいつら……！」

キラはマスターへの攻撃をやめ、ビームライフルをしまい、抜刀した。

「てああああ！」

ピンクの刃がガンダムヘッドを切り裂く。

「ええい醜陶しい！」

：レオパルドDのミサイルをどんどん撃つが、蛇の猛攻は止まらなかった。

「しぶとい奴め！」

ビームナイフを投擲し、蛇を切断。また別方向からもやってくる。

「しつけないだよ！」

右肩のビーム砲を連射。蛇を撃破。

「お次は！」

レオパルドDを向き直させ、敵を捜す。

一方のドモンは、ガンダムヘッドの処理は三人に任せて自身は東方不敗の駆るマスターガンダムと対峙していたが、かなり劣勢だった。

「く、どうすれば！」

ドモンは思うようにダメージを与えられずに苦悶していた。シャイニングガンダムもボロボロだった。

「ふん、そんなものか、貴様の腕は！ 笑わせるわ！」

「ぐう……」

ドモンは齒軋りする。すると刹那、彼はこの世界に来る前シユバルツから『明鏡止水』を伝授されたのを思い出した。

「父さん、母さん、……兄さん……師匠……？」

ドモンの中に思い出深い人物がフラッシュバック式に出てきた。すると次の瞬間、水が水面に零れる音が聞こえた。

「！？」

シャイニングガンダムは黄金に輝き始めた。

「ん？ 何だ？」

流石の東方不敗もシャイニングの異変に怪訝そうな顔をした。

「これが……明鏡止水……？」

気がつけば、ドモン自身も黄金に輝いていた。

「ふん、そんなもの！」

マスターガンダムは構わずシャイニングガンダムに突撃し、正拳を入れようとするが、あっさりと避けられてしまう。

「ええい、小癪な！」

マスターは何度も拳をシャイニングにぶつけようとするが、それがシャイニングに当たる様子はない。東方不敗はかなり焦っていた。

「何だ？ 何が起こっている？」

「あんたの動きは筒抜けだ」

「ぬう、付け上がりおって！」

マスターガンダムは尚も猛攻を続けるが、やはり金色のシャイニングガンダムに当たる気配はない。

「そこだ！」

今度はシャイニングガンダムがマスターに正拳をくらわそうとした。

「ふん、そんなもの」

東方不敗は不敵に笑うが、

「ッ！？」

マスターガンダムはしっかりとシャイニングガンダムの正拳を受けていた。

「言っただろう、あんたの動きは筒抜けだと」

「〜！」

口惜しそうに齒軋りする東方不敗。

「ぐう、再生が追い付かん！　ここは一旦退く！」

「待て、東方不敗！　ぐお！」

マスターガンダムが逃げたところからガンダムヘッドが地面からうじゃうじゃ出てきた。

「くう、邪魔だ！　どいてくれ！」

シャイニングはビームソードを抜刀し、刃を巨大化させ、一面に

いるガンダムヘッドどもを薙ぎ払った。

「……？ どこだ、東方不敗！？」

全てのガンダムヘッドを薙ぎ払われたステージにはもうマスターガンダムはいなかった。

同時にシャイニングガンダムの装甲が通常色に戻った。もう機体にガタがきているのか、各関節から煙が出ていた。

「く、シャイニングガンダム、これまでか……」

悔しそうに膝をつくドモン。

「ドモン、大丈夫か？」

レオパルドD、ストライク、V2が中破したシャイニングガンダムに駆け寄る。

「俺は大丈夫だ」

ドモンが機体から出てきた。それを見てか、薫やキラ、ウツソもそれぞれの機体のハッチから出てきた。

「だがシャイニングガンダムはもう動けない……」

黒い煙をだすシャイニングガンダムに振り返りながら儚げに言う。そして、膝についていたシャイニングガンダムが遂に前に倒れた。砂や塵が倒れたシャイニングガンダムの周囲を舞っていた。

「……こいつは、俺に明鏡止水の心を悟らせてくれたんだ」

少し笑顔を覗かせたドモン。

「……ありがとな、シャイニングガンダム……」

「……おい、あれ何だ？」

「ん？」

薫が指さした彼方にはガンダムタイプのMSがこちらに爆走してきていた。

「あれは……？」

怪訝そうに目をしかめるドモン。こちらに向かってきているその正体はゴッドガンダムだった。

「ガンダム……？」

ドモンがそう言ってしばらくすると、ゴッドガンダムは減速し、彼の目の前に重々しく着地した。着地してなお仁王立ちしているゴッドガンダム。

「俺の……？」

「じゃね？」

薫が不意に間抜けな声で答えた。

「……」

ドモンは無言でさっさとゴッドガンダムへと足を運んだ。

「……ゴッド、ガンダム……？」

ドモンが機内でコンソールに出ている文字を読み上げる。

「俺の……新しいガンダム……！」

力が漲るように言うドモン。

「さらば、シャイニングガンダムよ！」

ドモンの駆るゴッドガンダムはいずこに消えた。

「……」

「……」

「……」

残された三人は無言で硬直する。

「……じゃあ、俺達も行くつか」

沈黙をぶった切ったのは薫だった。

「そうだね」

「そうですね」

キラやウツソも続き、それぞれ分散した。

「またどこかでな」

「うん」

「薫さんも、お元気で！」

レオパルドD、ストライク、V2はそれぞれの時空トンネルに入って行った。

STAGE 13：ジオンの残光

アリオスで時空トンネルの中を飛行中の麗はもうすぐ出口に出るところだった。

「また可変機かなあ」

誰ともなく愚痴を零す麗。

「それ！」

：私の掛け声と同時に時空トンネルを出た。景色を見ると、真ん中にソロモンらしきものが見えた。

「機体は……？」

次に自分の機体をチェックしたところ、コンソールには『アルトロンガンダム』とあった。

「TV版？ EW版？」

詳しく見てみると、背部のビームキャノンやドラゴンハングの火炎放射器があることからTV版であることが判明した。

「ナタクか」。いいよねナタク」

すっかり陶醉してしまった私。
どうやら味方が来たようだ、こちら側にある機体が降り立った。

「私はアレックスのクリスよ、よろしく」

「こ、こちらはアルトロンガンダムの網走麗です。よろしく願います」

もちろんクリスも知っているが、お決まりの如く初対面のように振る舞う。

「……そんなガンダム、あつたかしら……？」

クリスが顎に手を当てながら言う。

「ああ……そうですか？」

とりあえず曖昧な返事を返しておいた。

「……！？ 敵機が来るわ！」

クリスが陰しい声で私を促す。

敵機はザク改とグフ・カスタム。バーニイとノリスさんの機体が複製されたのだろう。

「正義は……俺が決める！」

ごとび気分でツインビームトライデントを振り回し、ブーストを吹かす。最中、背部にあるビームキャノンをザク改に連射する。ザク改は回避する。

「流石にこのヘナチヨコ弾には当たってくれないか……」

口元を上げ、ザク改との間合いを詰める。この機体の
『中距離での白兵戦』

というコンセプトの名目通り、中距離からドラゴンハングを飛ばす。
ザク改はドラゴンハングの誘導性と判定の大きさを避けれずダウンする。

「流石はナタクね」

思わず操縦桿を撫でる。

「クリスは平気かなあ」

一方クリスは。

「いい加減墜ちなさい！」

アレックスがタツクルし、グフ・カスタムをダウンさせるが、グフは受け身をとった。

「懲りないわね……」

アレックスは抜刀し、ピンク色のビームがほとばしる。

「たあああ！」

アレックスはそのまま突撃するが、グフ・カスタムはワイヤーを射出し、アレックスの突撃に意憑をつこうとするが、いかんせんアレックスはチョバムアーマーを纏っているが為に焼け石に水。

「無駄ね！」

アレックスはそのままグフ・カスタムを一刀両断。グフは爆散する。

「ふう、一つ」

クリスはデコにかいた冷や汗を拭った。

一方のアルトロンは。

「ち、すばしっこいわね……」

中々ビーム砲が当たらず多少いらつきを覚えた麗。

「これならどう!?」

アルトロンは足を止め、ドラゴンハングを構え、火炎放射した。火炎放射の判定が大きいお陰か、見事ザク改に命中して爆発と共に焼失した。

「お次は!?!」

敵を探すが、一瞬敵が全くいなかった。しばらくして、再びグフ・カスタムとザク改が来た。

「……あのグフ、ゾンビ兵ね」

麗がコンソールを見ながら操縦桿を強く握り直す。

「グフは私がやるわ！ クリスはザクを！」

「わかったわ」

アルトロンとアレックスは散開した。

「偽グフめえ〜！」

麗のアルトロンは背部のビーム砲を連射。何発かは命中し、グフの足を止めていた。

「グウ……」

偽グフは苦し紛れにジェットコアブースターにワイヤーを引っ掛け、三次元的動きを披露。

「JCBね。多様されると厄介ね……」

麗は機内のボタンを押した。

「ガロード！」

「任せな、レイ！」

麗はガロードのGXを呼び出した。今回はディバイダーのようだ。

「あの青い機体の動きを制限して！」

「お安い御用ってね！」

ガロードのバイタリティ溢れる返事と同時にGXはディバイダーを展開して構え、

「そこだな！」

ハモニカ砲が横に広がるように発射された。見事、偽グフのワイヤーが切れて落下した。

「そこね！」

アルトロンはすかさず左のドラゴンハングを飛ばして偽グフを捕縛し、こちらに引き寄せた。

「たあああ！」

右手にツインビームトライデントを振りかぶり、偽グフが近付くなりそれを風車のようにぐるぐる回し、偽グフに多段ヒットさせた。

「とどめよー！」

アルトロンはトライデントの回転をやめ、おもつくそ右薙ぎした。薙ぎ払われた勢いで力無く飛んでゆく偽グフは虚空で爆散した。

「一人でカツコつけちゃってんじゃないの〜」

「カツコつけてないってば」

ガロードと麗は他愛のない会話を交わす。

「おつといけね、早く戻んねえと」

G Xは焦った風にステージ外に向かった。

「またお願いね」

「おうよ！」

G Xはディバイダーを背部にマウントし、いずこに消えていった。

「クリスは？」

一方のアレックスは、ザク改が引つ切り無しにばらまいてくる手榴弾に疲弊していた。

「くうッ！」

アレックスは必死に避けているが、足を取られてダウンした。

「こんなことで……！」

アレックスは直ぐさまダウン復帰した。すると、

「お願いします！」

クリスは2機のジムスナイパーを召喚した。二本のピンクの火線がザク改を貫き、ザク改は爆散した。

「これで2機ね」

クリスは機内で右手をぶらぶらさせた。

「クリス、大丈夫？」

「ええ」

麗ことアルトロンがアレックスに寄る。

「次はどいつかしら」

：私は額の汗を二の腕で拭った。
すると、向こうからガンダム試作2号機サイサリスがやってきた。

また違う方向からはサザビーが。

ナタクは防御力が低いので、ビーム兵器が強力なサザビーはチョバムを纏っているアレックスに任せるとしよう。

「クリス、あの赤い機体は頼んだわね！」

「わかったわ」

散開し、フルブーストする。

（……赤い彗星、シャア・アズナブル大佐の作戦、誰にも邪魔はさせん！）

サイサリスのパイロット、ガトーは心中で呟く。

「しかしあの機体、データにないぞ」

ガトーがアルトロンを見て苦虫を潰したような顔をする。

サイサリスを抜刀させ、そのままアルトロンに突撃。アルトロンのツインビームトライデントと軋み合う。鮮やかな色をしたビームの飛沫が溢れんばかりに飛散する。

「くッ、中々骨のある……！」

ガトーが歯を食いしばる。

「ぬうあああ！……！」

ビームサーベルを思いつきり振り払い、間合いが空く。

「さすがはサイサリスね……」

アルトロンの体勢を整えながら麗も緊張していた。

「どこの誰かは知らんが、私の前に立ちはだかるならこの我が正義の剣で薙ぎ払ってくれる！」

サイサリスがアルトロンに特攻。

（この機体、ゾンビなのかしら……？）

ゾンビかどうか疑問符がつく麗。

「そこだ！」

レフトアームのドラゴンハングを発射した。

「そんなもの！」

サイサリスは飛び上がり、飛んできたドラゴンハングを踏み付けた。

「我々の理想……邪魔はさせん！」

踏み付けたドラゴンハングをサーベルで串刺しにしようとするサイサリスだが、

「ええい、させるか！」

今度は右のドラゴンハングから火炎放射した。

「ぬ！？」

逆手に持っていたサーベルを順手に戻し、シールドを構える。

「ぬううう！」

シールドが火炎で照射ながらノックバックするサイサリス。自機を守ったシールドが少し焼け爛れていた。

「貴様何故私の邪魔をする！？」

ガトーがサイサリスのコクピットの中麗に叫ぶ。

「貴方の目的は何!？」

「私の目的だと?」

ガトーは聞き返す口調だったが、すぐに麗に答えた。

「大佐の作戦についてゆくのみだ!」

「ダメよ! 核の冬が来るわよ!」

「そんなものは私は知らぬ。所詮余所のことだろう」

サイサリスを再突撃させるガトー。

「……どうして……どうして、罪のない同じ人間をそう簡単に殺せるわけ!？」

「貴様とてMSのパイロットだろう。今更な理想を掲げるな!」

「あたしは兵士じゃない!」

アルトロンはバックブーストしながら背部から伸びてるビームキヤノンを連射する。

「何?」

麗の言葉にガトーの脳内に疑問符が浮かぶ。

「でも、乗らなきゃゾンビに殺されるから……仕方ないのよ! だから、そんな軍人の堅苦しい理論なんて屁のカッパよ!」

アルトロンは残ったライトアームのドラゴンハングを飛ばす。サイサリスは逆噴射するが間に合わず、咄嗟にシールドを構えるもののシールドがまるっと掴まれた。

「……………くッ、外れん！」

ガトーが悔しそうに操縦桿をガチャガチャ動かすが、サイサリスは無駄にあがいているだけだった。アルトロンは、背部のビームキヤノンの砲塔をこちらに向ける。

「……………おのれ、民間人の小娘に追い詰められるとは……………何たる失態……………」

「小娘じゃなくて網走麗！ それよりガトーさん、どうしてここに？」

「ん、何故私の名前を！？」

：流石のガトーも驚いているようだ。そりゃそうだ。

「『ソロモンの悪夢』……………結構有名よ」

「……………ふ、光栄だな。私の知らぬ者にも知れ渡っているとは」

ガトーはあぐのをやめて穏やかな口調になる。

「貴様からは邪気を感じない。軍人ではないな？」

「はい」

「一体どこから来た？」

「西暦っていう暦から来ました」

いつの間にか敬語になってる私。

「せいれき？ 聞いたことないな」

ガトーが難しそうな顔をしているのがモニターで見た。

「私は宇宙世紀から来た。Universal Century、略してU・C・だ……それより、そろそろ離してくれないか？」

「……どうしよっかな」

「ぬう、茶番はよせ！」

サイサリスはビームサーベルでシールドを掴んでいるドラゴンハングを切断しようとしている。

「はいはい、わかりましたよ」

ガコツとドラゴンハングをサイサリスのシールドから外す。

「まったく……」

頭を抱えるように呻くガトー。

その時、ふとクリスのことをすっかり忘れていたことに気付く。

「クリスは！？」

ナタクのブーストを全開にし、援護に急ぐ。幸い、ナタクは速いためすぐに着いたが、チョコバムアーマーは度重なるダメージで無惨に剥がされており、見るに堪えなかった。

「まずいわ！」

ナタクを少し減速させながら背部のビームキャノンをサザビーに連射する。サザビーはこちらに気付き、回避する。

「甘いな」

サザビーに乗るシャアはアルトロンのビームキャノンを避けながら不敵に笑う。

「当てるつもりはないわよ」

麗は軽やかに言つてのけた。

「ふん」

シャアは別に気にした風もなくビームショットライフルを撃つ。

「……」

さっきのおどけた雰囲気殺して麗は丁寧に回避行動をとる。アルトロンはツインビームトライデントを構えて突撃する。

「私に白兵戦をしかけるのか？ 甘いぞ！」

サザビーはバックパックファンネルをいくつか出し、迎撃する。
ファンネルはアルトロンを囲む。

「そんなもの！」

麗の叫びと共にアルトロンは両手を真横に伸ばし、ドラゴンハン
グから火炎放射をした。そして、放射しながらベーゴマのように高
速回転し始めた。

「ッ、こんなふざけた技で！」

サザビーは垂直上昇し、火炎放射から避けた。残念にもファンネ
ルは焼失してしまった。

そうかと思うとアルトロンは再びツインビームトライデントを構え
直し、サザビーに突撃した。

「ぬう、やむを得ん！」

サザビーはビームトマホークを抜き、アルトロンのツインビーム
トライデントと激しくぶつかり合い、光の飛沫が飛び散る。

その頃、サイサリスは中破したアレックスの近くにいた。

「あの機体……連邦か……？」

ジオンとしての自然な敵意が芽生えるが、麗の言葉を思い出し、
攻撃するのは憚れた。

すると、アレックスの近くにザク 改が降り立ってきた。

「あ……」

クリスは力のない声でモニター越しにザクをみる。ザクは容赦なくマシンガンを連射した。

「きゃあああああ！」

クリスのあげる悲鳴が聞くに堪えなくなったのか、サイサリスのブーストを吹かし、サーベルを最大出力にし、フルブーストしてそのサーベルを振りかざした。

「ぬうあああああああああ！」

ザクはサイサリスの怒涛の迫力に一瞬怖じけづいたが、すぐに平静に戻してひらりと避け、ヒートアックスを取り出した。

「ふん、そんな軟弱なもので！」

ガトーは構わず突撃し、一瞬ザクのヒートアックスと軋み合うが、案の定ヒートアックスはあえなく折れてザク自信も縦に真っ二つにされた。

ザクは爆散した。

「……ふ、鎧袖一触とはこのことか」

ガトーは不敵に笑った。

アルトロンとサザビーの一騎打ちが続いていた。

「小娘！ 何故私の邪魔をする！」

シヤアは麗に問う。

「アムロさんに聞けば？」

「何！？ アムロを知っているのか！？」

シヤアは明らかに驚いた風だった。

「ええ。そろそろ……おどきなさい！」

アルトロンでサザビーを蹴った。サザビーは軽く吹っ飛ばされた。

「ぐう……」

シヤアは苦虫を潰したような顔をする。サザビーは受け身をとった。

「これまでだ、小娘よ！」

サザビーは踵を返し、撤退してしまった。

「あ、待て！」

と麗がアルトロンで追い掛けようとしたが、

「アバシリ、……味方はいいいのか？」

ガトーが麗を引き止める。麗がガトーの言葉に、アルトロンを停止させ振り返らせると、大破したアレックスが膝をついていた。

「あ……」

アルトロンを落ち着かせ、2機の居る所にブーストで移動させる。

「……すまない、敵が来たのだが、少しダメージを負わせてしまった……」

ガトーが残念そうに言う。

「クリスは大丈夫なんですか!？」

麗が焦りながら言うが、

「私は……なんとか大丈夫よ」

アレックスからのそのそと出てくるクリスがいた。

「はあ……よかった……」

ホッと肩を撫で下ろす麗。

「そうか……この世界にはゾンビが……」

麗がこの世界のことをガトーに教えた。また麗はガトーから、

「この世界に着いた時ちようどシャア大佐に会ってそれからついていった。しかしどこか違和感を感じてないわけではなかった」という話を聞いてもらえた。

「ガトーさん、クリス、またどこかで！」

麗はアルトロンで手を振る。それに連られてクリスも手を振る。ガトーは微笑みながら麗を見送った。

「……さっきは、ありがとうございました」

クリスがガトーに話し掛ける。

「……うむ」

ガトーが若干話しづらそうに答える。

「……あなたがお察しの通り、私は連邦です。……元の世界では、どうか戦場では会いたくないものですね……」

「……そうだな」

ガトーは若干思い詰めた様子で答えた。

「……君の幸運を祈る」

ガトーはクリスに告げ、サイサリスに乗って行ってしまった。

「……さようなら、ガトーさん……」

もう会えない気がして悲観的になるクリス。自分もアレックスを
時空トンネルへと歩を進めた。

その頃。

「ぬう……こやつら、やりおるな……」

でかいモニター室つばい所に東方不敗が腕を組んで苦虫を潰した
顔をしていた。

「どうするんだ、マスターアジアとやら」

モニター室に入ってきたギム・ギンガナムが偉そうにスタスタと
入ってきた。

「決まっておろう……ステージを増やすのだ」

東方不敗は決まったように答える。

「まだパワーは足りないのか？」

「そろそろ僕たちも待ちくたびれたよ」

今度はシャギア・フロストとオルバ・フロストが並んで入ってき
た。

「……役者は揃いつつある……。ふっふっふ、見ておれ、あやつら

ども……！」

東方不敗はモニター室の中、不敵に笑った。

STAGE 14：ロボットなんか知らない

：レオパルドDで時空トンネルを駆ける俺もとい薰。こいつ、無重力だと飛べるんだね。……当たり前だよな。

そんなことはともかく、出口が見えてきた。レオパルドDでトンネルを脱出。

外を見ると、いくつものクレーターと建物があり、背景は宇宙だった。

ふと、自機が気になり、コンソールを見てみると、

『ガンダムエアマスターバースト』

とあった。とりあえず、二丁のライフルと機銃、ミサイルがあるみたいだが、変形ができるみたいだ。ヒイロが使ってたアレみたいな感じなのだろうか？

と自問しているところに、

「よ、味方さん！」

という気さくな声が聞こえてきた。その方向を見ると、黒くて大きな鎌を持ったガンダムだった。

「デュオ・マックスウェルだ。よろしく頼むぜい」

「……高嶺薰。よろしく」

デュオというらしい。あの禍々しい見た目をしたガンダムからは想像できない明るさだな。

すると、デュオが訊いてきた。

「その機体、どこで手に入れたんだ？」

「ん、今さっき」

「……はえ？」

間の抜けた声を出すデュオ。だがそんな隙を突いてか、3機の短足寸胴よちよち歩きの奴がきた。うわあゝなんかトラウマなんだよな、あの機体。初めてここに来た時に見た機体だが、あの時はずつこけて斧投げて終わってたな……。

「なあにボケツとしてんだ！ やられちまうぞ！」

デュオのデスサイズヘルとやはら羽根をガバツと開き、鎌を振るう。羽根を開いた姿は禍々しさを増し、死神そのものに見えた。

「てええや！」

デスサイズHは、短足寸胴よちよち歩きを薙ぎ払い、爆散する。

「……俺だつて！」

エアマスターBのライフルを連射し、短足寸胴よちよち歩きを牽制した。

「そこだな！」

右手のライフルをしまい、斧を取り出し、短足寸胴よちよち歩き

に対し一直線に突いた。短足寸胴よちよち歩きから火花が飛び散る。

「たあああッ！」

斧を薙ぎ払い、装甲を切り裂いた。短足寸胴よちよち歩きは切れ目から歪み、爆散した。

「お前さんもやるじゃんか」

「へへ、どうも」

軽く笑顔を見せ、操縦桿を握り直した。

「さあ、まだまだだぜ！」

「行くぜ！」

デスサイズは鎌を構えて突撃している余所で、エアマスターBを変形させた。

「あいつのガンダムも変形するのか？」

デュオがそう呟いたのが聞こえた。

「さあて、いつちよ行きますか！」

デスサイズHはツインビームサイズを振りかぶり、カプルに突撃した。

一方のエアマスターBは両手のライフルでカプルを牽制していた。

しかし、中々当たらずにいた。

「ッ、あーも当たれ！」

薫は遂に痺れを切らしてマルチロックオンし、エアマスターBの両肩からミサイルを発射させた。それぞれのミサイルは見事カプルを捉え、カプルは爆散した。

「はあ……」

薫は肩を撫で下ろした。そして、エアマスターBをおもむろにデスサイズHへ歩ませた。デスサイズHはもうカプルを狩ったみたいだった。

「そつちも済んだみたいだな」

「ああ。たった今、斬ったとこだぜ」

デスサイズHがツインビームサイズを担ぎながらデュオは明るく答えた。

しかし、デュオがそう答えて以来、一向に増援が来る気配がない。

「……？」

「一体、どうしちゃったってんだよ？」

あまりの静けさに怪訝そうな顔で辺りを見回す薫とデュオ。すると、2機の視線の先に、マスターガンダム、ガンダムヴァサールゴ、ガンダムアシュタロンがどこからともなく現れた。

薫が開口一番に言った。

「あれア、東方腐敗！」

「馬鹿者！ 東方不敗じゃあ！」

「……あ、素で間違えた」

「お前らさっきから何やってんだよ」

薫と東方不敗の不毛なやり取りに冷汗をかきながらツツ「むデユ才。

「まあよい。ここが貴様らの墓場となる！」

と東方不敗が力説したのを、

「えゝ。俺ちゃんとお寺に入りたいんだけどお」

「墓場か……死神にはお似合いの場所だなあ」

二人はどこか緊張感が抜けている反応をしたのだった。

「……ええい、埒があかん！ 行くぞ、お主ども！」

「……我々に命令をするな」

「何だと！？」

どこか滑りっぱなしの東方不敗の余所で、

「おい、向こう結束力低いぞ」

「こりゃいだきだな」

とニヤニヤしながらひそひそ話をする薫とデュオ。

「……とは言っても、敵が多いな……カトル！」

デュオの声と同時にデスサイズHはツインビームサイズを振り回し、サンドロック改を呼んだ。

「デュオ、僕も戦うんだね」

「よろしく頼むぜい」

てなわけで、頭数が揃った。

「……行くぞ、オルバよ」

「了解、兄さん」

シャギアのヴァサーゴは、M A形態のオルバのアシュタロンに乗った。

「行くぞ、カトル！」

「無茶はしないで下さいね」

デスサイズHの後をつけるようにサンドロック改も発進した。

「……つーことは」

「よりによって貴様か！」

マスターガンダムがエアマスターBにダッシュで突撃してきた。

「走んの速えな、相変わらず」

ニヒルに言つてのけた薫は、両手のライフルでマスターガンダムを牽制する。

「ふ、この前の機体の方が凄かったぞ？」

「ちい！」

エアマスターBはバックブーストするが、マスターガンダムに取り付かれそうだった。

「こっとなつたら！」

エアマスターBは右手のライフルを腰にしまい、代わりにヒートアックスを取り出した。

「……なるほど」

マスターガンダムはマスタークロスを棒状にし、エアマスターBのヒートアックスとぶつかり合い、鏝^{くわ}ぜり合いになる。

「……つか、あんたらの目的は何なの？」

冷めた声で東方不敗に訊う薫。

「人類の抹殺よ！ この美しい地球の自然を荒廃させたのは誰ぞ！
？ 紛れも無い、人類なのだ！」

「……あそ。じゃあまずは自分を抹殺すれば？」

「それでは意味がないのだ！」

当然の答えを返した東方不敗。

「あのさー、あんたらんならん思想の為に俺たちが死ぬとかさ
ー、はつきり言って迷惑なんだけど？」

「では貴様らは、地球の環境を汚染している自分たちの行動を省み
たことがあるのか？」

「ゴミのポイ捨てはしてない」

「違ーーーう！ー！」

東方不敗と薫の住む世界は違う。東方不敗も間違っていないければ、
薫もあながち間違っていないのである。

「貴様らがどこから来たかは知らぬが、デビルガンダムは、全ての
時空の世界をも支配し得るのじゃあ！」

「……あ？ もっかい言ってくれる？ なんかすげー大事そうじゃ
ない？ それ」

「つまりは……貴様らの元々いた世界をも支配するのじゃあ！」

東方不敗は野望に溺れた顔をする。

「……やっぱ迷惑な話だな。あんなゾンビが街じゅうろろろされてもらっちゃ困る！」

薫は出鱈目ながらも理屈を並べ、エアマスターBはヒートアックスでマスタークロスを押し込み、更に激しく鏝ぜり合う。

「ふん、心配はいらん。その前に貴様は死んでいるからだあ！」

今度はマスターガンダムがマスタークロスでヒートアックスを押し返し、もう更に激しく鏝ぜり合う。

「ッ！」

エアマスターBは遂にマスターガンダムにキックをかまそうとし、マスターガンダムにひらりとかかわされるが、お望み通り、間合いを離すことができた。エアマスターBは再びライフルを取り出し、連射した。

「わしが憎いなら、このわしを倒してみろ！」

東方不敗がそう叫ぶと、

「……個人的恨みはないが、あんたには退場してもらおう！」

エアマスターBはウイングを展開し、ブースタービームキャノン
を撃つ。

「ぬう！」

ホリゾンタルに複数のビームを撃ったため、マスターガンダムはやむなくジャンプする。すると、

「そおら！」

エアマスターBは、宙に浮いているマスターガンダムにヒートアックスをぶん投げた。

「ぶん！」

マスターガンダムはひらりとかわすが、ヒートアックスはブーメランのような軌道を描いて、再びマスターガンダムに迫る。

「小癪な！」

マスターはマスタークロスで高速回転するヒートアックスを薙ぎ払おうとする。

「させるかよ」

エアマスターBはノーズビームキャノンでマスターに対空砲火する。

「ツツツ！」

マスターは仕方なくひらりとかわし、着地した。ヒートアックスがエアマスターBのもとに戻る。

「ぬう、腕を上げておるな、カオル」

東方不敗は苦虫を潰した顔をする。

一方、デュオ & カトルは。

「相手は射撃連携が上手です。デュオはクロークを纏って下さい」

「……ああ、わかった」

カトルの助言でデスサイズHはアクティブクロークを纏った。

「後はデュオにお任せします。後方から援護します！」

「りょーかい！ 突撃あるのみい！」

デュオが叫んだのと同時にデスサイズHがガンダムヴァサゴに正面から突撃する。

「……こいつ、馬鹿なのか？」

ヴァサゴはデスサイズHにビーム砲を発射。しかし、ビームはデスサイズHの装甲を貫通できず、攪乱されていた。

「な……攪乱された！？」

シャギアは一瞬戸惑ったが、満更でもないデスサイズHがツイン

ビームサイズを振りかざしてきたのを避けた。

「うむ……少々厄介だな」

シャギアはここにきて初めて険しい顔をする。

「兄さん！」

MA形態のアシユタロンがアトミックシザーズでデスサイズHに捕縛しようとするが、

「させない！」

サンドロック改がサブマシンガンのアシユタロンに連射し、アシユタロンの足を止めた。

「く、こいつ！」

アシユタロンはやむなく変形解除して方向転換し、ビーム砲を撃つ。

「ッー！」

サンドロック改はシールドガードし、ビームを防いだ。

「調子に乗るな！」

オルバがそう叫ぶと、アシユタロンは更にビーム砲を撃ち、サンドロック改を牽制する。

サンドロック改はかささずミサイルを撃つ。アシユタロンはビー

ム砲でミサイルを両発とも破壊する。

（射撃では勝ち目がない……）

カトルがそう心中で呟くと、次の行動に移った。

「はぁあッ！」

サンドロック改は多少の被弾を覚悟で一氣に間合いを詰め、ヒートショーターを振りかぶる。

「くー！」

アシユタロンは構わずビーム砲を撃ち続ける。サンドロック改は案の定、数発被弾してしまうが突撃のスピードを緩めなかった。サンドロック改の装甲は若干剥がれていたが。

「はぁあッ！」

サンドロック改は両手のヒートショーターをアシユタロンに振りかざす。アシユタロンは必死に回避するが、自慢のアトミックシザースが片方斬り落とされてしまった。

「く、よくも！」

オルバが歯を食いしばりながらも片方のアトミックシザースをサンドロック改に飛ばした。

「あー！」

至近距離だったのでサンドロック改はアトミックシザースを避けられず、運悪く左のマニピュレーターが破壊されてしまい、ヒートショーターを持てなくなってしまった。

「……中々やる……」

「中々やりますね……」

オルバとカトルは自機の損傷ように険しい顔をする。

薫のエアマスターBと東方不敗のマスターとの激戦が続いている。マスターはエアマスターBに射撃戦で押されていたため、増援に詳しい程の数のデスアーミーを呼んでいた。デスアーミーはエアマスターBに群がる。

「ッッ！ 鬱陶しい！」

エアマスターBは両手のライフルを撒くが、一向に数が減らない。

「こうなったら、こっちだって！」

薫は機内の呼び出しボタンを押した。

「ヒイロ！」

「……破壊する」

ヒイロのウイングゼロがデスアーミーの大群に対し、ツインバス

ターライフルを両手に持った。
黄色い極太のビームが銃口から発射される。大量のデスアーミーを焼き払った。

「……状況は苦しそうだな」

「ああ。来てくれて助かったよ」

「……ん、あの敵、この間も……？」

STAGE5にて、薫がヒイロを呼んだ時もマスターガンダムが敵だった。薫が答える。

「あのおっさんこそ、キーパーソンであろう東方不敗だ」

「……一体何が目的だ？」

ヒイロが誰ともなく疑問を投げかけたのを、薫が答える。

「ん、なんか地球がゴミで溢れてるのは人類のせいだとかで人類を抹殺s」

「違ーーーう！ー！ー！」

薫の説明をぶった切り、渾身のツツコミを入れる東方不敗。

「誰がそう言った！」

「え、あんたが言いたいのでそーゆーことじゃないの？」

「違う！ 何にもわかつちゃおらん！」

「わかるかってんだ、べー」

薫は舌を出した。

「……ふん、せいぜい強がるがよい！ ダークネスフィンガー！」

マスターは右手を翳し、紫色のオーラを纏いながらエアマスターBに突進。

「そんなもの！」

エアマスターBはライフルを撃つが、マスターにダメージはなかった。

「何だと！？」

エアマスターBは慌ててバックブーストするも、マスターに胸部を捕らえられた。

「はーっはっはっはっは！ 未熟千万！ こんなものか貴様の腕は！？」

東方不敗が高らかに笑う。

「……く、ならば！」

薫は、機内にある黄色いボタンを押した。

「デュオ！ 頼む！」

「OK！」

コンソールにはこう表示された。

『Gクロスオーバー！ ピースミリオン かつて戦争があった』
ステージにマーカーが出るが、サテライトキャノンの弾道がうようよ動いていて不明瞭だった。

「なんだ？ どこに落ちてくるんだ？」

東方不敗が上空を眺めながら訝る。そこに、

「スキあり！」

エアマスターBは何か自由だったレフトアームでライフルを持ち、マスターに零距离射撃を仕掛けた。

「ぬう！」

東方不敗がそれに気付いたのか、エアマスターBの捕縛を解いてひらりとかわし、宙に舞っている。

「逃がすか！」

エアマスターBはすかさずノーズビームキャノンで対空砲火する。

「ぬお！？」

ビームはマスターの左足を掠り、膝下が持って行かれた。その隙

を突いてか、偶然のタイミングか、サテライトキャノンの弾道がようやく決まり、発射された。何本もの白い火線が地表を降り注ぐ。そのうちの数本はマスターの頭部とライトアームを焼き払った。

「ぐう、再生が追い付かん！」

マスターは何本もの光の筋に紛れてどこかへ消えてしまった。

「……マスターガンダムは？」

薫がキョロキョロさせながら訊う。

「奴の反応が消えた。おそらく、撤退した」

デスアーミーの殲滅を終えたウイングゼロがエアマスターBに近づき、ヒロが薫に答える。

「取り逃がしちまったか……ま、とりあえずはこちらのお望み通り退場してもらったってことで」

薫がそう言うと、エアマスターBはファイターモードに変形し、その場で静止した。

「ヒロ、乗ってくれよ」

「……」

ウイングゼロはおもむろにエアマスターBの上に乗っかる。

「じゃ、あいつらの援護といきますか！」

ウイングゼロに乗せたエアマスターBはデスサイズHやサンドロツク改のもとへ向かった。

一方。

「ならばこれでどうだ？」

ヴァサーゴは、アクティブクロークの対ビームコーティングを頼りに正面から突撃してくるデスサイズHにメガソニック砲を撃った。

「ぐうッ！ こいつア！」

デスサイズHのアクティブクロークに直撃したメガソニック砲は、照射を続け、遂にはクロークの対ビームコーティングを剥がした。照射終了後、クロークの装甲から小さな爆発がおこる。

「ぐうあッ！」

デスサイズHは後ろによろけた。

「もらった！」

「させるか！」

ヴァサーゴが追撃にビーム砲を撃つが、デスサイズHは悪あがきにバスターシールドを飛ばした。ビームとシールドがかちあい、爆発した。

「ぐううおッ！」

「ツツツ！」

デスサイズH、ヴァサーゴともに爆風で後ずさりする。そこに、

「終わりだ」

という無機質な声とともに、建物の影からウイングゼロが出てきた。

「あれ、ありやヒロじゃないのか？」

とデュオが言ってる間にウイングゼロはヴァサーゴにバスターライフルを撃っていた。

「ぐう！」

ヴァサーゴは必死に避けるが、バスターライフルのビームはヴァサーゴの羽根を焼いた。

「……デュオ、お前もいたのか？」

「お前こそ、探したぜ」

「あれ、あんたら知り合い？」

ヒロとデュオのやり取りに横槍を入れる薫。

「く、多勢に無勢だ。オルバよ、撤退するぞ」

「兄さん、まだ戦える！」

「ここは我々が死ぬステージではない。愛馬の羽根もこの通りだ」

片翼のヴァサーゴがアシュタロンに寄る。

「わかったよ、兄さん」

アシュタロンはM A形態に変形し、ヴァサーゴを乗せたまま、どこも無く消えた。

「あッ！ 行っちゃった……」

薫は2機を追おうとしたが、突然消えたので捉えられなかった。

「あ、ヒイロ。君も来ていたんだね」

「カトル」

ヒイロがカトルの方に向き直りながら答えた。

ヒイロは、直ったというゼロシステムで元凶を探った。

「東方不敗。ゼロは奴がこの異様な雰囲気を漂わせているものを牛耳っていると言っている」

ヒイロが3人に対して説明した。

「まさかゼロシステムがこんなところで役に立つなんてな」

デュオが自嘲気味に言う。そして、更にヒイロに訊う。

「んで、その異様な雰囲気を漂わせているものってのは何なんだ？」

「……それはわからない」

そう答えたヒイロだったが、それに薫が割り込む。

「多分それ、デビルガンダムだと思う」

「デビルガンダム？」

デュオが訝る。ヒイロやカトルも同じような顔をしていた。

「東方不敗のおっさんがこう言ってたんだ。デビルガンダムは時空や次元を越えて支配できる、と」

「……つまりは、どういうことですか？」

カトルが顔を若干近づけながら薫に訊う。

「東方不敗の元々いた世界、君達が元々いた世界、そして俺が元々いた世界はそれぞれ別みただけで、デビルガンダムはそんな隔たりのへったくれもなく支配し、人類を抹殺しようとしているらしい」

「そんなことが……」

「なんて奴だ……」

「……野放しにできないな」

カトル、デュオ、ヒイロの順に答えた。

「……また有益な情報があつたら連絡するから、今日のところはお開きってことで。んじゃ、またな！」

「おう！ またな！」

「またの機会で！」

デュオとカトルが薫の朗らかな様子につられて明るく見送る。

「……カオル、死ぬなよ」

「ッ、ヒイロこそ」

薫はニヒルに笑い、エアマスターBは既に開いていた時空トンネルに入っていた。

STAGE 15 : STAND UP TO THE VICTORY

：ナタクで時空トンネルっぽいなんかを駆ける。
とりあえずガトーさんがカッコよかった、以上。
さて、出口が見えてきた。いい加減疲れてきたなあ。

着くと、中央が窪んだ土地の中に建物があった。自機を見てみると、

『トールギス』

とあった。トレーズの乗ってたトールギスね。すると、味方機がやってきた。

「味方の人ですか？ 僕はシーブックです。よろしく」

ガンダムF91が右手にビームライフルを、左はビームランチャーを担いでいた。

「ああ、あたしは麗。よろしく」

私がそう挨拶した矢先に、3機のVガンダムが降り立った。

「さ……3機!？」

一瞬怖じけづくが、いちいち怖じけづいてはいられない。そう自分に暗示をかけて、ドーバーガンを右手に持たせ、照準をVガンダムに合わせ、撃った。

「ぐうッ」

ドーバーガンの反動は大きく、その振動がコクピットにも若干ながらも響いた。

「流石はトールギス……乗り手を選ぶ機体ね」

早くもトールギスの性能に度肝を抜かれたが、すかさず攻撃を続けるべくバーニアに火を入れた。

「ッ、殺人的な加速だ！」

原作の台詞を拝借しながら、トールギスが襲うGに耐えた。

「そこね！」

再びドーバーガンを撃ち、Vガンダムを撃破した。

「シーブックは大丈夫かな？」

自分のことで精一杯だった私は、味方であるシーブックに気をかけることを忘れていた。でも、今回は多勢に無勢。余裕がなさそうだ。

- シーブックは2機のVガンダムに張り付かれていた。

「ええいッ！」

F91は両手に持ったサーベルを風車のように回しながら突進し、2機の敵を同時に牽制した。

「それっ」

よろけた左側のVガンダムに、爆弾を仕込んだビームシールドを、ハンドグレネードの要領で投げ付けた。Vガンダムは更によるめき、すかさずそこに左腰に付いたヴェスバーを向け、ビームを放った。ビームは確実にVガンダムを貫き、爆散した。

「こいつは……強すぎる……」

すぐにもう片方のVガンダムに向き直り、ビームランチャーで牽制した。

「あとどのくらいだ？」

淡々と射撃戦を展開しながら、誰ともなく果てを問うた。

麗は増援に来たVガンダムを相手にしていた。

「ッ、なんとかならないの、このGは！」

加速するたびに体を強く押さえ付けられる感覚に見舞われ、トルギスにいちやもんをつける麗。

「そこ！」

ドーバーガン構えてVガンダムに照準を合わせ、トリガーを引こうとしたその時、ビームが左足を掠めた。

「えっ!？」

麗の動揺と共に照準が外れる。また更に増援に来たVガンダムに援護射撃されたのだ。

「2対1なんてッ……!」

麗はこの状況に苛立ち、援護射撃したVガンダムにドーバーガンを連射しながら、熾烈なまでの突撃をする。

「まずは邪魔をしたアンタからよ!」

戦略上、敵の邪魔をすることは常套手段であるが、された側はやはり苛つくものなのだろうか。

対するVガンダムは、麗の苛立ちなど知らんぷりと言わんばかりに軽やかにステップを踏んでいる。

「ッ、うざったいわね!」

イライラ度が更に増した麗のトールギスは抜刀し、Vガンダムに斬りかかった。

Vガンダムは特に気にした素振りもなく、突撃してくるトールギスに、そのままボトムリムを射出した。

「こんなもの!」

トールギスはくるっと回避し、再びサーベルを振りかぶる。Vガンダムも、手首の装甲を展開し、サーベルを取り出した。そのサーベルでトールギスの斬撃を受け止めた。

「……やるじゃない」

：ダテにうざったいだけではなかった。上半身のみとなったVガンダム、いや、トップファイターでもきちんとトールギスのサーベルを受け止めている。これほど骨があるとは、一瞬でも油断すれば負けそうだ。

「ッ、こんなところで！」

負けてられない。これが元の世界に戻るための方法であるとは断定できないが、何もしなければどうも戻れそうにはないから。

「しいずめー！ー！ー！ー！」

鏢ぜり合うサーベルを力任せに押し返す。トールギスに無理をさせてしまっているが、確実にこちらが勝っている。しかしそこに、右からアラートが鳴る。敵僚機の射撃だろうか。

「ええい、早く墜ちろ！」

鏢ぜり合いの最中に、無理矢理サマーソルトをお見舞いしてVガンダムを蹴り上げた。Vガンダムが蹴り上げられて最高頂点に達したところに、ドーバーガンを撃ち込み、やっとな撃破した。

「次ね！」

アラートはまだ鳴ったまま。トップリムが飛んできているのが見えたので、シールドを構えて防弾した。

トールギスのバーニアに直ぐさま火が入る。

「このトールギスについてこれる？」

- 『殺人的な加速』とドーバーガンの断続的な牽制を以ってしてVガンダムを翻弄するトルギス。Vガンダムは回避するのに精一杯のように見える。

「そこだあ！」

ドーバーガンを構え、Vガンダムに照射した。Vガンダムは一瞬にして花火になった。

「……はあ」

スピード感のある戦闘して熱くなった麗は肩を撫で下ろすのだった。

一方のシーブックは相変わらず淡々と牽制しながら時にアクセントを入れるという戦法をとっていた。

ビームランチャーを撃つてはビームライフルを撃ち、アクセントとしてヴェスバーを撃っていたが、ほとんど回避され、最後のヴェスバーもシールドで防がれた。

「……敵もなかなかしぶといな」

目をしかめながらキュツと口を閉めるシーブック。すると、ロツクしていた敵が横からきたビームに撃ち抜かれ、爆散したのを確認した。

「ごめんね　シーブック」

おいしいところを持って行ってしまった麗は、軽やかな調子でシーブックに謝った。

（フレンドリーなんだか、軽いんだか……）

冷汗をかくシーブックだった。

そんな何気ないやりとりの最中、サザビーとターンX、リボーンズガンダムが降り立った。

「また来たわね、シャア・アズナブル！」

「貴様に呼び捨てにされる筋合いはない！」

サザビーは突撃してくるトールギスを迎え撃つようにトマホークをシールドから抜く。

「彼女、行き過ぎなんじゃないのか？」

シーブックはそう呟くが、淡々とライフルとランチャーを撃った。

「貴様、何故私の邪魔をする！？」

サザビーのトマホークとトールギスのサーベルが鏝ぜり合っている最中、麗に問う。

「理屈はない。でも、デビルガンダムの思惑通りにはさせないわ！」

「ん、何故貴様がデビルガンダムの存在を知っている？」

片眉を上げるシャア。

「……成り行きよ！」

麗はテキトーに思い付いた言葉を吐き出した。

「ふむ、内通者がいたのか？」

シャアは誰ともなく問うた。

「何はともあれ、邪魔をする者には死んでもらう！」

サザビーは鐳ぜり合う力を強め、トールギス にトマホークをじりじりと近付ける。

「ぐうッ……！」

今回は特殊な兵器があつたため敵の意憑を突けたが、トールギス には癖のある兵器は一切ない。

「トールギスをナメるなあ……！」

麗の怒号と共にトールギス のバーニアに文字通り火が付き、サザビーを地面に押しやった。

「ぐッ、着地してしまったか……！」

サザビーは、上から押しやってくるトールギスのブーストプレスに耐えている。

「ええい、ファンネル！」

バックパックからファンネルを2、3基射出し、トールギスを狙った。トールギスは仕方なく、しかしサザビーに一旦体重を預けてから、バチツという音と共にその場を離れた。ファンネルは依然トールギスを誘導していた。

「しつこいわね！ しつこい男はモテないわよ！」

「……ふっ」

シャアはそんな麗の言葉などお構いなしに、ビームショットライフルを、ファンネルに意識が集中しているトールギスに向ける。

「ええい！」

手に持ったままのサーベルでファンネルを破壊し、ショットライフルから放たれたビームをかわした。

「当たると思つて？」

「ふ、そう来なくてはな」

シャアは麗との戦いを楽しんでいるように見えた。

一方のシーブックは、2対1を強いられていたものの、善戦はし

ていた。

「このおッ!」

サーベルを抜刀し、ターンXに斬りかかる。

「こいつはどうか?」

ギンガナムがそう言うと、ターンXは体を分裂させ、オールレンジ攻撃を仕掛けた。

「ッ!? これは……?」

流石のシーブックも戸惑うが、オールレンジ攻撃をつまくあしらった。

そこに、F91に砲撃が襲った。

「敵僚機!?!」

ビームシールドを張り、リボーンズガンダムのビームを防いだ。

「君は下がっていていい。そう言った筈だ、ギム・ギンガナム」

「なんだとおッ!?!」

どうやら仲間同士で喧嘩しているみたいだ。

「人間風情が僕と並んで戦ってほしくない」

「小僧があまり調子に乗るなよ?」

ターンXはリボーンズガンダムにメンチを切るように近付いた。

(……なんだ？ あの結束力のなさは……)

彼らの敵であるシーブックも呆れた。痺れを切らしたシーブックはリボーンズガンダムにヴェスバーを撃った。リボーンズガンダムはヴェスバーのビームに気付き、ひらりと回避した。

「狙いは僕みたいだね」

リボーンズは人を嘲るような口調でF91に向き変わる。

「僕はイノベイター。君に敵う相手ではない」

不敵に笑うリボーンズは、自機を変形させた。シーブック曰く、その変形ぶりは、

「姿を変えた……？」

砲撃武装が目立つ赤い機体になったのだ。

「リボーンズキャノン」

得意げに言うリボーンズは文字通り天狗だった。

トールギス とサザビーの戦いに果てが見えたのはこの時だった。

「ちい、素早い……！」

トールギス の運動性に苦虫を潰したような顔をするシャア。

「ファンネルも追い付かん！」

ファンネルもトールギス をも誘導するスピードは持ち合わせていなかったようだった。サザビーは仕方なくライフルで牽制するが、一向に当たらない。

（おのれ……こんなところで朽ち果てるわけにはいかんのだよ！）

と呟いたのが安直だった。

「そこね！」

トールギス はドーバーガンを照射した。

「しまった！」

サザビーはシャアの反応速度を以ってして胸部の命中は避けられたが、右手は持っていたライフルごと焼き払われてしまった。

「ちい、これ以上は無駄か……やむを得ん！」

損傷は大したことがなくても、マニピュレーターを破壊されてしまったては、まともに兵器を扱うこともできなくなってしまう。極端な話、人差し指のみを失っても、ライフルを使う機体であれば射撃能力は一気に落ちることになる。

（……追いかけていけど、今回は頭数的には不利だったから……）

麗は冷静になってシーブックの援護に向かった。

シーブックの乗るF91は、曲がりなりにも結束力を増した凸凹コンビのフォーメーションに苦戦していた。リボーンズキャノンが牽制し、ターンXが足部メガ粒子砲を飛ばす、などというような攻撃をF91に仕掛けていた。

（まずい、これ以上は……！）

歯を食いしばるシーブック。やっとのことでターンXのメガ粒子砲を避けたところに、

「そこだね」

リボーンズの人の神経を逆撫するような声と共にリボーンズキャノンがキャノンを構えた。

「しまった、読まれていた!？」

シーブックが焦躁に駆られる。

しかしその焦躁は無駄に終わった。

「ちい！」

リボーンズキャノンは砲撃をやめ、さっと回避した。さっきまでいたところに、黄色いビームが横切った。

「シーブック！ お待たせ！」

麗の声がF91のコクピット内に響く。

「レイ、無事だったんだな」

「ガンダムに勝てる、このトールギスなら！」

「……随分な自信だな……頼もしいけど」

冷汗をかくシーブック。

「ほう、面白い。そんな機体で僕のガンダムに勝てるっても？」

リボーンズキャノンは再度変形し、リボーンズガンダムに戻った。

「リボーンズガンダム！ この下等な人間風情に天罰を与えよ！」

リボーンズは脳量子派を使いながら壮大なことを言うが、

「自分の機体に自分の名前付けるとか、頭どうかしてるんじゃないの？」

対する麗は非常に冷めていた。トールギスは淡々とドーバーガンでリボーンズガンダムを牽制した。

「何とも言う方がいいさ。力を持つ者の言うことこそが絶対なのだから」

リボーンズガンダムの装甲が赤く発光しはじめた。

「その力を持つ者こそが、この僕、神なのだ！」

ライフルから放たれたビームが物凄い出力でトールギス に向かう。

「いくら火力のある兵器でも、当たらなければどうということはない！」

トールギス は持ち前の運動性を以ってしてビームをあっさりかわす。

「ファング！」

リボーンズガンダムは誘導兵器を射出し、トールギス を牽制した。

「鬱陶しいわね！ キラ、お願い！」

麗は呼び出しボタンを押し、フリーダムを呼んだ……筈が、ストライクフリーダムが出てきた。

「レイ、援護するよ」

ストライクフリーダムはドラグーンを射出し、ファングを狙った。

（ストフリっていうのはびっくりだけど、目には目を、歯には歯を、誘導兵器には誘導兵器を、ていうのもアリよね）

麗はそれ以上の思考をやめ、リボーンズガンダムに集中した。

「僕たち以外にもファングを使える機体があったとはね」「ファングじゃなくてドラグーンですう」

麗はリボンを馬鹿にするような口調で食ってかかった。

「……ご丁寧に訂正どうも。お礼はたっぷり返すよ!」

リボーンズガンダムは左手にサーベルを持ち、トールギスに斬りかかる。トールギスは敢えて抜刀せず、ドーバーガンで牽制を続けた。

「……ふ、そんな戦い方で!」

横回転しながらドーバーガンを避け、トールギスに肉薄しようとするが、太陽炉非搭載のトールギスの運動性も侮れず、なかなか追いつけずにいた。

「く、この僕がッ……こんな奴ごときに……!」

ガンダムですらない機体にスピードで翻弄される屈辱感は、リボonzにとって甚大だった。

シーブックは1対1となって大分戦い易くなっていた。そしてF91は今、

『MEPE (MEtal Peel-off Effect)』
を発動しており、ターンXを翻弄していた。

「何だ!? 全く当たらんぞ!」

F91の残す『質量を持った残像』に完全に弄ばれていたギンガナム。

（古代の機体を甘く見ていたようだ……あんな小さな機体であればどの性能を有しているとは……）

ギンガナムはいつになく神妙な顔をするが、そうしたところで状況がよくなることはなかった。寧ろ、

「ぐツ、何だと!？」

ヴェスバー脚部を破壊され、地面に立てなくなった。

「ちい……悔しいがここは撤退する!」

ターンXはステージ外に消えた。

「よし……敵は行ったな」

ふう、と溜息をつくシーブックだった。

一方の麗は、トールギスのエネルギーが底をつきかけているのを杞憂した。

（まずいわ、そろそろ勝負を賭けないと……!）

直線的な攻撃しかできないこの機体で、正攻法を仕掛けるには時間が必要だ。ならば、と出たのがこの作戦だった。

トールギスはドーバーガンを投げ捨て、サーベルを構えた。そ

の直後、今までにない加速でリボーンズガンダムに正面から突っ込んだ。

「ん、特攻か？」

リボーンズはトールギスの突撃に訝る。

「血迷ったようだね」

リボーンズガンダムはサーベルをトールギスに振りかざした。

（これで突撃は止まる筈だ。そこに……）

と考えていると、トールギスから小さい球状の物体が射出されたのを確認した。

（……なんだあれは……ッ、まさか、脱出ポッド！？）

リボーンズガンダムを停止させようとするがすでに遅し、慣性で突撃を続けるトールギスのサーベルに胸部を貫かれ、太陽炉に異常をきたした。

「ちい、野蛮な真似を！」

リボーンズガンダムはいつまでも刺し続けるトールギスを払い落とし、使い物にならなくなった右側の擬似太陽炉をもパージした。装甲も通常色に戻った。

リボーンズガンダムは、自分がうち捨てたトールギスを残して撤退した。

「今日のところはお預けだ」

リボンスはそう吐き捨て、リボーンズガンダムはよろめきながら離脱した。そこで、ターンXと合流した。

「随分ひどいやられようじゃないか、小僧」

「黙れ」

機嫌が悪いリボンスはギンガナムのからかいに大人げなく吐き捨てたのだった。

「ごめんね、シーブック。2対1にさせちゃって」

「……まあいいさ。結果論だけど、こうしてお互い無事だし」

「あたしの機体は蛻の殻だけだね」

麗が振り返った先に横たわっていたトールギスは、まだサーベルを持ったままだったが、刃はもう出ていなかった。

「これからどうするんだ？」

「まあ……元の世界に帰れるまでは戦わなくちゃなあ……」

麗は途方に暮れたような声で答える。

「そうか。お互い、頑張ろう」

「うん！」

シーブックは麗と握手を交わすと、自機に戻り、ステージ外に飛び立った。

「あたしも行かなくちゃ」

うち捨てられたツールギスを後にして時空トンネルに向かったのだった。

STAGE 16：虚空の戦場

±薫Side±

エアマスターBでトンネルを駆ける。この作品、ワンパターンでダメなんていう評をもらったのは気にしない方向で。だって、しょうがないやん。

なんていう下らない愚痴は置いて。いつものようにトンネルから出ると、エアマスターBとはお別れして、今度は、

『ベルティゴ』

という機体になっていた。武装を見てみると、

「……ビット？　なんだこれ」

詳しく見てみると、どうやらビームを発射する、自走兵器らしい。要するに、プルが使っていたアレみたいなやつだろうか。

「……メンド臭そうだな……」

軽くぼやいたところに、いつも通り味方がやってきた。

「やつほ。私はアレンビー。よろしくね！」

その機体は、ガンダムが髪を生やして、セーラー服を着ているというなんともやつつけなデザインをしたガンダムだった。このデザインをした人間の趣味を疑いたくなるのもそうだが、そもそもこれ、ガンダムなのか？

そんなことを思いつつ、礼儀を果たす。

「俺は薫。こちらこそよろしく」

すると、モニターにアレンビーとやらの映像が出てきた。うむ、なるほど、ガンダムデザインの負けなにかわいい子だ。しかも、服装が妙にタイティーじゃないか？

「それにしても、ドモンどこに行つたのかな？」

「ドモン……君、ドモンを捜してるの？」

「ドモンを知ってるの!？」

オーバーリアクションで答えるアレンビー。ん、てことはこの子、Gガンダムの子か？ ううむ、知らんな。

「さっき会つたけど」

「呼んでよ!」

「いや、そんなこと言われても……」

咄嗟にこんな言葉が出てきたが、呼び出しボタンで呼び出せるのを思い出した。

しかし、思い止まる。ドモンを呼べば、もしかしたら、この子と話す機会が減るのではないか。ドモン&アレンビーの独占になってしまわないだろうか。

結局、前言撤回の必要性がないという結論が出たのだった。

「そっかぁ……」

シユンと肩を竦めるアレンビー。なんとかしてあげたいという気持ちしが本能的に沸き上がるが、しかしできない。こんな狂おしい気持ち、初めてじゃないだろうか。こんな時、自分が完全に悪役になっているのに気付く。自己嫌悪で自分を嘲笑したくなる。

嘲笑する間もなく、赤い色のMSが2機降り立った。

「来たわねえ。さあ、行くわよ！」

屈託なく先頭をきる彼女を見ると余計に後ろめたくなる。

「……んああ」

自然と歯切れの悪い返事しか出せなかった。ベルティゴを発進させ、手に持ったライフルで赤いガンダムを牽制した。しかし、この赤いガンダムは、見覚えがある気がするが、違う気がした。

「ふん、あの機体、フラッシュシステム搭載機か」

「兄さん、あの機体も撃つべきだね」

どこかで聞いたような声達が聞こえた。

「このヴァサーゴチェストブレイクと」

「このアシュタロンハーミットクラブなら」

「「やれる！」」

随分息が合ってることだ。こいつら、前回の死に損ないか。ここらへんで決着をつけてやろうか。

「いいだろう、こちらも頭数を揃えるぞ！」

呼び出しボタンを押す。

「シン！ 来てくれ！」

「久しぶりだな、カオル」

大剣を構えたデステイニーが登場し、着地した。

「あの2機を叩く！」

「よし、俺に続け！」

シンがそう言うと、デステイニーは残像を残しながら先行する。
派手だねえ、相変わらず。

「む、残像！？」

「慌てるな、オルバよ」

シャギアがそう言い、ヴァサーゴCBは腕を鞭のように振るった。

「うわっ！？」

ヴァサーゴCBの鞭に引っ掛かり、ペシペシビンタされるデステイニー。地面に叩きつけられる。

「くそっ、コイツう！」

歯を食いしばり、眉間に皺を寄せるシン。

「あんな熱くなんなよ」

「何だと!？」

ありやりや、怒らせちゃったか。

そんな応酬はさておき、デステイニーは再突撃する。俺のベルテイゴもビットをちりばめ、2機を牽制した。

「く、鬱陶しい!」

しめしめ、アシュタロンHCがビットに手こずっている様子だ。

「がら空きだ!」

一気に接近し、サーベルを抜刀する。

「いい気になるな!」

アシュタロンHCがビットの雨をくぐり抜け、サーベルで応戦してきた。

「そう簡単にはいかねえか」

ベルテイゴとアシュタロンHCのサーベルが鏝ぜり合う。ビットが自機に戻ってきた。アシュタロンHCのパイロットが問うてきた。

「何故僕たちの邪魔をする、薰!」

「死にたくないから、戦ってるだけさ！」

「なら、僕たちの同志になれ！ それならば、死なずに済む！」

「ふざけるな！ なんでテメーらなんかと！」

「僕はその理由を聞いているんだ！」

ふと、考えさせられてしまった。戦う理由について。アレンビーのことがあってか、少々ナイーブになっていた俺には、十分に悩ませる要因だった。

「どうなんだ、薫！」

たしかに、単に死にたくないなら、敵に身を売ったっていい。そうすれば、倒すべき奴も、倒してくる奴もいなくなる。

だが……

「オメーらの掲げる理想が過激なんだな。ついていく気になれないんだよ！」

ベルティゴは力任せにサーベルを押し返し、間合いをとった。

「ふん、強がるな！」

アシュタロンHCは、腰から甲殻類のハサミのようなものが出てきて、ベルティゴを掴もうとする。

「人間なのか蟹さんなのか、どっちかはっきりしろよ！」

適当に思い付いた捨て台詞を吐き、回避する。回避後、ライフルでアシユタロンHCを牽制する。

「くう、しぶとい……」

ハサミを手元に戻し、ハサミからビーム砲を撃ってきた。

†シンSide†

シンのデステイニーは、ヴァサーゴCBとの激しい一対^{サシ}一を繰り広げている。

「コイツう！」

「ふ、熱くなりすぎだな」

「煩い！」

デステイニーのアロンドイトとヴァサーゴCBのサーベルが鏝^こぜり合い、ピンクと黄色の光の飛沫が飛散する。

「このッ、これでも喰らえ！」

アロンドイトを両手で持っていたのを、左手を離すデステイニー。これは危険な行為だが、デステイニーは離れた左手でシャイニングフィンガーをヴァサーゴCBの顔面にお見舞いした。

「うお、なんだ!？」

ヴァサーゴCBの顔面部の装甲が溶解し、モニターがブレはじめ

る。

「ぬう、小賢しい！　ならばこちらも！」

ヴァサーゴC Bの方も、空いたアームを伸ばして、デステイニーの顔面を捕縛した。

「ぐう！」

デステイニーの顔面が掴まれた衝撃で一瞬怯むシン。互いの剣が一進一退といった具合に鏖ぜり合う。その最中、シャギアがシンに問う。

「貴様、ニュータイプか？」

「何だつて？」

「貴様はニュータイプかと聞いている」

「何だよニュータイプって。俺はコーディネーターだよ」

「……コーディネーター。人口ニュータイプのようなものか。どのみち、野放しにできんな」

「何わけわかないこと言ってるんだよ！」

「貴様にも、死んでもらう！」

「やなことだ！」

捕縛、鏢ぜり合い、双方の力が入る両機。

「そろそろ死んでもらおうか、少年！」

シャギアが叫ぶと、ヴァサーゴCBは胸の装甲を開き、二門のメガソニック砲が露出する。砲門がパワーを帯びてくる。

（零距离射撃！？　ならこっちも！）

シンは咄嗟に焦燥に駆られ、腰部の長射程ビーム砲をヴァサーゴCBに向ける。

「くらえー！ー！！！」

両者の主砲を撃つ。ビーム同士がぶつかり合い、激しい爆発が起こる。

「ぐううつ！」

「ぐああっ！」

二機共に吹っ飛ばされる。デステイニーは、吹っ飛ばされながらも実体盾とビームなシールドを二重に構えていたゆえ、装甲自体の損傷はヴァサーゴCBに比べて浅かった。ヴァサーゴCBの方は、開いた胸を咄嗟に閉じたものの、デステイニーよりも損傷が酷く、装甲が焼け爛れていた。その様子は、まるで地獄のマグマに落とされた悪魔だった。

が、本人は健在だった。

「やっってくれる……！」

悪魔のような笑みを零し、自機を起こすシャギア。

「いってえ……」

軽く頭を打ったのか、後頭部を押さえながらデステイニーを起こすシン。デステイニーは、まだ暴れ足りないと言わんばかりにギラんと敵を睨んでいるが、ヴァサーゴCBは、地獄の底から這い上がって来たばかりの鬼のような鋭い目つきで、デステイニーをしかと捉えていた。

「さて、私の愛馬がご立腹で且つ空腹だ。そろそろ腹拵えの時間とさせてもらおうか」

愛馬と呼ばれた鬼が地面を思いつきり蹴り、上空に舞った。まだ使えるメガソニック砲の砲門を開き、今度は拡散ビームを撃った。

「な、スプレータイプ!？」

デステイニーは咄嗟にシールドを構える。ビームの雨がシールドに降り注いだ。

「ぐう、埒があかねえ!」

デステイニーはシールドを翳したまま、自機の推力に頼り切ってヴァサーゴCBのもとに突っ込む。

「ふっ、来たか」

シャギアは不敵に笑い、鬼は胸と腹を閉じ、サーベルを再抜刀した。

「しめた！」

シンはメガソニック砲の雨が止んだのをいいことに、シールドを翳すのを止め、空いた左手で右肩のビームブーメラン、フラッシュエッジをヴァサーゴCBに投げ付けた。

「む、おのれッ」

シャギアが唸ると、ヴァサーゴCBは右に回避し、ブーメランはあさつての方向に飛んでゆく。

「小賢しい真似を！」

ヴァサーゴCBは再特攻し、デステイニーにサーベルを振りかぶる。しかし、

「うおッ!？」

フラッシュエッジは、ブーメランという名に恥じず、弧を描きながら主であるデステイニーに戻った。その過程で、あわよくばヴァサーゴCBの右腕を、マニピュレーターに持ったサーベルごと持っていたのであった。

「くう、このようなことが……！」

片腕のみになったヴァサーゴCBは、仕方ないと言わんばかりに後退しようとする。

「逃げるな！」

シンのデスティニーは逃げてゆく鬼を追いかけるが、うまくやり過ぎられ、逃がしてしまった。

「くっそう……」

逃げてゆく鬼を、デスティニーはアロンドイトを持ったまま恨めしそうだった。

「……カオルは大丈夫なのか？」

気持ちを切り替え、カオルのベルティゴの援護に向かった。

±薫Side±

ベルティゴとアシュタロンHCは互いのサーベルで鏝ぜり合っていた。

「さつさと観念しやがれ！」

「そうはいかない！」

熱血マンガ張りの台詞まわしを披露している二人だが、オルバは、兄の撤退を把握した。

「兄さんが!？」

アシュタロンHCはベルティゴを蹴った。

「うッ!？」

急に蹴られて前のめりになり、更にはベルティゴが不時着した衝撃でシートに頭を打ち付けてしまった。

「う……」

脳震盪で半分気を失いかけている薫は、アシュタロンHCをゆらゆらと見つめていた。

「……援軍か。やむを得ない」

オルバはデステイニーが迫っているのを把握し、ステージ外に撤退した。

「おい、おい！ 大丈夫かよ、おい！」

ベルティゴ機内に、デステイニーの接触通信が響く。

「……………はッ！？」

薫は文字通りはっと気がつき、目を擦る。モニターに映るシンは心配そうに薫を見ていた。

「……悪い、気絶してたみたいだ」

「……あんま心配かけんなよ」

シンはぶっきらぼうに薫に言ったのけた。

「君が俺を心配するなんて、予想もしてなかったわ」

「……ふん」

シンは更にぶっきらぼうになる。

「よっしゃ、アレンビーの援護に行くぞ」

ベルティゴを起こし、アレンビーの援護に向かおうとするが、行く手を阻む者がいた。

「行かせるものか」

その声と同時に、ビームが真正面から突っ込んできた。

「ッ!？」

ベルティゴは薫の反応でさつとビームを避ける。その真正面には、サザビーとリボーンズガンダムが立ちはだかっていた。

「貴様がカオルか。初にお目にかかる」

シャアが挨拶代わりと言わんばかりの口調で言っただけだ。

「挨拶はいいよ、シャア・アズナブル」

リボーンズがシャアを制止するように言った。

「……貴様にそのように言われると違和感があるな」

「どうしてだい？」

「腐れ縁の男の声とよく似ているからだ」

シャアがそうリボンスに答えたところ、シンが呟いた。

「あのデカブツのパイロット、議長の声に……？」

そこで、薫がシャウト。

「ええい、埒があかん！　いつまで話してんだおのれらは！」

ベルティゴはビットを多数出し、二機を牽制した。

「……ふ、遊びが過ぎたようだな」

サザビーはビットの雨を軽やかに避け、ベルティゴに突撃した。

「俺がコイツをやる！　シンはあのガンダムっぽい奴を頼む！」

「任せろ！」

ベルティゴとデステイニーが散開し、それぞれサザビーとリボンスガンダムに応戦した。

ベルティゴはビットを射出し、サザビーを牽制しようとしたが、サザビーもまたファンネルを射出し、撃ち合った。

「あんたの機体も同類ってことかい！」

「……ふん」

どや顔で鼻笑いするシャア。サザビーは、腹部の拡散メガ粒子砲を撃ってきた。

「ッ、ぶちまけて来るのか!？」

とりあえず左斜め後ろに避けてみるが、右足を掠めてしまった。サザビーは構わずベルティゴに肉薄し、黄色いビームを帯びたトマホークを振りかざして来た。

「させるかッ！」

ヒートアックスを取り出し、ビームトマホークを受け止めたベルティゴ。

「……ふん、そう簡単にはいかんか」

「さつきから鼻で笑いやがって！」

ビットが飛び出し、親機であるベルティゴの周りに停滞した。

「ちいい、まだファンネルがあつたとは……」

「ビットだし！」

何ていうくだらないやり取りをしていると、サザビーはバチッと鐙ぜり合いを解き、ファンネル斉射を避けた。

「なかなかしぶといな」

「しぶといくらいじゃねえとやってけねえっての」

ベルティゴがサザビーにライフルを向ける。すると、サザビーの背後から、赤いオーラが見えた。

「敵ハ才前カアアア！」

サザビーがふと振り向くと、バーサーカーモードになったノーベルガンダムが自機に飛び掛かって来ていた。

「えっ、ちょ……」

薰は口をあんぐりさせたまま、しばらく閉じなかった。

「ウウオオオオオオ！！！」

暴風雨のような百烈拳を披露するが、サザビーは丁寧に避けていた。

（あの子……だよな？）

あまりの豹変ように自分の記憶すら危うくなる。

（にしても、あんなに派手に動かれたんじゃあ援護射撃もできねえ……）

どうすればよいか茫然自失とした薰だった。

†シンSide†

デステイニーとリボーンズガンダムが、ライフルや補助兵器での牽制し合いが続き、事実上膠着状態だった。

「無駄な抵抗を。人間ごときが僕に歯向かうなどと」

「何だつて!？」

シンはリボーンズの言いように激昂する。

「人間は過去から何も学ばない。ただ過ちを繰り返すだけだ」

「な、何をッ!」

リボーンズは言葉を続ける。

「僕たちイノベーターがその負の連鎖をストップさせなくてはならないんだ」

「なんだよイノベーターって!」

デステイニーはフラッシュエッジを投げるがリボーンズガンダムはあっさりそれを避ける。

「世界は平和になる。僕たちイノベーターの統治の下でね」

デステイニーが先程投げたブーメランの戻りも見事避けてみせた。

「何が言いたいんだ、アンタは!」

ガチツと肩にブーメランをセットし直す。

「もし君が僕たちを倒せば平和になると言つのなら、それは間違いだ」

「何だつて……？」

シンがふと、デステイニーをも硬直させる。

「いただく！」

リボーンズはファングを射出し、デステイニーに迫った。はっと気付いたシンは、デステイニーを急上昇させるが、1、2個のファングが引っ掛かってしまった。それが爆発する。

「ぐうわうッ！」

デステイニーもよろけ、隙を晒してしまった。

「道を誤ったね」

リボーンズがすかさずとどめの一撃にライフルを撃つ。何とか避けてみたが、自慢の翼が片方焼かれ、落下した。

「直撃は免れたね。君も僕について来るといい。そうすれば死なないし、世界に平和も訪れる」

「ッ……」

意識が朦朧とする。本来敵である者の誘いが脳内にこだまする。

「さあ、どうだい？」

リボーンズが手を差し延べる。すると、そこに黄色いビームが横切った。

「ちいッ！」

振り向くと、援護に来たベルティゴがライフルを構えていた。第二射も用意していた。

「君も鬱陶しい奴だね、高嶺薫！」

「鬱陶しくない敵なんているかよ！」

開き直っている薫は、構わず第二射を放った。

「……残念ながら、ごもつとももだね」

今度はシールドで防ぐ。ベルティゴがリボーンズを睨んでいた。

「くそ……シンをよくも！」

ビットがベルティゴの腕部から飛び出し、リボーンズに張り付くうとしていた。

「……ふ、無駄なことを」

リボーンズもまたファングを展開し、ビットに応戦した。

「なんだよ、これ今流行ってんのかよ！」

語調を荒げる薫に合わせてベルティゴはサーベルを抜刀する。

「……今日はここまでだ」

リボンスは、背部のバインダーのビームキャノンを乱射し、ベルティゴを牽制した。

「くッ、かい潜れない！」

ベルティゴは避けるので精一杯のようで、中々リボンスに取り付けないでいた。

「リヴァイヴ」

リボンスはガデッサを呼んだ。

「あれをやるのか」

ガデッサはベルティゴに照準を合わせ、自慢のランチャーを撃った。

「ぐうあッ！」

ベルティゴは顔面から右肩にかけて焼き払われた。そのまま倒れこんだ。

「……どういってもりだい、シャア・アズナブル」

リボンスは、ノーベルガンダムを脇に抱えたサザビーに訝りながら問うた。

「この娘、強化人間だ。使いようによつては、いい戦力になる」

「まったく……人間の甘さが僕には理解できない」

呆れたリボンスは先に帰還し、サザビーは力無く倒れているベルティゴを一瞥した後、ステージ外に飛んだ。

「……はっ！」

ベルティゴ機内で目覚めた薫。隣には、傷だらけのデスティニーが何とか体を起こしていた。

「……大丈夫か、カオル」

「ああ……だが、精神はもうずたボロだ」

今回、薫にはいろいろありすぎた。アレンビーのこと、ビット操作のこと、負けたこと。悔しさと虚無感が同居し、茫然自失としていた。

「……カオル！ このままくじけてていいのかよ！」

「……シン？」

「俺はアイツらを絶対に討つ！ 今度こそ！」

シンはやる気を剥き出しにして薫を励まそうとしていた。

「……すまない、シン。俺、やるよ……！」

ぽかんとしていた顔から、希望の光を見た顔になり、ベルティゴを起こした薫。モニターが全く役に立たなかったので、補助カメラに切り換えた。

「じゃ、行こうぜ」

「ああ」

デステイニーに手を引かれ、ベルティゴも時空トンネルに急いだ。

大型モニター室。後ろに手を組みながらモニターを眺める東方不敗がいた。

「ふ、ざまあ見る、カオル」

嘲り笑う背後から、リボンスが歩み寄ってきた。

「エネルギー充填はまだかい」

「そう焦るな。デビルガンダム復活の時はそう遠くない」

不敵な笑みを漏らした東方不敗を余所に、リボンスは表情を変えていなかった。

「少し休むよ」

リボنزはモニター室を退室した。

（僕の道具として、せいぜい頑張ってもらうよ、東方不敗。そして、デビルガンダム）

陰謀に満ちた顔のまま、奥へ消えたリボنزだった。

STAGE17：それぞれの剣

士麗Side†

：トルギス？が破壊されてしまったので、生身でトンネルに入
った私。するとトンネルに入った瞬間に別の機体になっていた。コ
ンソールを見てみると、

『ZGMF-X09A ジャスティス』

とあった。いつだかジャスティスに乗りたいたと言った気がするが、
まさかcome trueするとは。

「やつふうー！」

バックパックのリフターに乗り、サブ・フライト・システムの要
領に変形させ、原作のような飛行っぷりを楽しんだ。

そんなこんなでトンネルを出た。すると、奥に見える大スクリー
ンにミリアがフラッシュバックに映し出され、コンサートステージ
を飾っていた。

「今はやってないんだ」

閑散としているステージは、コンサートの予感がしなかった。
すると、相方らしき機体がやってきた。

「……」

赤いガンダム、ヘビーアームズ改だった。トロワが中々挨拶して
くれないので、私から自己紹介する。

「わ、私、網走麗っていうの。よろしくね!」

「……」

……

「……名前などない。どうしても呼びたければトロワ」

彼独特の雰囲気のまま、やっと自己紹介してくれたトロワ。

「……」

「……」

……なんたる。話が切り出せないんだけど。
すると、インパルスとストライクが降りてきた。

「来たわね!」

「……後方援護は任せろ」

やっとトロワが喋ってくれた。ヘビーアームズ改なら安心してバツクアップを任せられる。

ジャスティスはファントウム00に乗り、インパルスに切り込んだ。

「オラオラア!」

ファントウム00の先端に付いた、二門のフォルティスビーム砲

を撃つ。インパルスは鮮やかに回避する。

「当たりなさいよッ！」

フロントウム00を左に旋回させ、両肩のビームブーメラン『バツセル』をインパルスに投げ付ける。インパルスは真上に逃げた。フロントウム00に乗ったままのジャスティスも共に上昇し、バツセルの軌道を確保した。

「お死になさいッ！」

ラケルタ・ビームサーベルの柄を連結させ、アンビデクストラス・ハルバードの形態にし、インパルスに急降下した。対するインパルスはライフルを構えるが、後ろからバツセルが戻ってくるのに気付き、ライフルで背後のバツセルを破壊しようとする。

「させないわよ！」

フォルティスビーム砲を撃ち、安易に背を向けたインパルスを牽制する。インパルスはどうしようもなくなってしまう、バツセルの軌道からずれるべく下降し、前からくるフォルティスのビームをシールドで防いだ。

「守ってばかりじゃあ！」

ジャスティスは構わず突撃。インパルスはライフルを向け、本体のジャスティス目掛けて発射する。

「甘いッ！」

するとジャステイスは、バク宙しながらファントウム00を蹴り、ファントウム00をそのままインパルスに突撃させた。ジャステイス自身は、バク宙して面積が小さくなったのをいいことに、ライフをすりぬけるようにして避けることができた。

一方のインパルスは、ファントウム00の突撃を正面から喰らい、地面に叩きつけられた。

「どんなもんだいッ！」

ジャステイスを着地させ、得意げな様子でインパルスを見た薫だった。

「……そちらも上手くいつているようだな」

トロワのヘビーアームズ改がジャステイスと背中合わせするよう
にやってきた。

「ええ、お蔭様でねッ！」

「……あと何機だ……？」

すると、増援にストライクがもう一機降りてきた。

「何なのよ!？」

「一人1.5機の割り当て……余裕だろう」

ヘビーアームズ改は少し前に出て、フルオープンアタックをお見舞いした。肩、胸、左手、両脚あらゆるところから火器が火を噴いた。増援にきたストライクも満足に避けられず、操り人形のように

被弾し、文字通り蜂の巣にされていた。

「……」

トロワは無言でヘビーアームズ改のバーニアを点火させ、頭部のバルカンと肩のマシンキャノンに火を噴かせた。

「これで終わらせる……！」

右手からアーミーナイフが飛び出し、よろけているストライクの頭部カメラをがち割り、アーミーナイフの竜巻乱舞をお見舞いした。増援に来たストライクを一瞬にして花火にしたのである。

「……さすがはトロワね……」

一瞬にして度肝を抜かれた麗だが、すぐにインパルスに向き直る。

「さあ、さっきの続きよ！」

起き上がったインパルスに対し、戻って来たファントム00に再び乗り、ルプス・ビームライフルで牽制する。インパルスは当然のごとき回避を見せた。

「ええい！」

またもバッセルを投げるジャスティスだが、インパルスは今度はバッセルを破壊しようとしていた。

「させるかッ！」

フロントウム00をインパルスに急旋回させ、アンビデクストラ・ハルバードを右手に突撃する。インパルスは構わずバツセルを破壊しようとするが、ジャステイスはインパルスめがけてサジトゥスで牽制。それでも構わずバツセルを破壊しようとするインパルスは、サジトゥスによってメインカメラが壊され、一瞬動きがぎこちなくなつた。

ジャステイスはすかさずアンビデクストラ・ハルバードですれ違い様にインパルスを胸部で真つ二つにした。ジャステイスがアンビデクストラ・ハルバードでポーズをとると同時に、インパルスが背後で爆散した。

「……ふう」

フロントウム00を背部にアタッチメントに戻し、ジャステイスをおもむろに着地させた。

「トロワは大丈夫かしら」

フロントウム00を水平にし、ヘビーアームズ改の援護に急ぐジャステイスだった。

そのヘビーアームズ改といえば、ソードパックに換装していたストライクが、ヘビーアームズ改に肉薄していた。ソードストライクを撒くのに精一杯に見えた。

「……あの機体、戦況によって武装を換装できるのか」

目をしかめさせるトロワ。しかし、対峙しているソードストライ

クの目の前に、黄緑色の火線が横切った。

「てえやッ！」

ジャステイスは一瞬止まった後、ファントウム00を射出した。ストライクを目掛けて飛んでいるファントウム00を、自慢の対艦刀シュベルト・ゲベールで破壊しようとするが、

「隠し味をお忘れなく」

ストライクと目と鼻の先の距離になった瞬間、ファントウム00の先端にあるフォルティスからビームが発射される。流石に避けられず、自慢のシュベルト・ゲベールと肩部の大型センサーが破壊されてしまった。

ストライクはやむなくエルストライカーに換装し、ファントウム00が戻ったジャステイスに向き直った。

「はあああッ！」

一回転バレルロールをしながらストライクに接近するジャステイスに、ストライクはバックブーストしながらビームライフルで牽制するが、

「こんなの！」

ジャステイスはシールドを構えて防弾したが、減速はしなかった。防弾に成功したところで、ジャステイスはライフルをリアスカートアーマーにマウントし、ビームサーベルを抜刀した。もちろん、アンビデクストラス・ハルバード形態に連結し、そのままストライクに突撃した。ストライクが尚もライフルで牽制しているのに焦れた

のか、ジャスティスはそのライフルに目掛けて右方のバツセルを投げた。意憑を突けたのか、見事にライフルを切断した。

「とどめだ!」

アンビデクストラス・ハルバードでコクピットを突き、ストライクの機能が停止した。

「ふう……」

額の汗を拭い、深呼吸をする麗。

「……命拾いした」

「えへへ……」

トロワがぼそぼそと麗に礼を言ったのだった。ジャスティスの前では、ストライクが力無く横たわっていた。

すると、ステージ外からサザビーとマスターガンダム、ガンダムエピオンがやってきた。

「エピオン……ゼクスか」

トロワがぼそつと呟く。

「赤ばっかりじゃない!」

叫んだ後、麗は呼び出しボタンを押した。

「ガロード！」

「いよおし！」

右手に大型マシンガンを、左手に大型シールドを持ったガンダムXディバイダーが降り立った。

「今日は敵が多いの。加勢してくれる？」

「おう、いいぜ！」

ガロードの歯切れのよい返事の後、ガンダムXディバイダーはシールドを前に翳し、地上を滑るように移動し始めた。

「あたしも続きます、てね！」

ジャステイスもガンダムXディバイダーの後を追うように三機に接近した。

「……引き続きバックアップをやらせてもらおう」

三者三様の役割が決まったところで、激突。

「ひゃー。どいつも強そうだなあ」

景気づけか何かだろうか、場にそぐわない高い声をあげた後、脇に侍るティファがばそばそと呟いた。

「あの人……力を持つてる……？」

ティファはサザビーを指していた。

「え……もしかしてあいつ、ニュータイプなのか？」

ティファはそのガロードの問いに口では答えなかったが、顔で、うん、と答えていた。

「……負けられないッ……！」

ガロードはいつになく真剣な顔になり、サザビーにマシンガンを放った。

「白いガンダム……どうやら私はこいつとは腐れ縁のようだ」

サザビーも背部にあるファンネルを四基射出し、ガンダムXディバイダーに向かわせた。

「ッ、やっぱりこいつビットを！」

しかしガロードは、幸いなことに、対フラッシュシステム（サイコミュ兵器）の戦いには慣れていた。

先に来たファンネルがこちらに攻撃しようと動きを止めたその刹那、

「見えたッ！」

ファンネルがビームを撃つよりも早くガンダムXディバイダーのマシンガンが仕留めてしまった。

「何ッ!? ファネルを撃ち落としただど!?」

ガロードの反応の早さと射撃の精密さに対し、明らかに驚きを隠せずにいたシャア。

「生憎、ビットには慣れてるんでね!」

ガンダムXディバイダーは次々にファネルを破壊し、そのマシンガン遂にはサザビーに向けた。

「ふむ、面白い少年だ」

バーニアに火を付け、ガンダムXディバイダーに接近するサザビー。

「君もニュータイプならば、私の同志になれ!」

「ティファは渡さない!」

イマイチ噛み合っていない会話が交わされる中、サザビーのビームショットライフルとガンダムXディバイダーのマシンガンとの弾が飛び交い、牽制し合っている。

一方、マスターガンダムと対峙した麗のジャスティスは、両者が対峙したまま硬直したままだった。

「ふむ、お主が麗か」

「何か悪い？」

「女子^{おなこ}か。甘えは捨てておるな？」

「聞くまでもないはずよ。ここにいます時点で」

今回のこの件の元凶であろう老師が駆るマスターガンダムを、先程よりも鋭い目つきで睨む麗。そろそろ決着を付けたいところだ、という意気込みすら滲み出していた。

「ならば、行くぞ！」

「望むところ！」

マスターガンダムは両手を後ろに、地を削らんばかりの勢いで猛進。ジャステイスはありったけのブーストを吹かし、アンビデクス・トラス・ハルバードを右手に突撃。

「そおれエ！」

マスターガンダムは上空に飛び上がってジャステイスと高度を合わせたところで、前腕部に装備されているマスタークロスを鞭のような妖しい軌道で振りかざして来た。

「そんなもの！」

ジャステイスはアンビデクス・トラス・ハルバードを前に構え、それを風車のように回した。風車は、鞭と化したマスタークロスを見事に弾いたのだった。

「ふむ、やりおるな」

マスタークロスを手元に戻した次は、マスタークロスを棒状に組み立て、ジャスティスに斬りかかった。

対するジャスティスは、風車を止め、アンビデクストラス・ハルバードとして連結していたサーベルを分離し、二刀流で迎え撃ち、マスタークロスを一本のサーベルで受け止めた。

「スキあり！」

残った左のサーベルでマスターガンダムに突き立てた。

「読めとるわ！」

マスターガンダムは右手に紫色のオーラを纏い、突き立てているサーベルに迎え撃つようにダークネスフィンガーで受け止め、二者は膠着した。

（サーベルを分離するのが早かったか……）

苦虫を潰したような顔をした麗だが、ファントウム00の先端に付いたフォルティスを撃つ準備をした。

「ううあッ！」

「！」

東方不敗も、ジャスティスの肩にあたる部分に並ぶ砲門が僅かに光ったのを確認したが、このままジャスティスを押し返すのは流石

に無謀だと感じ、バチツと鏝ぜり合いを解いた。両肩からのフォルティスがあさつての方向に飛んだ。

（避けられちゃったけど、手数ならこっちが有利よ！）

ジャスティスはバツセルを投げる。バツセルは高速回転しながらビームを帯び、ピンク色の妖しい軌道を描きながら、着地寸前のマスターガンダムを狩ろうとした。

「ええい！」

マスターガンダムは着地寸前にマスタークロスを鞭のように振り回し、バツセルを迎え撃つ。しかし、

「そこね！」

ジャスティスは、ビームライフルは両手に構え、フォルティスは正面に向け、三門のビームを斉射した。

「ふん！」

マスターガンダムは、ジャスティスの真似をするかのように鞭を風車のように回した。ビームは防がれ、バツセルも木っ端微塵になった。

「ふっふっ、皮肉よなあ。己の技で己の技を封じられるとは」

「じゃあ、これならどう!？」

得意げな東方不敗に劣らず、麗も負けじと次の攻撃の手を打った。

ジャステイスはライフルを両手に持ち、フォルティスも正面に向けた。一瞬のディレイの後三門のビームが、マスタークロスを回したままのマスターガンダム目掛けて照射された。

「ううおッ!？」

風車も流石に照射には敵わず、風車の隙間を筒抜けるように左肩アーマーをえぐられ、小破した。

「ぬう……」

モビル・トレース・システムを積んだコクピットの中左肩を押さえる東方不敗は、麗の駆るジャステイスに対し完全に劣勢に立たされていた。

トロワSide†

トロワの乗るヘビィアームズ改はエピオンに照準を合わせ、肩部ミサイルを数発撃った。

「……03か。受けて立とう」

エピオンは、左手のヒートロッドでミサイルを全て薙ぎ払い、その爆風の中からヘビィアームズ改に突撃した。

「……」

ヘビィアームズ改はレフトアームのビームガトリングで、高速で迫り来るエピオンを牽制するが、エピオンは華麗に回避し、ロッド

を振りかざした。

「ううあッ!」

ヘビーアームズ改は避け切れず、その場でよろけた。

「そんなものではないだろう、03!」

エピオンがビームソードを振りかざしたのを、ヘビーアームズ改は崩した体勢を立て直すべく、左足をしかと踏み締め、右手のアーミーナイフで受け止めた。

「ふん、そうこなくてはな。だがこれで終わりだ!」

エピオンは熱を帯びて赤くなっているヒートロッドを振りかざした。

ヘビーアームズ改は同時にヘッドバルカンでエピオンのメインカメラに火を吹いた。

エピオンのメインカメラが割れる鋭い音と、ヘビーアームズ改のライトアームが溶ける鈍い音が異様なハーモニーを奏でた。

エピオンの頭部には若干のスパークが走っており、ヘビーアームズ改の二の腕は赤くひしゃげていた。

「くッ……これではゼロシステムもまともに働かんか。……今日のところはこれまでだ、03」

「……」

エピオンは、双頭竜を思わせるようなMAに変形し、ロッドの尾を靡かせながらステージ外に飛んでいく。

†ガロードSide†

「君もニュータイプなら、私の同志になれ！」

シャアがガロードに呼び掛ける。サザビーがビームトマホークで斬りかかったので、ガンダムXディバイダーもやむなく抜刀し迎え撃った。両者が鏖ぜり合い、黄色いスパークがほとばしる。

「ニュータイプに執着する奴の仲間になんか、なってやるかってんだ！」

ガンダムXディバイダーはサザビーに蹴りを入れて間合いを一旦離し、サーベルから大型マシンガンに持ち替えてサザビーを牽制する。

「ちいいッ！」

さつと左に避け、シールド内部からミサイルを放った。

「そんなヘナチヨコ弾！」

ガンダムXディバイダーは、今度は、シールドを縦断するように内蔵されたハモニカ砲（19連装ビーム砲）を展開し、発射させた。横に並んだ十九本のビーム達がミサイルを打ち消し、一気に飛び掛かる。

「ふん！」

サザビーは真上に飛び上がり、ハモニカ砲を避けた。しかしそこに、斜めになったビームブレードが飛んできた。

「うおッ!？」

サザビーは咄嗟にシールドを構えて防弾するが、ビームブレードはシールドに食いついたまま消滅せず、サザビーはやむなくシールドを放棄し、ビームブレードにくわえられたシールドはあさっての方向に飛んでいった。

「なんという収束率のビームなんだ」

とシャアが呟く間もなく、

「へええや!」

ガンダムXディバイダーがサザビー一直線にサーベルを突き立てる。

「ちいいッ!」

ビームトマホークの甲の部分でサーベル突きをなんとか受け止め、光の火花が散る。そこに、ミサイルが数発飛んできた。

「げええ!？ 味方ごとかよ!？」

ガンダムXディバイダーは直ぐさま鰐ぜり合いを解いた。ミサイルはサザビー目掛けて集束した。

「小賢しい真似をッ」

サザビーは腹部の拡散メガ粒子砲でミサイル三発を全て撃墜し、ミサイルを撃ち地上よりこちらを見上げているヘビーアームズ改を一瞥した。

「多勢に無勢か。あの男もやられたか……」
ゼクス

シャアは撤退しようとした。

「逃がすかよオ！」

背部のスラスターを吹かし、撤退しようとするサザビーに肉薄するガンダムXデバイダー。

「この勝負はお預けだ、少年」

サザビーはビームショットライフルを構え、拡散ビームを撃った。

「ううおッ!？」

ガンダムXデバイダーは咄嗟にシールドを構えて防弾した。しかし、それがタイムラグになり、サザビーはステージ外に撤退していた。

「逃がしちまったか……」

操縦桿を握る右手の人差し指をしきりに動かし、苛立ちをそれで滲み出していた。しかし、横にいるティファがボソツと呟く。

「ガロードが、無事でよかった……」

「んあ……ま、まあな！」

鼻の下を人差し指で摩り、明らかに照れていた。ティファも自然と笑っていた。

±麗Side±

ジャステイスの機内で、もう打つべき手を打ち尽くした麗が、モニターに映るマスターガンダムを茫然と見つめていた。

(……こうなったら、正攻法しかない！)

ビームライフルをマスターガンダムに向け、尚も牽制した。

「ふん、つけあがるでない」

マスターガンダムは横にステップを踏みつつ、じわじわとジャステイスに接近した。

「そこね！」

ジャステイスは不意にファントウム00を射出し、マスターガンダムに突撃させた。しかし、ジャステイスはそのままビームライフルでの牽制を続けるかと言えばそれは間違いだった。ジャステイスはファントウム00を追い掛けるように、しかし体を水平にしながらアンビデクストラス・ハルバードを構えた。

マスターガンダムはファントウム00が正面から迫っているのに気付き、

「読めとるわ！」

敵の獲物を狩れば戦力を削ぎ落とせると判断し、鞭状のマスタークロスを構える。突撃をやめないファントウム00はフォルティスビーム砲を撃ってきたが、薙ぎ払うマスタークロスに相殺され、ファントウム00本体もろとも真つ二つにされた。しかし、これはジャステイスの思う壺だった。

「たあああッ！」

アンビデクストラス・ハルバードを突き立て、続いて突進してくるジャステイス。

「愚か者！ その程度！」

マスターガンダムは怯まずに返し薙ぎをお見舞いするが、ジャステイスもすかさずシールドをマスタークロスにくれてやった。シールドはあさつての方向に飛んでいき、ジャステイスはマスターガンダムの脇腹部を貫いた。そのまま真つ二つにしようとサーベルを動かすが、マスターガンダムの反応の方が速かった。上空に飛び上がり、右脇腹にスパークを走らせているマスターガンダムはやむなく撤退した。ファントウム00を失ったジャステイスには、マスターガンダムを追い掛けられるほどの推力は無くなっていた。

「トロワ、ガロード、今日はありがと！」

「へっへっ、どうってことないってね！」

「……自分の役割を果たしたただけだ」

…トロワ、相変わらず素直じゃないのね。

「それじゃあ、また。二人とも、元気でね！」

「おい、ティファは抜きかよ……」

あ……。

「あ……。てか、まだ連れてたの？」

「う、うるせえ！ 余計なお世話だ！」

「へいへい、ぞっこんって奴ねッ」

どこかの牧師さんの言葉を借り、場を和ませてしまった。ガロ―ドは私とティファにからかわれ、あーもうッ！ と顔を真っ赤にしていたが、あんまり嫌そうには見えなかった。

「……それじゃあ改めて、三人とも元気で！」

「おう！」

「……また今度……」

「……」

……あのー、トロワ君ー？

「……」

「……」

「……………」

片眉を上げたつきり、反応を見せなかったトロワ。ホントに無口なのね。

ファントム00を失ったので航行能力は下がってしまったが、飛べないわけではない。ちゃんと時空トンネルまで行き着き、次の目的地に向かった。

STAGE 18：白銀の守護剣（前書き）

今回は他の作者さんの作品のガンダムが友情出演します。出典等は後書きに記しました。

STAGE 18：白銀の守護剣

リボonz Side †

「全く、仕方がないね」

リボonzは敗れた東方不敗とシャアを小ばかにするように吐き捨てた。モニターに映る彼らに疲弊の顔が見て取れる。

「今度は僕が行くしか無いね」

服装を正し、モニター室から出ようとするが、出口にギム・ギンガナムが腕を組み佇んでいた。

「まだデビルガンダムとやらのエネルギーが貯まっていないみたいだが、どうやらステージのストックはもう残っていない」

「心配いらないよ。僕が特設ステージを用意したよ」

「ほほう、小僧の割りには周到じゃないか」

皮肉を込めた笑いをいれるギンガナム。リボonzはそんなギンガナムを一瞥もせず目の前を素通りし、無言で自機に向かった。

「相変わらず連れねえガキだな」

気にくわないといった顔を隠しもせずリボonzの歩いていく背中を一瞥し、自分もターンXに足を運んだ。

主 薫Side†

：中破したベルティゴでトンネルを駆ける。とりあえず、初めてボロ負けしたな。

この薫、一生の不覚。

と言うと大袈裟な気もするが、今の心境を表すのには概ね外れていない気もする。

さて、トンネルを抜けた。STAGE5と同じステージで、ビルやら何やらが沢山建っていた。しかも今俺の機体は、ビルの屋上に建っていた。次の機体は……

『ZZ-X200DAガンダムトロイメント』

とコンソールに出た。武装を見ると、

大型ビームライフルx2

独立機動ユニット『ナイトゴント』x12

とあった。前者は言うまでもないが、後者が謎だった。詳しく見てみると、どうやらこれも前回に同じくビットらしいが、今度はビット自身がビームを出すのではなく、ビットがビームを反射するみたいだ。

「俺に使いこなせんのかよ……」

とぼやく間もなく、味方さんが来た。

「……あの、もしかして、カオルさんですか？」

V2ガンダムであった。ウツソ君か。

「おお、久しぶり。また会ったな」

「またお願いします。それにしても、コロコロ機体を変えてますね……」

「変えてるっていうか……変わるって言った方が正しいかな」

と他愛のない話をする暇もなく、向こうのビルの上に羽根付きのガンダムが、残りの二機のガンダムが下に着地。

「カオルさん、行きますよ！」

「おうよ！」

仕方ねえ。ビットにばやいてる暇はない。とりあえず、羽根付きのガンダムにビームライフルで牽制する。あの羽根付き、どこかで見たことがあるな、と考えていたら、ふと思い出した。あれ、ヒイロの乗ってたウイングゼロじゃないか。あれも恐らくはコピーか……。

ウイングゼロはビームをさっとかわし、バスターライフルを構えてきた。

「……やってみるか」

剣のようなフォルムをしたナイトゴントを、背部バックパックから四基射出した。ウイングゼロは構わず放ってきた。

「今だ！」

ナイトゴントを操作し、ビームの予測軌道上に一基待ち構えさせた。ビームはナイトゴントに命中したが、データ通りビームが反射し、ウイングゼロに翻った。ウイングゼロはすぐさま照射をや

め、咄嗟にシールドを構えてなんとか防弾したが、シールドは大きく焼け爛れた。

「すげえ……。これが、ガンダムトロイメントのナイトゴースト……」

こりゃあ使える。このままライフルで撃ちまくるぜ！

ガンダムトロイメントは引き続きライフルでウイングゼロを牽制し、動きを制限していた。ウイングゼロは迂闊にバスターライフルを撃てず、近付こうにもライフルで牽制され、膠着状態に陥っていた。

一方V2ガンダムは、アサルトバスターパックを装備し、大振りな火器の火を吹かせていた。

「そこ！」

陸戦型ガンダムにメガビームライフルをぶち込み、右手に持ったミサイルランチャーを焼き払った。そこに、ストライクのビームライフルが割り込みをかける。

「そんなもの！」

メガビームシールドを展開し、いとも簡単に防弾した。防弾に成功してすぐに、陸戦型ガンダムに対しミサイルポッドの火を吹かせた。陸戦型ガンダムは重そうにステップを踏んで回避する。

「そこだ！」

右肩部から伸びたメガビームキャノン照射する。見事陸戦型ガンダムに命中し、爆散した。しかし、またもストライクのビームライフルの横槍が入る。

「だあッ……」

左肩部の増加装甲が損傷し、風穴のようになった被弾部。

「ええい！」

増加装甲をパージし、右手のメガビームライフルと左手のメガビームシールドはそのままに、他の火器を残らず捨てた。ストライクに向き直り、メガビームライフルを構える。

「そこだ！」

通常のビームライフルとは段違いな威力を誇るメガビームライフルの弾頭は、虚しくもストライクには命中しなかった。ウツソは苦虫を潰したような顔をし、一度肝を座らせようと無言になった。

±薰サイド±

：というわけで、トロイメント本体の未だ被弾箇所がゼロという驚異的な性能を誇るナイトゴントだが、相手がビームを撃つてくれないと、こちらのまともな攻撃武器はビームライフルだけというじり貧状態に陥っていた。

（どうにかもつと自発的に攻撃したいものだが……）

ビームライフルだけでは足りない。これがトロイメントのピーキーさなのだろうか。

（こうなったら！）

呼び出しボタン。この存在をすっかり忘れていた。ふとそう思っ
て操縦桿の脇にあるボタンをポチッと押した。

「アムロさん！」

「久しぶりだな、カオル」

どこからともなく、アムロさんのガンダムがトロイメントの左
脇に降り立った。

「今回は、俺にちょっとした作戦があるんす」

「なんだ？」

ガンダムはひそひそ話を聞くような姿勢になり、アムロさんに
作戦を伝えた。

「なるほど。だが、カオルは大丈夫なのか？ 負担じゃないかい？」

「やってみます」

「じゃあ、そういうことなら。フィン・ファンネル！」

「ナイトゴースト！」

作戦を伝え、フィン・ファンネル2機とナイトゴント4機を射出し、ウイングゼロを包囲した。

「アムロさん！」

「ああ」

遂にフィン・ファンネルがウイングゼロに火を噴く。ウイングゼロはバックステップを踏む。ビームが外れる。しかしそのビームは、予め待ち伏せておいたナイトゴントに入射・反射し、ビームが再びウイングゼロに牙を向けた。ウイングゼロはやむなくシールドでガードし、事無きを得た。のは幻想で、背後にもう1機のファンネルが待ち伏せていた。ファンネルはすかさずガードの硬直を突き、ウイングゼロに命中した。

貫通したビームはまたもナイトゴントに入射・反射する。それがウイングゼロに命中する。ビームが地面に当たるなどして消える場合も考えてファンネルは新たにビームを撃つ。これを延々と繰り返し、ウイングゼロを蜂の巣にしていた。

人型の原型がそろそろわからなくなってきたところで、ウイングゼロは爆散した。

「考えたな、カオル」

「はい。ですが、結構骨が折れました」

「言っただろう。負担にならないかと」

アムロさんは苦笑いしながら次の目標を探した。すると、目に止まったのは味方であるV2ガンダムだった。

「あんな小さなMSで……」

確かに、V2ガンダムは ガンドムの背丈の三分の二程度しかない。なのに、武装は ガンドムに負けず豊富。ということだろうか。

第五世代型MS。V2ガンダムはそのカテゴリにある。従来世代型MSの平均である18〜20m級とは違い、15m程しかない背丈でも、4000KWほどの出力を持つ機体も珍しくはない。

V2ガンダムはその有り余る出力が光の翼となって発散され、不可視の鎌鼬かまいたちはストライクの装甲を焼き切った。

「これが、光の翼……」

V2ガンダムの未知の力にウツソ本人も呆気に取られた背後で、胸部を大きく横切る装甲の裂け目からストライクが爆散していた。

「ウツソ、大丈夫か？」

「はい、こちらも健在です」

ウツソが明るく答えたところで、彼は隣にいる ガンドムを訝った。それを察してか、アムロが丁寧にも自己紹介した。

「ガンダムのアムロ・レイだ。よろしく」

「ウツソ・エヴィンです。こちらこそ」

「さあ、挨拶は終わりだ」

「え、どういことですか、アムロさん」

「いや、俺は何も言っていないが」

ウツソとアムロが不毛なやり取りをする中、薫は独り黙り込む。
アムロの声とは似ているようで似てない、人の神経を逆撫でするようなこの声は……

「ギボンスか!？」

「……覚えておいてもらいたいね。ギボンスじゃなくてリボンスだよ」

「んあ？　しょうがねえな、覚えといてやるよ、ディボンス!」

「言葉が通じないみたいだね。よもや人類はここまで堕ちていたとは知らなかったよ」

相変わらず薫の神経を逆撫でする口調でフアングを射出するリボ
ィンズガンダム。背後には、ターンXとサザビーが続いていた。

「あの機体、シャアか!」

「アムロか。ここで会ったが百年目、とでも言っておこうか」

サザビーはファンネルを数基射出し、ガンダムに向かわせた。

「ここの世界でも敵となるか、シャア!」

「君とは決着をつけたかったのだよ、アムロ」

ガンダムはファンネルの雨を横ロールを繰り返しながらぐり抜け、右肩のビームサーベルを抜いた。ピンクのビームの刃を発振し、サザビーに斬りかかる。

「地球は腐りきっている。またティターンズのような組織が生まれてもいいのか!？」

サザビーもビームトマホークをシールドから抜き、ガンダムのビームサーベルとクラッシュする。

「人間は過ちから学び得ることができる。俺はそれを信じている!」

「それは違うな。連邦は曲がりなりにも不敗の歴史を辿っている。彼らは何も学び得ることはしない」

「だがそれでも、ティターンズは滅びた!」

ガンダムは鏝ぜり合うサーベルをバチツと離し、一旦距離を置いた。

：またも来襲してきたギボンスやらディボンスやらのガンダム。こちらのトロイメント同じビット持ちだが、性格は正反対と言っていいほど違う。この勝負、果たして収束するのだろうか。

ファンングとやらがトロイメントを包囲してきた。しかし、ナイトゴイントを早々と展開しては弱点を看破されてしまう。ここは素直に回避だ。

「その背中にある十二本の剣は無用の長物なのかい？」

「うるせえ。秘密兵器なんだよ」

「じゃあ温存するといいよ。それまで君が持つのならね！」

リボーンズガンダムが左手にサーベルを持ち、突撃してくる。トロイメントの両手のビームライフルでビームの矢を降らせるが、斜め前に回避してくるだけで焼け石に水のようなようだ。

「君がそんなに射撃をしたいなら、相手してあげるよ。リボーンズキャノンでね！」

ディボーンズがそう言うと、ガンダムがくるりとケツを向けてきたかと思いきや、ゴークルアイの、別の赤い機体に変身した。

「……わざわざ変身『しなければならぬ』理由はあるの？」

ふとこんな疑問が浮かぶ。その疑問も晴れぬまま、リボーンズキャノンとやらは両肩部のビームキャノンを交互に連射してきた。

「おつとつといー！」

横ステップを繰り返してビームを回避し、ビームの流れ弾は地面を焼く。

「いつまで避け続ける気なんだい？」

トロイメントがジグザグと回避する一方で肩のバインダーはなお

も火を噴き続ける。

（ナイトゴーストを使うのはまだ早い！ 大技を使ってくるまでは……！）

背中の十二本の剣はまだ刺さったまま。ナイトゴーストを出し渋る薫。トロイメントはビームライフルを撃つが、いとも簡単に回避され、当たる気配もない。

「そろそろ消えてもらおうか」

両バインダーを寄せ、砲門に光がほとばしる。

（来るか？）

トロイメントの動きを止め、様子を伺う薫。
バインダーからは砲門には収まりきれなかったほどの極太のビームが照射される。

（ターゲットは……あの赤い奴だ！）

薫はロックをサザビーにも定め、ナイトゴーストの反射方向を調整した。

「ナイトゴースト！」

4基のナイトゴーストがトロイメントの前面に展開し、ビームが一直線に激突する。ビームが60度ほど折れ曲がり、今度はサザビーに一直線に極太ビームが飛んでゆく。

「な……」

リボンスは言葉を失った。極太ビームの横槍を入れられたサザビ―は、ビームトマホークを持った右半身が焼き払われ、機体の各所が爆発し始めた。

「ええい、思わぬ邪魔が入ってしまったか！」

右半身が照射され続けるサザビ―の頭部が開き、内部から球形の脱出ポッドが飛び出した。極太ビームの光に紛れ、ポッドは消えてしまった。

「名付けて、反射衛星砲だ！」

ビームの照射が終わろうとする時、してやったりの顔全開に叫んだ薫。

「……人間にしては味な真似をする」

味方機が大破してなお乾いた笑いをあげるリボンス。

「てめえ、ビームが反射したのがわかっててなんで照射をなかなかやめなかった？」

味方がやられても顔は冷ややかなままのリボンスに薫が噛み付く。

「知りたいかい？」

「……何だと？」

自分の質問に答えるどころか、逆に自分の気持ちを聞かれ、虚を突かれたように片眉を上げる薫。

「僕の目的は世界を恒久和平に導くことさ。イノベーターである僕にしかできないことだよ」

「インベーター？ 80年代に流行ったあのゲームのことか？」

「君たち人間は争いの歴史を繰り返す。実に愚かだとは思わないかい？」

薫の聞き間違いをスルーし、今度は薫に問い掛けるリボンズ。

「てめえは人間じゃねえのかよ」

「もちろん。さっきも言ったよ、僕はイノベーターだって」

「インベーター……侵略者か」

「僕たちは下等な人類に賢く生きるための道標をわざわざ提示しているんだ。この意味がわかるかい？」

「侵略者を騙る奴が何言ってやがんだ」

なかなか噛み合わない会話が続く。

「逆に従わない者は排除するということだよ」

「……でえ、仲間がやられてもあ、そうやってヘラヘラしていられるご立派な理屈は何でございましょうお？」

おちゃらけた口調で、なけなしの皮肉を力の限りリボンスにぶっかけた薫。

「利用させてもらっているだけだよ。戦いを好む人類など愚かだ。生きる価値すらない。そんな人類を少しでも淘汰できる戦いというのなら、僕は喜んで参加するよ」

リボンスガンダムは踵を返す動作をし、離脱しようとする。

「逃がすか！」

ガンダムトロイメントは背を向け離脱しようとするリボンスガンダムを追う。

「ファング！」

リボンスガンダムは振り向きもせずにファングを射出し、トロイメントを攪乱した。

「ナイトゴント！」

ガンダムトロイメントも負けじとナイトゴントを射出し、ファングのビームを迎撃する。ファングが第二射を撃ってくるかと思いきや、ファングはナイトゴントに特攻を仕掛けてきたのだ。PS装甲が施されていないナイトゴントは、ファングの捨て身の特攻を受けて損傷し、機能不全に陥ってしまった。

「こんなことが……！」

しかし、リボーンズガンダムはそれ以上の攻撃はしてこなかった。

ホウツソ Side ♪

V2ガンダムに比べて二倍弱もある巨躯のターンX。その巨躯が分裂し、オールレンジ攻撃を仕掛けてきた。

「体が分裂した！？ ザンスカール帝国の新型なの？」

ザンスカール帝国のMSのゾロも、上半身と下半身を分離できる構造を持っていたため、その発展型とも考えられなくもない話である。「古代のMSがこのターンXについてこれるかな？」

「遊ばれているのか！」

ウツソの言葉の通り、V2はターンXのオールレンジ攻撃に辟易し、弄ばれているように見えた。

「見かけ倒しだなあ。所詮は古代のMSということかな？」

「ッ、このお！」

右手に持った通常のビームライフルでターンXのシールド部を撃ち抜き、爆発が起こる。

「ほほう。その腕、恐れ入る」

言葉は褒めているが、声は皮肉だったギンガナム。ふと左手を過ぎ行く機影に気付き、そちらの方に目をやると、サザビーの脱出ポ

ツドだと確認した。

続いて、リボーンズガンダムも撤退しているのがわかった。

「あいつらが深手を負ったのか？　ここは一旦退くか」

ターンXのバラバラになったパーツがかき集まって元の人型に戻り、ステージ外に離脱した。

「……終わったの？」

「ソウミタイ、ソウミタイ」

撤退していくターンXを見上げ、ハロも元気よく返事をした。

白亜の　ガンダム、青空のような色をしたV2ガンダム、白銀のガンダムトロイメントが、エジプトにあるアブ＝シンベルともピラミッドとも見える黄土色の建物に並んでいた。

その足元に、三人の男が立ち並んでいた。

「シャアの尻尾を掴んだが……取り逃がしたか」

「すみません、俺が横槍を入れたばかりに……」

「いや、いいんだ。あれが無ければ勝負はわからなかった」

アムロが言う『あれ』とは、薫の名付けた『反射衛星砲』のことである。

「……ディボンスが気になることを言ってたな」

「ディボンス……あのガンダムに乗っていた男のことか？」

「うん。どうやら向こうの勢力は一枚岩ではないらしいんす」

薫の言葉に、二人が続いた。

「それは俺も、少しは感じていた」

「僕もそんな気がしました」

「けど、ただ思想がバラバラだけではないような気がするんだ」

「ああ、彼らに共通するのは、自分の思想に合わない者を排除する、行き過ぎた排他的思想者ということだ」

「戦わずして相手に理解を得てもらおうという考えはないのかな？」

「彼らは他の人間に対し一種の絶望を持っている。自分をわかってくれない人間を信じることができないんだ」

アムロは話を続ける。

「だが、人間はそんな隔たりをも乗り越えて生きていけると、俺は信じている」

アムロの目は揺るぎない強い意志を持ったものだった。

「……すまない、変なことを言ってしまったね」

後頭部に手を当て、表情を崩すアムロ。

「人類の抹殺……インベーター……」

壮大な間違いをしている薫だが、その表情は真剣だった。

「とにかく、先を急ごう。事が大きくならないうちに」

「そうですね」

薫とウツソがアムロに続き、それぞれの自機に戻っていこうとした時。

「ハロ！ アムロ！」

「これはハロじゃないか。君が持っているのかい？」

V2ガンダムのコクピットから飛び出したハロを抱え、ウツソに訊くアムロ。

「ええ。ご存知なんですか？」

「知っているも何も、これは俺が作ったものだ。改造はいくつかさ
れているみたいだが、外見はほぼそのままだ」

アムロが懐かしむ様子を見て、ウツソが呟いた。

（もしかしてこの人、ガンダム伝説の……？）

ウツソのいる宇宙世紀では、アムロたちの乗ったガンダムの活躍は伝説として語り継がれているのだ。

それぞれのパイロットを乗せた三機は、例の黄土色の建物から三様の方向に散り、次の戦場へ向かったのだった。

STAGE18：白銀の守護剣（後書き）

ガンダムトロイメント

出典：『機動戦士ガンダムSEED BlumenGarten』
シリーズ

作者名：後藤正人さん

作者ご本人様の許可を得て友情出演させて頂いております。決して無断ではありません。

STAGE 19：黒いユニコーン（前書き）

今回も友情出演があります。例によって、出典等は後書きに記しました。

STAGE 19：黒いユニコーン

士麗Side†

：リフターを失ったジャスティスでトンネルに突入。そういえば、薰は大丈夫なのだろうか。などと心配したが、次の敵が気になってそれどころではなくなった。

トンネルを抜けると、連邦所属の薄緑色のコンテナがいくつか並んでいる。ここはたしか、トリプル・ドムのステージと同じだったような。

すぐ右脇に味方機が到着したらしい。見てみるとイフリートによく似ていた。

「……こちらはジオン公国軍、ローエン・ガルフ中尉。そちらは？」

どうやらジオンの人らしいが、聞いたことないなあ。
自分の機体を見てみると、

『RX-0 ユニコーンガンダム2号機』

とあった。やだ、バンシイじゃない、これ。

「こちらはユニコーン2号機、網走麗です。よろしくお願いします」

「よろしく頼む。それにしても、不可解な世界だな」

「それは、同感です」

「先程、死んだはずのデメジエル・ソンネン少佐のヒルドルブが戦っていた」

「そうですか……」

一応、ローエンさんの所属は、私の知っているジオン公国軍みたいだけど、やっぱり知らないなあ。

すると、フリーダムと ガンダムが最初に降り立ったかと思えば、その後 ガンダムとV2ガンダムも続いて降り立った。

「えっ、二対四!？」

「まずいな。向こうは四機ともガンダムみたいだな」

「……こっちだってガンダムよ!」

ユニコーンモードとて、ガンダムよりは一回り大きいジェネレーターを積んでいる。怯んでなんていられない!

「行きますよ、ローエンさん!」

「自分のことはロウでいい」

ロウさんのイフリートもバンシイに続いた。

武装はビームマグナムとビームバルカン、ハイパーバズーカ。マグナムは必中で当てるとして、バルカンで牽制しよう。

「いくわよ、フリーダム!」

四機の中でHPが一番低いフリーダムをロックオンする。バンシイのバルカンに火を噴かせ、フリーダムを動かした。

「そこね!」

ビームマグナムを構え、発射した。プラズマのような色をしたビームがフリーダムのスカートアーマーを掠めることに成功した。目視では命中していないように見えたが、どうやら原作でギラ・ズールを命中せずとも掠めただけで撃破したマグナムだけはある。

「いける！」

もう一度ビームマグナムを構え、トリガーを弾く。今度は完全に避けられ、掠りもしなかった。

「なら！」

左手のビームサーベルを展開し、フリーダムにまっすぐ突き立て、突進する。

フリーダムはシールドを構え、ビームサーベルを受け止めた。そこに、脇からアラートが鳴る。ガンダムのバズーカとV2のビームライフルだった。

「ち！」

やむなくフリーダムと間合いを置き、仕切り直しをした。

✪ロウSide✪

イフリートはバンシイの後衛を担うことになったが、あまり芳しくなかった。

「この白髭、しつこく肉薄してくるな」

がイフリートに立て続けにハンマーを投げ付けてくる。何とか回避しているが、どれもストレスだった。

イフリートも負けじとマシンガンを放つが、は巨軀に似合わぬ軽やかさで回避する。

だが、マシンガンを撃つ他なくマンネリ化していた。

（まずいな、相手のペースに乗せられている。これを切り抜ける方法は……）

などと思案を巡らせていると、マシンガンがジャミングを起こしてしまった。

「またか！」

ジャミングしたマシンガンを に投げ付ける。すると、マシンガンは見事 の頭部に命中した。更に、打ち所が悪かったのか頭部も外れてしまったのだ。

「ラッキーか。このまま畳み掛ける！」

頭部が外れて右往左往する の隙を見、ビームダガーを抜いてに接近する。

「運が悪かったな」

巨軀の の懷に取付き、ビームダガーを突き立てた。しかし、すんでのところで がビームサーベルでビームダガーを受け止めた。

「ならこちらだ！」

左手にヒートソードを持ち、のマルチパスサイロを串刺しにした。は脱力したようにうなだれ、イフリートがヒートソードを抜くと、そのまま仰向けに倒れた。

「次は」

ビームダガーをしまい、バンシイの直掩に向かった。

美麗Side†

：三機に囲まれた自機バンシイ。さすがに三機となるとどう撒けばいいかわからない。多分、ロウさんはとの一騎打ちの最中。バンシイがロックを集めないといけないんだけど……。

とりあえずビームマグナムを再び構え、フリーダムに火を噴かせた。今度も掠りもしなかった。

「どうすりゃいいの！」

ガンダムやV2の方にも注意を払いつつ、吠えた。すると、V2がこちらから注意を反らしたかと思ったら、イフリートのヒートソードをビームシールドで受け止めた。

「え、ロウさん、を倒したの？」

「運がよくてな」

とだけ返事を返したロウさん。

「よし、これで二対三ね！」

収納していたビームサーベルを再び展開させ、フリーダムに突撃する。フリーダムは羽根部にあるバラエーナ砲を噴かせた。

「そんなもの！」

シールドを翳し、防弾した。防弾の衝撃で少しノックバックしたが、構わず接近した。

「てええや！」

ビームサーベルを振り上げ、素早く振り下ろす。フリーダムの左側の羽根がこつそり狩り取られ、姿勢制御がたどたどしくなった。

「終わりよ！」

サーベルを突き立て、フリーダムのコクピットを貫いた。串刺しの状態からすぐに斬り抜け、フリーダムの腹部が左半分割れる。程なくして、斬り抜けたバンシィの背後で爆散した。

「……」

バンシィがデストロイモードになるのが怖い。魂を食われてしまいそうだからだ。このままユニコーンモードで倒せればそれが理想的だが……。

フリーダムを撃墜したあと、そんなことを考えてしまった。

「そちらも健在のようだな」

「ロウさん！」

バンシィと背中合わせになるように並んだロウさんのイフリート。残るV2ガンダムとガンダムを睨む。

「私がガンダムの相手をします！」

「了解した。その前に、何か飛び道具を貸してくれないか？ 先ほど、マシンガンを失った」

後ろに手を伸ばしてきたイフリート。ビームマグナムは引き続き使いたいし、こちらを貸そう。

「じゃあ、このバズーカでいいですか？」

「上等だ。すまないな」

バズーカとカートリッジをイフリートに手渡した。

「撃たれないで下さいね」

「そちらもな」

背中合わせだった私のバンシィとロウさんのイフリートが散開する。

ガンダムをロックし、ビームマグナムを構える。プラズマの塊のようなビームがガンダム一直線に撃ち放たれた。さらにと横口で回避され、装甲を持っていくことはできなかった。

「やっぱり、接近しないと……」

ビームマグナムを腰部スカートアーマーにマウントし、ビームサーベルを発振した。

ガンダムも抜刀してくるかと思いきや、そのままの体勢で背部に並ぶフィン・ファンネルを展開してきた。

「厄介なものを……」

バンシイにも搭載されているNT-Dを使えば、サイコミュ兵器はこちらの意のままとなるが、発動させたら何が起こるかかわからない。そもそも、私任意の発動は無理。ならば、このまま突撃するしかないと開き直り、操縦桿を握る手を離さなかった。

「バンシイに追い付いて？ ええ！？」

半ばやけくそになり、ファンネルに気をつけながら不規則にガンダムに接近する。

- 背中のバックパック下部から顔を出しているスラスターノズルが多方向に向くと、バンシイはコクピットにいる麗に多方向からGをかける。

「んぐうつ……！」

Gに耐えつつ、操縦桿を必死に動かす。これを動かせば動かすほど、自分の体に負担がかかっているというのは百も承知している。いつそのこと手放してもいい。けれど、東方不敗などの本当の敵が見えてきた現在、ここでやられるわけにはゆくまいと、自分の体に鞭打つように操縦桿を動かして、ガンダムの展開するファンネルが作り出す桃色の網を掻い潜る。

「くらええ！」

ビームマグナムを ガンダムに構え、銃口で刹那の収束が終わると、青白い光線を噴いた。偶々命中したシールドが爆発し、ガンダムがよろけた。

「もらった！」

ビームトンファアを突き立て、 ガンダムを串刺しにせんとバンシイが猛突進する。

「……甘い！」

「えっ？ うわっ！」

ガンダムから聞こえた声に一瞬驚いた麗だが、それがタイムラグとなり、ガンダムの反撃ニューハイパーバズーカを受けてしまった。

「ううっ！」

バズーカを受けて後ろへ押し出されたのを、後ろに倒れまいと踏ん張ると、バンシイの両足は地面を激しく削り、数メートルの轍を残した。

「誰なの、あれに乗ってるのは？」

「また会ったね、麗」

「リボنز・アルマーク！ あんたが何で ガンダムに！？」

「実験だよ。この機体の素材は100%DG細胞でできているんだ。その起動実験さ。ゾンビ兵ではなく、生体ユニットがパイロットとなれば、理論上DG細胞本来の力を発揮できるんだ」

そうリボンスが説明している間に、あらぬことか、ガンダムのシールドがレフトアームから六角形の模様を生成しながら再生し、完全に元通りになっていた。

「再生、増殖、進化……」

麗は、咀嚼するようにDG細胞の三大原則を列挙した。

「よく知っているね。君はこちら側のスパイなのかい？」

「いいや、スパイじゃなくても結構有名よ」

「それに、このガンダムにはどうやらサイコミュというものが付いてるみたいじゃないか。強大なパワーを感じる……！」

確かに、地球に落つこちようとしてた大きい『石ころ』一つ、押し返した機体だもの。麗はそう肯定しつつも、一時も油断できなかった。

「薫とやらにも通告したけど、君はこちらに来る気はないのかい？」

「金輪際、ないっ！」

「愚かな人間だ。その決断で戦禍がどれだけ増えると思っているんだい？」

「種をまいた張本人の言うことか！」

黒い一角獣、バンシイは、体じゅうに血液のように黄金の燐光を浮き立たせ、ガンダムに突撃した。

「ファンネル」

ガンダムの背後を飾るマントのようなフィン・ファンネルを射出させ、バンシイを包囲する。

（だめ……もう少し我慢して、バンシイ！）

怒りに任せたら、おそらく確実に『NT-D』に移行する。麗は薄々感づいてはいたが、ニュータイプ専用機を目の前に、バンシイはウズウズしながら包囲するフィン・ファンネルを撒いていた。

「ふ。そのようなガンダムになり損ねた機体が、いつまで粘れるというんだい？」

フィン・ファンネルは、コの字形に変形して桃色のビームをしきりに放ち、バンシイのスピードに手こずっている様子はあったが、だんだんと追い付いてきている。バンシイも回避で精一杯のようので、攻撃ができないでいる。漆黒の一角獣がファンネルの網にかかるのも時間の問題だった。

「無駄な足掻きを」

ガンダムが逃げ惑うバンシイにビームライフルを放った。フィンファンネルに気をとられていたバンシイはビームライフルが左肩に被弾した。このヒットストップでフィンファンネルがハイエナの

ようにバンシイに集り、集中砲火しようとしていた。

「終わりだよ、麗」

勝ち誇ったような顔で集中砲火を浴びせようとした。
刹那、ガンダムの計器が煩く異常を知らせはじめた。

「なんだ……うっ！」

バンシイの放つ燐光が爆発し、辺りは目を塞ぎなくなるような黄金に一変した。

バンシイは、一角獣から漆黒の獅子に姿を変えた。鬣のような黄金のブレードアンテナ、より人間に近付いたフォルムをしたその姿はまるで、

「ガンダムに……変身した……？」

バンシイは無傷だった。フィンファンネルは、時を止めたように中空で停滞したままだった。

「どうした、ファンネル！ なぜ攻撃しない！？」

フィンファンネルのコントロールは完全に向こうに掌握された。それを証明するかのように、フィンファンネルは今度は ガンダムに矛先を向け、集中砲火した。

「ぐうおあっ！」

装甲がみるみるうちに剥がれ、小爆発した機関部からは真っ黒い

煙が止まらなかった。

「再生が追いつかないか……ちいい！」

リボンスは脱出ポッドを射出するため、シート of 脇にあるレバーを乱暴に引き上げた。満身創痕のガンダムの胸から球体のポッドが勢いよく射出され、ステージ外に離脱した。

「実験は失敗したか」

しかし、リボンスは含んだ表情をしつつ、ステージをあとにした。

トウサイド

敵のV2はアサルトバスターに換装し、右肩から伸びるビームキヤノン を炸裂させていた。陸戦能力なら部があるイフリートだが、火薬庫と化したV2に対し、回避で精一杯だった。

「迂闊な接近は危険か」

あまり得意でないロングレンジを強いられているトウ。先ほどバシィから受け取ったバズーカを右肩に担ぎつつ、砲撃のチャンス を伺う。

（牽制に一発撃ってみるか）

左手でバズーカを添え、弾頭が勢いよく射出されると、横に垂直移動していたイフリートが反動でノックバックし、轍ができた。弾頭 といえ ば、射出後程なくして散弾し、細かい鉛玉が四散した。

（散弾砲なのか。牽制にはもってこいだ）

四散した鉛玉は黒い雨のようにV2に降りかかる。イフリートは、ノックバックが止まると休みなくバズーカを打ち続けた。

（カメラを破壊できれば、上等か）

バズーカをイフリートに担がせたまま、スコープを覗むロウ。隙を見て抜刀しようと、今か今かとバズーカを撃ちつづける。五発撃ったところで、弾切れのサインが出た。カートリッジも併せてバンシイから受け取っていたので、背後にマウントしたカートリッジをバズーカに装填しようとしたところに、極太のビームが飛んできた。ロウは咄嗟の判断で右に回避するが、うっかりカートリッジを手放してしまい、ビームに焼かれてしまった。

「しまった！」

思わず声をあげてしまったが、間髪入れずにV2が接近してきているのに気付いたのはもうショートレンジに詰められた時だった。

（ならば、これを！）

片手間にパネルを操作する。コンソールには、『MB-system』と表示された。ビームサーベルを右手に目の前に突撃してきたV2ガンダムだが、サーベルがパワーダウンしたように拡散し、桃色の刃が消えた。

（隙あり！）

刃が消えて動揺している様子のV2に、右手に抜かれたヒートソ

ードを振りかざすイフリート。V2はあっさり回避し、距離をとった。

（そう簡単にはいかないか）

操縦桿を握る手が力み、ミノフスキー・ブレイクMBシステムの有効時間内の撃破に急いでいた。

（あと6秒）

イフリートを構わず突撃させようとするが、V2ガンダムは、背部からミサイルを多数発射させてきた。

（実体弾も積んでいたのか！）

降り注ぐミサイルを回避するため、やむなく突撃を中止し、バックステップを踏んだ。回避が終わると、もうMBシステムの有効時間は切れていた。

（まずいな……）

変な汗が出始めたのも自覚せずに、ミサイルの爆煙を睨むロウ。爆煙を切るように、またも桃色の極太のビームが飛んできた。イフリートは今度も右に回避するが、ロウは気が抜けない。

（次はどう来る……）

身構えていたイフリートに、放り投げられたようにメガビームシールドが中空を舞ってきた。

(……なんだこれは)

ロウの気が一瞬抜けてしまったが、それが仇となり、シールドからV字形のビームが飛んできたのに反応が遅れた。

何とか回避したが、レフトアームが欠損してしまった。バランスを調整しようと操縦桿から手を放した直後、V2がビームサーベルを抜いて飛び上がった。

(今度こそ、ここまでか……)

今までの悪運もここまでかと諦念に陥ったロウ。

しかし、その諦念は、V2の脇腹部装甲と共に破れ去った。

「……網走か？」

脇腹部をビームマグナムに撃ち抜かれてV2が前に倒れてくるのを右に回避し、俯せに倒れるV2を見送った。

バンシイはV2が倒れてもなお追撃をやめず、背部バックパックからビームサーベルを抜き、立ち上がり様のV2のカメラを粉碎し、休みなくビームトンファアを突き立て、胸部を串刺しにし、グリグリと装甲を抉った。

「……本当に、あの網走なのか？」

イフリートが付け入る余地もないこの状況に、ただ戦慄するばかりだったロウ。

原型もほば残っていないV2を投げ捨てるように放した黒い獅子は途端に追撃をやめ、鬣を折り畳み、黄金の燐光を放つ体じゅうのサイコフレームを収納した。NT-Dが解除されたのだった。

「おい、大丈夫か？」

ユニコーンモードで突っ立ったままのバンシィに、接触通信で呼び掛ける。麗からの返事はなく、不安になるロウ。

（マシンに呑まれたのか、彼女は……）

黒いユニコーンは、イフリートが揺すってみてもピクリともせず、人が乗っている気配すら消しているようだった。

（……まさか……）

死。ロウが思い付いたのはこの言葉だった。

一方のバンシィのコクピット内。その薄暗い全視界モニターのコクピットの中に、確かに麗はいる。だが、その目は虚を眺めており、見つめ返すこともしない、ただ吸い込むだけのその眼差しは、まるで死人だ。ロウの呼び掛けも耳に入らず、ただそこにいるだけだった。

マリボonz side

「よお坊主。情けないザマだな」

腕組みし、デッキに寄りかかるギム・ギンガナムが、脱出ポッド

から出てきたリボンスをからかった。リボンスは無言でギンガナムを睨み、「おーっと、失敬失敬」と両手の平を上げ、気持ちの籠っていない謝罪をした。

「……どうやら、もうパワーは貯まったみたいだ」

腕を組み直し、用件を伝えたギンガナム。

「計画通りだ。あの東方不敗という男も、さぞ喜んでいるだろうね」

「貴様は何とも思わんのか？」

「思わないわけじゃないけど、彼が一番、デビルガンダムに思い入れがあるみたいだからね」

それもそうか、といったような相槌を打ち、愛機ターンXを見上げるギンガナム。

「御大将はいいのかい？ DG細胞を組み込まなくて」

ターンXを見上げているギンガナムに、リボンスが上目遣いで問う。

「必要ない。このターンXには既に、ナノスキンがある」

ギンガナムは組んでいた腕をほどき、デッキを離れた。

STAGE 19：黒いユニコーン（後書き）

この話では、弐本差さんの作品、『機動戦士ガンダム Z E O N
' S O L D I E R 』より、主人公ローエン・ガルフ氏と彼の愛
機イフリートが友情出演します。

これも無断ではなく、ご本人様の許可をもらっています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0888h/>

デビルガンダムの野望

2011年12月27日19時53分発行